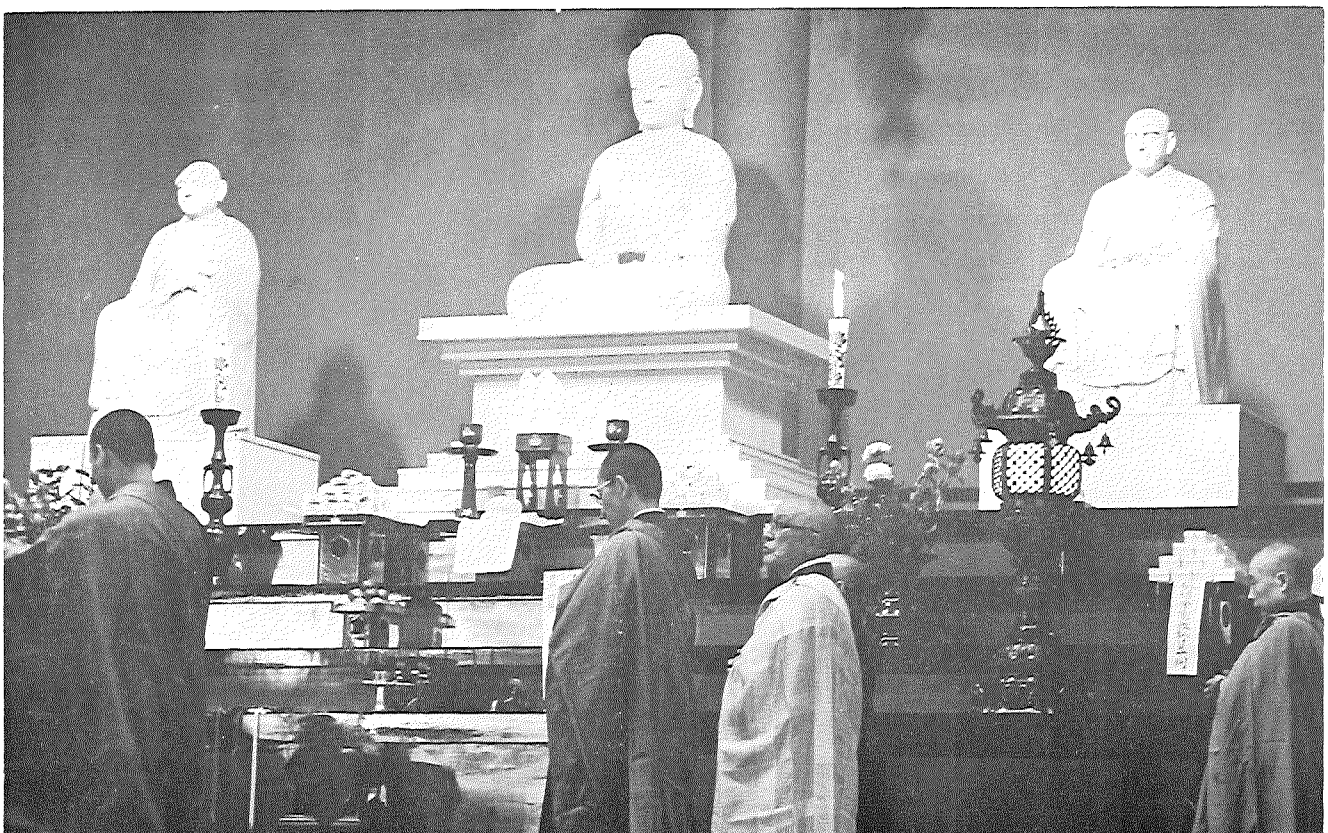
十五年のあゆみ

柏倉図書館

福　聚　殿　全　景



一仏両祖尊像開眼法要

はしがき

四年制大学を開校して十五周年を迎える機会に、「本学開学十五年の歩み」といったものをまとめ、過去を顧み、将来の発展のための参考に資し得るならば、十五周年を記念する意義ある企画と考えて、この小冊誌を刊行することにした。

本学創設前後の苦難の道は、先年福聚殿落慶行事を記念して発刊した「栴檀学園壱百年史」に詳しいので、その時点の事項はなるべく省略或いは大略に止め、ここ数年前後の本学の変貌の状況が詳述されて居ると思う。

本学開設当時一般に社会福祉という概念は、憲法に保証される人権平等の権利としての福祉、弱者個々の救済を目的としたものをとらえ、所謂施設中心的な発想であった。

本学は物の豊かさや、社会的所遇の向上のみで、人間の本当の救いが出来るものではなく、人の生きがい、真のよろこびは、究極において「宗教」による以外にない。この意味において、弱者強者の差別はなく、すべての人間が平等に福祉の道を追求すべきものであるという立場をとって居る。従って福祉の内容は、勿論当初の施設中心的なものを含め、人間福祉につながる社会的事象を、教育研究の対象として拡大、これを社会に還元して、社会福祉の向上発展に寄

与することを志向して居る。社会教育学科、福祉心理学科の増設、社会福祉学科のコース別課程、産業福祉学科の取得資格の拡大と、これに伴う教育研究設備の拡充に力点を置いて今日に至っている。こうした本学の教育研究の実情を、この小冊子に依って汲取り得らるるならば真に幸せというべきである。

尚この編集執筆は前の「学園壱百年史」と同様、山本林先生に一任し、山本先生の熱意と誠実とに依って出来たもので、深く感謝と御礼を申述べる次第である。

昭和五十二年十月五日

学監　菅　原　寛　一　記

東北福祉大学十五年のあゆみ

口　絵　福聚殿全景
一仏両祖尊像開眼

はしがき　学監　菅原寛一

目　次

序　章　栫檀学園小史……1
第一章　大　学　前　史……13
第一節　大学建設の構想……13
第一　棟方中学長の着想……13
第二　東北高等仏教学院……14
第三　東北仏教短期大学の構想……15
第二節　東北福祉短期大学設置……16
第一　朽木学園長来任……16
第二　社会事業短期大学の計画……17
第三　東北社会事業学校……18
第四　講堂兼体育館等の建設……19
第五　資金造成の苦心……20
第六　短大設置遂に成功……21
第三節　短大専攻科設置……23
第二章　創　設　の　時　代……25
第一節　第一号館（第一校舎）竣工……25

第一　大学昇格計画の推進……25
第二　資金繰り行詰る……25
第三　新校舎の規模……27
第二節　四年制大学の実現……27
第一　昇格の必要性……27
第二　四年制大学認可……29
第三　大学の内容……30
第三節　産業福祉学科増設……32
第一　増設の事由……32
第二　校舎増築……33
第四節　大学紛争始末……34
第五節　朽木学長の退陣……36
第三章　拡充の時代……38
第一節　大久保学長着任……38
第二節　充実から発展へ……39
第一　拡充への始動……39
第二　一号館増築……40
第三節　社会教育学科増設……42
第一　増設の理由……42
第二　増設の認可……44
第四節　仏教専修科設置……44
第五節　学園長再任……46
第六節　学生相談室とクラス担任制……47
第一　学生相談室……47

第二　クラス担任制……48
第七節　大学通信の発刊と「建学の精神」……50
第八節　仏教社会福祉研究所の開設など……52
第一　仏教社会福祉研究所……52
第二　東北福祉大学紀要……53
第三　日本社会福祉学会第二〇回大会……54
第九節　人事往来……55
第四章　発展の時代……57
第一節　学園整備計画の大要……57
第二節　運動場の増設……58
第一　大倉運動場……58
第二　第二次買収……59
第三　松島用地について……60
第三節　新校舎第二号館の増設……61
第四節　社会福祉学専攻科設置と定員増……62
第一　専攻科設置……62
第二　社会教育学科定員増……64
第五節　研究棟工事その他……64
第一　研究棟工事……64
第二　附属幼稚園の独立……65
第三　栴檀学園高等学校廃止……66
第四　講堂棟の改造転用……66
第六節　福祉心理学科増設……68
第七節　講堂兼体育館（福聚殿）成る……70

第一　建設の準備……70
第二　建設の規模……72
第八節　真魂を入れん……75
第一　真魂をここに……75
第二　一仏両祖尊像奉安……76
第九節　福聚殿落慶式……77
第一　落慶式次第……77
第二　福聚殿とは……78
第十節　栴檀学園壱百年史の刊行……80
第十一節　学生生活……81
第十二節　大学祭と施設児童球技大会……82
第一　大学祭……82
第二　施設児童球技大会……84
第五章　躍進の時代……85
第一節　第三校舎の建設など……85
第一　第三号館（第三校舎）の建設……85
第二　構内の美化など……86
第二節　新図書館造築……88
第一　新図書館建設の重要性……88
第二　新図書館の概略……89
第三節　大学院設置……91
第一　大学院開設の念願……91
第二　大学院認可……93
第三　社会福祉学科コース制について……94

第四節　大学後援会の活動……94
第五節　就職部の設置……96
第六節　第三体育館の建設……97
第七節　新校歌誕生……98
第一　本学園校歌の歴史……98
第二　新校歌成る……99
第八節　明日の東北福祉大学……103
あとがき……山本林……106
大学略年表……108
大学の組織……110
教員組織……111
法人機構と役職員……115

序章　栴檀学園小史

一

仙台市の西北、国見の森を背景にそそり立つ八角の殿堂福聚殿と、これを囲む一群の近代的建築、それが東北福祉大学である。福聚殿の寄せ棟の頂上にきらめく金碧の擬宝珠は、仙台周辺の高みから、ひと目でそれと目につくわが大学のシンボルとなっている。そしてこれこそ東北福祉大学の性格を明示し、その歴史を物語る象徴ともいうべきもので、われわれはここに大学の使命を思うと共に、更に進んで、仏教と福祉とのかかわり合いを、深く考えさせられるのである。

いうまでもなく、東北福祉大学は、学校法人栴檀学園の設立にかかり、曹洞宗立になっている。

二

東北福祉大学が、四年制の大学として設立されたのは、昭和三十七年であるから、開学以来今日まで、十五年を閲(けみ)している。しかしその設立者たる栴檀学園の歴史は、既に百年を超え、東北では最も古い学園の一つである。もとより学校法人の制度は、戦後に生れたものであるけれども、わが学園の実体は、これを求めれば、遠く明治八年の昔にさかのぼるのである。よって先づ栴檀学園史の概略を辿ることによって、東北福祉大学を理解する手始めにしたいと思う。

昌伝庵本堂

栴檀学園のそもそもの始まりは、明治八年に呱々の声をあげた僧職養成のための専門学支校であった。今から百三年前のことである。いまその創設の事情を知ろうとするならば、排仏毀釈という、すさまじいまでの疾風怒濤の時代について、少しく述べる必要があろう。

江戸幕府が成立してこの方、仏教はそれまでのような、政治的波瀾にもてあそばれることもなく、幕藩体制の中にすっぽり組み入れられたまま、無事泰平の夢をくり返して幕末に至った。従って平穏に慣れた仏教者の間には、見るべき気概もなく、江戸末期の新しい機運に立ちあがる活力にも乏しかった。個々にはすぐれた人物もいたが、全体から見れば、幕末の震天動地をよそに、消極退嬰のよどんだ世界に住んでいたのであった。されば新時代の到来を首をのばして待っている反体制の側からすれば、これを無用有害の存在とも見えたのであろう。幕末に至って、水戸の徳川斉昭が、神を敬い儒を尊ぶべきことを懇え、僧侶を国賊と呼び、寺院の整理を断行したことは有名であり、他にもこれに類似した現象は方々に見られるのである。

しかしそれが大きな破壊力をもって仏教界を襲うのは、明治新政府になってからであった。仏教排撃は、平田神道を奉ずる復古神道派によって推進せられ、明治元年三月の神仏分離令、引きつづき同年閏四月の社僧禁止令に始まる大弾圧は、従来幕藩体制下に安逸をむさぼっていた仏教界に対し、至大の打撃を与えた。

かくて神仏分離は単なる分離にとどまらず、排仏毀釈にまで発展してやむところがなく、全国到るところ寺院を破却し、仏像仏具を焼き捨てる暴状がくり返された。かくの如く日本全土にわたり排仏毀釈の嵐が吹きすさび、僧侶の還俗する者も少くなく、正にそれは仏教界の一大危機と称すべきものであった。

しかし仏教伝来この方千三百年、国民生活に深く根を下ろしたその力は、神道派の画策にも拘らず、遂にこれを抜くことが出来ず、一方仏教各派の幾多の先覚の奮闘によって、排仏の嵐はようやく鎮静し、次第にその信仰的、社会的地盤の恢復に向うこととなった。

明治初年における仏教界は以上のような状勢下にあった。而してこの失われた地盤恢復のためには、その使命を担うに足る多くの後継者、多くの活動家を養成し、仏教界全般に活力を与えることが必要であった。神仏分離を機に仏教界に見切りをつけ、還俗する者が相次ぎ、少なからざる僧侶を失った各宗派にとって、このことは遷延を許さぬ喫緊事であった。

飜って当時のわが曹洞宗を見るならば、諸種の事情から宗勢必ずしも盛んでなく、明治新政府からの公認もおくれ、ようやく明治七年三月に至って、宗名を称することを許されたのであった。従って曹洞宗としては、他宗に比較して、一層教勢不振の回復につとめねばならなかった。このようにして僧侶養成、僧侶教育のための機関の設置が痛感され、やがて永平・総持両本山の協力によって、明治八年曹洞宗専門学本校が東京に設立され、地方各地に専門学支校の誕生を見ることになった。

以上が専門学支校設立に至る事情のあらましである。

四

本学園の発祥たる宮城県専門学支校の設立は、先に記したように明治八年である。設置の場所は、仙台市荒町昌伝庵の境内で、同寺の庫裡の一部、二階建ての一棟は、創立当時の専門学支校の校舎と言い伝えられている。この校舎の坪数は延三十坪ぐらいで、さして広くもないが、当時宗勢回復の理想に燃え、使命を感じて集まった少数の師弟が、この中で寝食を共にしながら、きびしい修行を重ねた様子が想像されるのである。

五

明治二十三年七月三十日曹洞宗教育令が発布せられ、専門学支校は廃止となり、代って九月一日から小学林及び中学林が設置されることになった。同日更に「曹洞宗教育の方針」を発表し、その中で第一に「宗学僧侶に宗門思想を養成せしめること」を謳っている。

新制度による修業年限は小学林・中学林各五年。今日の制度でいえば、年令的には中学林卒業は短大修了に相当し、程度の高かったことが分る。

旧第二十五中学林校舎

校舎の所在地は不明であるが、仙台市東二番丁（北目町角）の宗務支局の建物は、或いは新制度の中学林及び小学林の校舎に使用するために建設されたのかも知れない。

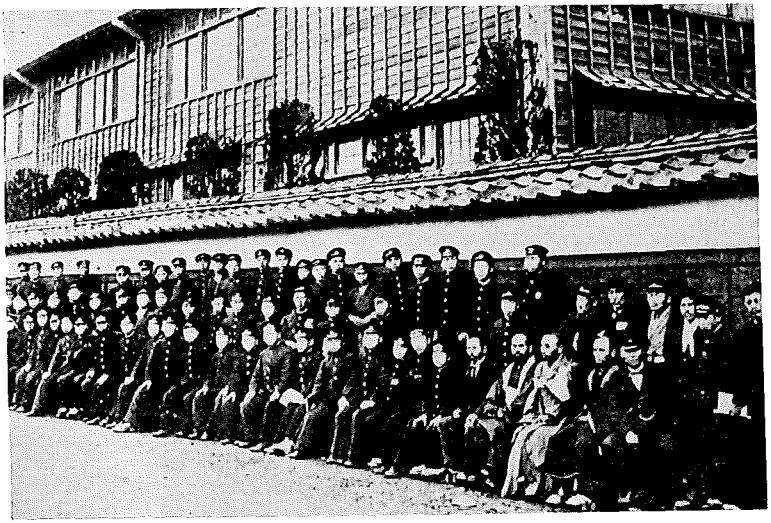
六

宗門教育第二次の改革により、明治二十九年曹洞宗第二十五中学林が創立された。校舎は仙台東二番丁宮城県宗務支局の建物を用いた。

改革の理由は、数年にわたる宗門の内訌により宗勢が傾いて来たこと、大学林以下の学科の程度が高すぎて、これを了得することが困難なことなどが挙げられ、永平・総持両本山熟議の上、今回新たに全国を三十中学区に分画し、各学区に中学林を設け、中央には高等中学林及び大学林を設置することになった。かくて中学林設置規則により、第一中学林東京から第三十中学林川越に至る実数二十八の中学林が、全国で認可されることになった。このうち第二十一中学林から第二十六中学林までは、奥羽地方に設置され、宮城県は第二十五中学林となったのであった。

中学林の修業年限は六ヶ年と定められ、中学科三ヶ年、小学科三ヶ年の二つに分れていたが、学力のある者は、年令にかかわらず漸次上級の試験を受け、学力相当の学年に進むことが出来た。

しかしこの制度も、必ずしも順調に実施されたものではなく、出発当初の三十中学林も、はじめの華々しさに引きかえ、明治三十四・五年頃までにはその半数は消滅してしまい、残存の中学林もまた不振を極め、第二十五中学林も生徒数は二十名ぐらいになってしまったという。このような学制の萎微沈滞は、やがて第三次の改革断行を必至とするまでになっていた。



第二中学林東二番丁校舎

七

一方、明治三十二年に文部省から公布された「私立学校令」によって、私立学校の教育内容の改訂が求められていたので、当局は明治三十五年七月に「曹洞宗教育令等」を発表し、同年九月一日よりこれを施行すべきことを普達した。新制度は大学林（東京）及び中学林の二とし、全国を四大学区に分けて、各学区毎に中学林一校を置くこととした。また曹洞宗末派寺院に対しては、その徒弟を必ず中学林において修学せしめるよう義務づけたのであった。

なお中学林の所在地及び学区は左の通りである。

第一学区　関東地方及び長野・山梨・新潟…第一中学林（東京）
第二学区　東北地方及び北海道　……第二中学林（仙台）
第三学区　中部地方及び近畿地方　……第三中学林（名古屋）
第四学区　中国・四国及び九州地方　……第四中学林（山口県防府）

八

このようにして明治三十五年七月、第二中学林が開設され、

やがて八月末、初代林長石月無外師が新潟から着任した。この間、創立準備委員大石堅童師が、林長を助けて八方に奔走し、九月に入って四年生以下九十九名の生徒が入学を許された。新校舎の敷地は、旧仙台第二十五中学林跡ときまり、ここに総二階建て百余坪の教場を新築した。当時の記録では、校地は一、〇〇〇余坪、そのうち運動場としては六〇〇坪に過ぎず、今日から見れば、その規模は甚だ狭少であった。

明治三十六年四月、新校舎落成並びに開林式が簡素ながらも盛大に挙行された。来賓のうち仙台市長早川智寛氏は、自分は曹洞宗の一信徒として希望すると冒頭し、近来倫理道徳の衰頽は嘆くに余りあるが、これを救うものは宗教家の任務である。諸君の健闘を祈ると生徒を鼓舞したのは、最も印象的であった。しかしこれは単に早川氏のみならず、当時第二中学林に対する、一般の期待でもあったと見ていいのではないか。

九

右に述べたような意味から第二中学林の開校直後、時を措かずして林内に教友会が誕生した。弁論に文筆に力をつけ、同時に強健な体力を養って、学力と同時に、教化に必要な基本の力をつくり出そうという目的からであった。中にも講壇部は、将来の布教伝道のための弁論として、最も生徒の関心が深く、早速その秋の仙台市内中学校の連合演説会には、本校選手は第一等の栄冠を得て帰ってきた。

次に文芸部の任務は『教友会雑誌』の発行にあった。発刊の辞に「吾等は曹洞宗中学林教友会の霊的団体員たることを自覚してこの雑誌を発刊す……吾等の愛する自由、正義、慈悲、博愛、平等に対し、ひとしく志を寄する者への友愛協調の精神、あらゆる世界の科学哲学の真理は、吾が無上大法の仏道を発揮すべきの武器として、これを尊重する科学的精神、時勢に阿ねらず、旧弊になじまざる柔軟妥当にして且つ仏祖の遺訓に基づく不動の信念を堅持し…」

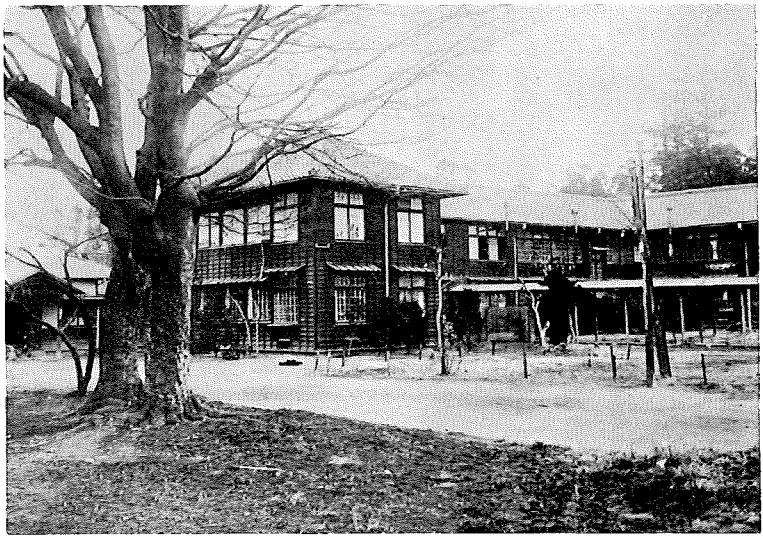
と、その抱負と信念を述べている如き、当時の生徒の気慨を見ることができる。

これら開校当初の生徒の、仏祖の教えに基づく活力に溢れる気風は、第二中学林の校風を形成し、のちのちまでわが栴檀学園の根本精神を培って来たものということが出来る。

十

第二中学林の校地校舎は、生徒数が増加するにつれ、次第に狭隘を告げ、学校運営上多くの支障を来たすようになった。この時仙台市大町の呉服店主で、慈善家・篤信家として知られた大内源太右門氏から、校地として南鍛治町泰心院境内の畑地二千数百坪の寄附があり、移転問題は忽ち解決した。ここに寄宿舎を新築、また校舎を移転増築して、四十一年早々、東二番丁から泰心院境内に移った。講堂は泰心院の好意により、その本堂を使用した。新校地は多少の借地も入るが、実測三千坪もあり、従来の三倍の広さであったから、テニスコート・野球場等も出来、教友会の活動も著るしく活潑となった。

東二番丁、南鍛治町の両校舎を通じ、最も特色を持つものは「同事舎」であった。生徒の中には学資の乏しい者が



南鍛治町校舎（第二次火災後寄宿舎使用）

少くなかった。これらの生徒のために、中学林創設と同時に同事舎なる寮を設け、寮生に新聞配達や牛乳配達のようなアルバイトをさせたのは学監大石堅童師（第六代林長）であった。同事とは仏語で、人の気持ちを察し、いわば苦楽を共にすることである。大石師はもちろん、そのあとを継いだ金山活牛師も、生徒と起居を共にし禍福を分ちあった。

同事舎ははじめ民家を借りたが、南鍛治町移転後は、それまで寄宿舎だった曹洞宗宗務支局に移り、ここから多数の卒業生を社会に送り、その中には著名な人も少くない。同事舎は大正末年頃まであった。

十一

明治四十年からの南鍛治町時代は、比較的平穏に過ぎたといってよいが、時世の推移につれてやはり幾多の変遷はあった。

中にも学校及び生徒に与えた直接の大きな打撃は、二度に及ぶ学校の火災であった。すなわち大正十二年六月講堂（泰心院本堂）から出火して同講堂を全焼、次で翌大正十三年五月校舎内から発火、これを全焼した。放火といわれたが、犯人は遂に検挙されずにしまった。

再度の火災による痛撃は甚だしく、これよりしばらくの間は火災の応急措置に追われ、学校あげて苦難の中にさ迷うこととなった。

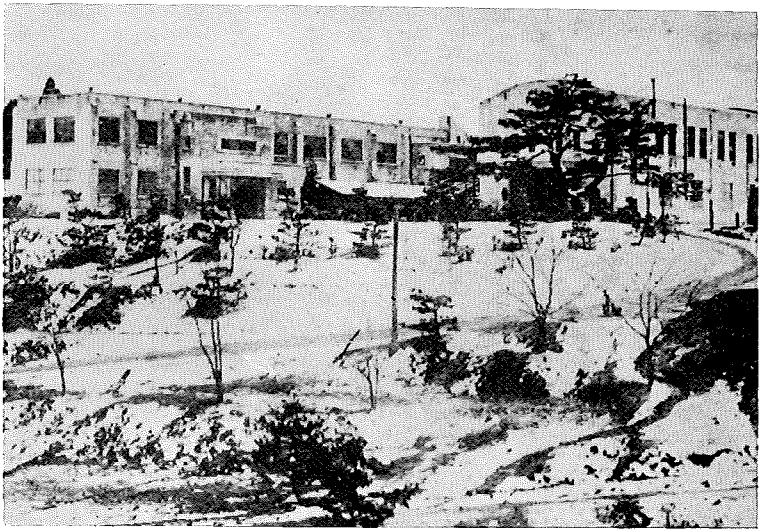
十二

校舎再建の場所は、宮城郡七北田村字荒巻西山一番地、すなわち現在の校地で、当時はまだ仙台市に合併されてい

なかった。面積は実測で約二万坪、ここに二階建て、地下室付きの鉄筋コンクリート校舎が完成し、大正十五年早々移転を完了した。次で講堂、雨天体操場が出来、法堂及び寄宿舎も竣工して、新校舎の面目は次第に整っていった。

校舎移転を機会に、中学校令に基づき、校名を栴檀中学と改称した。他の中学林はそれぞれ、地名をとって校名としているが、ひとり第二中学林のみ栴檀の名を冠したのは、栴檀林の伝統を継承する意気込みを以ってしたのであった。

江戸時代の末、吉祥寺栴檀林は、宗学研修のための道場として知られ、明治に入って曹洞宗大学林となるのであるが、いわばその研学一途の純粋な学風を慕い、向学の香り高き学園を目ざしたものと見られるのである。



西　山　校　舎（現在地）

十三

西山移転の大事業は、財政不如意のうちに行われたため、全寮制の本校にとって、最も緊急必要な寄宿舎の建設は全く進まず、その遂行は時の中学長棟方唯一師の所断によって決せられたのであった。しかも大正末年より昭和初年にかけての経済界の不況に処して、師は苦心焦慮の毎日を送ったが、結果的には遂に宗務院をして財政支出をなさしめ、全移

転工事の完成をみるに至った。師が本学園中興の功労者と讃えられる所以もこの点に存している。

しかしこの完成された学園も、大東亜戦争のため、昭和二十年七月六日夜半よりの空襲によって、木造部分の校舎、寄宿舎等を悉く烏有に帰した。

十四

戦災で失った校舎、学寮等の復興は並大抵の苦労ではなかった。すなわち古家を買入れて移築し、或いは工事を中途にして休まねばならぬ等の苦難を重ねつつ、戦後歴代校長の手によって、復興は小きざみに行われた。

さて、戦後教育の最大の問題は、昭和二十二年三月公布の六三制であった。新制中学校は二十二年度から設置され、次で翌二十三年新制高校の制度が実施されるに伴ない、栴檀中学は栴檀学園中学校並びに栴檀学園高等学校と改称して、新らしく出発することとなった。このうち高校の方は少しづつ生徒数もふえたが、反対に中学校は義務教育となった関係で、次第にやせ細り、昭和二十八年度限りでこれを廃止することとなった。

十五

昭和二十四年一月財団法人栴檀学園が設置され、新制中学校・高等学校並びに二十三年度から開設した高等仏教学院（後述）を経営することになった。

次で昭和二十六年私立学校法の改正により、すべての私立学校は学校法人がその設立者たるべきことが定められ、財団法人栴檀学園も直ちに同年三月学校法人に組織替えされ、知事の認可を受けて、ここに学校法人栴檀学園が誕生した。

以上縷々述べてきたように、栴檀学園は、明治八年曹洞宗僧職養成機関として設立せられ、東北における最も古い学園の一として、仏教界はもとより、教育界に寄与した功績は少くなく、且つ明治三十八年以来、宗内生のみならず一般人にも開放し、仏教教育を施して、宗教的情操を涵養せしめ、他にならびなき独特の校風を堅持して来たことは誇示するに値いするものといってよい。東北福祉大学を語るには、是非とも、それまでの学園史の流れに触れなければならぬ所以である。

この栴檀学園の流れも昭和三十年四月朽木正己師の学園長就任により大きく変ってゆく。次章以下いよいよ大学建設について述べることにしたい。

第一章　大学前史

第一節　大学建設の構想

第一　棟方中学長の着想

学園が西山の現在地に移転したのは、前述のとおり大正十五年四月で、今から約半世紀前のことであった。今こそこの辺は人家密集する住宅地帯であるが、当時は宮城郡七北田村に属する仙台の郊外であった。たまたま大正十五年八月二十六日に、仙台市役所教兵課宛てに報告した開申書が残っているが、その中に「校地周辺ノ状況」として次のようなことが載っている。

本校校地ハ仙台市境ヲ距ルコト四丁余の丘上ニアリ。西方及ビ北方ニハ樫・楢・松等ノ雑樹密生セル山ヲ負ヒ、東方及ビ南方ハ濶ケテ、眼下ニハ大仙台ヲ一眸ノ下ニ収メ、遠クハ水天漂渺タル太平洋ヲ望ミ得。加フルニ土地高燥、空気清澄、閑雅静寂、好適ノ飲料水豊富ノトコロタリ。校地タル丘ノモト仙台市トノ間ニ畑地介在シ、コレヲ経テ南方ハ仙台市半子町・八幡町ニ、東方ハ仙台市新坂通・北山町ニ接ス。校外附近ニハ目下十余戸ノ農家散在シ居レドモ、近来郊外住宅商店等ノ多ク建築セラルヽ傾向アリ。

と見え、これに引続いて、校地の広さは約二万坪（六万六千平方米）、そのうち一万一千余坪を栃檀中学の校舎敷地及び運動場としても、なお八千坪の余裕があり、将来ここは高等専門部創設の予定地なる旨を報告している。

右の「校地周辺ノ状況」は新校地及びその四囲の状況を簡潔に描写しているが、この丘上に地を占めた本校が開発の先駆となり、やがてこの地域が仙台市に合併されることとなった。

講堂内部

思うに新校地の面積は、南鍛冶町時代の六倍に余り、しかも移転当初から、新校舎は鉄筋コンクリート建築であったから、当時は相当注目されたものと想像され、棟方中学長がここに一大学園の建設を夢みたのも故なしとしない。しかしこれは言わば、棟方師の一時の理想であって、当面は新寄宿舎・法堂等の建設に忙殺され、その具体化は到底望み得ないことであった。

第二　東北高等仏教学院

昭和二十年七月十日のB29による仙台空襲で、市街地を離れていたにも拘らず、本校の木造校舎は完膚なきまでにやられた。このあと間もなく終戦となったが、物資不足のさ中にあって、焼失した校舎の復興が、並々ならぬ苦難の道であったことは既に記した通りである。

時の校長逸見梅栄師には、何か新しい学校を設け、それによって学園の内容を高め、充実することが、同時に復興を早めることにつながるものとする構想が、つねに潜在していたように見受けられる。たまたま本校卒業生で駒沢大学等を志願しながら、遊学しかねている者などのために、これに代るものとして始めたのが、旧制中学卒後二ケ年で終了する「東北高等仏教学院」であった。

東北高等仏教学院の入学式は、昭和二十二年四月十九日に挙行された。入学者の数ははっきりしていない。当時の職員録を見ると、院長に逸見梅栄、教頭に日野智泉以下講師陣には十数師の名前が見える。

しかし折角のこの制度も長続きしなかった。それは当初の目的に基づく申請が、宗務院の認めるところとならず、性格のあいまいなものとなったためといわれている。

第三　東北仏教短期大学の構想

東北高等仏教学院は、このようにしてわずか二ヶ年で挫折したが、逸見校長は更に新しい構想に基づいて、初志を貫徹しようと図った。すなわち東北仏教短期大学の建設であった。昭和二十四年、寄宿舎と理科教室完工の余勢を駆って、一気に短大建設を決意したのは、仏教高等学院設立の趣旨をこれによって活かそうとしたのであった。

その内容は、やがて出された『東北仏教短期大学設立趣意書』に依れば、実際的な二ヶ年の大学専門教育を施し、仏教布教家として行学一本の教養高き人材を養成することを目的とし、他面四年制大学えの進学を可能ならしむるようにしたい。対象は主として東北六県及び北海道を含む各宗派の徒弟とし、従って修業の上は各宗派の僧階をも獲得せしめるような教育機関と

旧　寄　宿　舎

し、かつ中等教員の資格を持たせる方針だといっている。

しかしこの仏教短期大学も、遺憾ながら宗務庁の賛成を得ることが出来なかった。恐らく各宗派に開放する点に困難な問題があったのかも知れないし、施設面での準備が不十分で認可の条件を満たしているかどうかという心配もある。また単に仏教と限定したのでは、果して経営が成り立つ見込みがあるかどうか。ましてその設立の資金が主として「設置促進助成会」の会費、すなわち寄進に頼るのでは、当時としてはかなりむづかしいことでもあった。果してこの運動は実現の運びに至らず、折角の案も結局空花に終ってしまった。

第二節　東北福祉短期大学設置

第一　朽木学園長来任

思うに大学建設こそは、学園発展の重大な鍵として、恐らくは棟方・逸見両校長のみならず、歴代校長の胸中深く蔵せられていたのではないだろうか。当時宗立としては、東京の駒沢大学及び名古屋の愛知学院大学があり、今後の開けゆく時代に処するためには当然、大学を持つ堂々たる学園として、これに比肩できるようにすべきである。それがすなわち学園の発展した姿であるとの考えが、校長ほかすべての人々の夢だったに違いない。

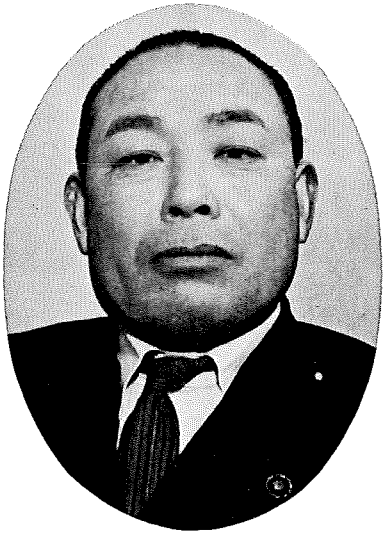
昭和三十年四月十一日、第十三代学園長朽木正已師が、宗務庁から来任した。朽木師は第二中学林の第十七回、大正九年の卒業生で、明治三十三年三月秋田県湯沢市岩崎町の永岩寺に生まれた。第二中学林在学中は負けじ魂の柔道部選手で、中学林黄金時代の一時期をつくった。大正十三年永岩寺住職となり、昭和三年旧岩崎町助役、同四年には少壮にして秋田県議会議員に当選した。それより岩崎町の信用組合長、農業会長等を兼ね、のち県農業委員にも選ばれた。昭和十五年秋田県宗務所長となり、同二十四年から宗議会議員に当選、その年直ちに教育部長に任ぜられ、部

長として本校を視察した記録もある。次で二十九年庶務部長に転じ、翌三十年四月栴檀学園長となった。

師は右のように本校卒業生であるから、母校の将来については、深い関心を寄せていたことは言うまでもあるまい。しかも宗務庁教育部長として駒沢・愛知学院の両大学については、これを知悉しているが故に、一層熾烈な意欲をかき立てられたものと察せられる。朽木師は来任してから、大学建設の決心を固めたのでなく、むしろ大学建設の決意を抱いて学園長になったのだという説には、たしかに頷かせられるものがある。

こうして棟方校長から脉々として伝わって来た大学建設の悲願は、遂に朽木学園長の手によって陽の目を見ることになった。朽木師の最初の案も栴檀仏教短期大学で、これは逸見校長の案に近いものだった。

第二　社会事業短期大学の計画



朽木正己学園長

前述したように朽木学園長の目標は大学建設にあった。師の着任後間もなく、昭和三十年六月、理事会及び評議員会の合同会議が作並温泉で開かれ、その席上学園の寄附行為の一部変更が議題となった。その内容は学園の設置する学校として、栴檀学園高等学校・双葉幼稚園のほかに、栴檀仏教短期大学を加える案であった。

この時阿部孝顕監事から、短大の学科にはなるべく巾を持たせること、仏教短期大学の仏教の二字を削り、別の名称にすることが提案された。もうこの頃になると、高等学校が地方にどんどん増設されているので、高校に入るために、わざわざ仙台まで来るものが少なくなっている。寺院の子弟を収

容し教育するにしても、短大を設置して魅力あるものにすることは、極めて望ましいことと、名称を訂正することを加え、原案は全会一致で承認されたのであった。

次に第二号議案に、講堂兼体育館を建設すること、第三号議案に管理棟並びに教室を建設することがいずれも議決された。これらの議題の眼目は、もちろん短期大学の設置のための準備であり、第二号議案以下は認可のための条件整備といってよいであろう。

昭和三十一年に入り、短大の名称は「社会事業短期大学」とすることに落ちつき、着々その準備が進められた。新設の短大はありふれた学科では、他の古くからのそれとは、到底太刀打ちは出来ないから、仏教とゆかりの深い社会事業と銘うつことにしたのであった。これがのちのち本学を性格づけることになったが、その渕源はやはり本学園の歴史に負うところが極めて多いのである。

社会事業短期大学の認可申請は同年六月文部省に提出された。しかし認可の条件を充たすための準備は必ずしも整っていたとはいえなかった。文部省と再三交渉を重ねたけれども、その諒解をとりつけられず、結局申請を取り下げることとなり、出発の出端（でばな）を摧かれてしまったのである。

第三　東北社会事業学校

しかしこのまま計画を抛棄するわけにはいかない。よって急に方針を変更し、これを「社会事業学校」として、昭和三十二年四月から発足させることに県の認可を得た。昭和三十一年十二月の理事会で、朽木校長は「今回中央の要請もあり、各種学校としての東北社会事業学校を併設し、本学園の躍進と同時に、国家のため些かなりとも寄与したい念願です」と苦しい説明を行っているが、中央の要請とは、これに置き換えて、文部省の指導によりとすれば、諒解がつくであろう。それにしても短大から各種学校えの格下げは、甚だ不本意のことであった。

講堂兼体育館（現在第二体育館）

いま東北社会事業学校学則の中から、二三の事項を拾ってみれば、先づ生徒定員は本科五〇名、研究科三〇名で、本科は新制高校卒又は旧制中学校卒を以て入学資格とした。修業年限は共に一ケ年である。卒業者には社会福祉主事の資格が与えられる。

しかし社会事業学校の応募者は予定を下廻り、学校当局を落胆させた。当局としては、一応短大設置までのつなぎの心算であったろうが、虻蜂とらずになることを恐れ、思い切って社会事業学校は実質的には休校し、短大設置一本にしぼって、これに全力を注ぐこととなった。

第四　講堂兼体育館等の建設

短大設置認可のための諸条件のうち、施設設備関係は最も重要なもののひとつである。先にも記したように短大設置は、朽木学園長が自らこれをひっさげて学園に乗り込んだ以上、それは何よりも先に決行すべき事業であった。

体育館は既に昭和二十六年に着工されたのであるが、当時資金の造成が思うように進まず、基礎を造っただけでそのまま放置され来たのであった。講堂は旧来のものがあって、差し当りそう不自由はないにしても、近代的設備をもった体育館は是非ほしい。昭和二十九年三月の高校卒業生が、卒業記念として講堂用暗幕を寄贈したのも、考えてみれば、体育

館を早く建設してほしいとの催促とも受けとれた。それがいま朽木学園長の手によって取上げられた。休止中の体育館工事が息を吹きかえした。

昭和三十一年十一月に入って体育館は竣工し、同月十五日開学八十周年記念式典並びに講堂兼体育館の落成式を挙行した。

この講堂兼体育館落成と同時に監理棟及び教室の建設も着工され、翌三十二年五月に至って工事は完成した。

監理棟は校地上段の東端に立ち、二階建て鉄筋コンクリート、全構内を見渡せる位置にあり、従来の講堂一階のそれと較べれば甚だ便利となった。旧事務局は改造して、音楽室その他の教室に転用された。

第五　資金造成の苦心

社会事業学校の出来た昭和三十二年八月一日附の、朽木学園長の暑中見舞の案文が残っているが、それには講堂兼体育館、管理棟の竣工したことを告げ、そのほか図書館の内部改造、柔道場の移転改築、社会事業学校教室の改造塗装、予算五百万円の学生大ホールの設置、グラウンド拡張工事などが挙げられ、これを読むと、朽木学園長の胸中には種々の計画が秘められていたことが分る。だがそのどれをとってみても、相当の経費を伴ない、特にその財源については、これまでに歴代校

監　理　棟

長の試みて来たもの以外に、これを求めるのでなければ、新しい展開はもはや望み薄といってもよかった。しかし朽木師にはひとつの案があった。

その新しい案は学債の発行であった。就任早々の理事会にかけた計画を、翌年度から実行して、なおこれに引きつづき、新計画を発表したのは、この学債にかける夢が大きかったからに違いない。ただ学債は当然償還しなければならぬし、もとより償還計画は立てていたけれども、果してどれほどの応募があるか問題であった。

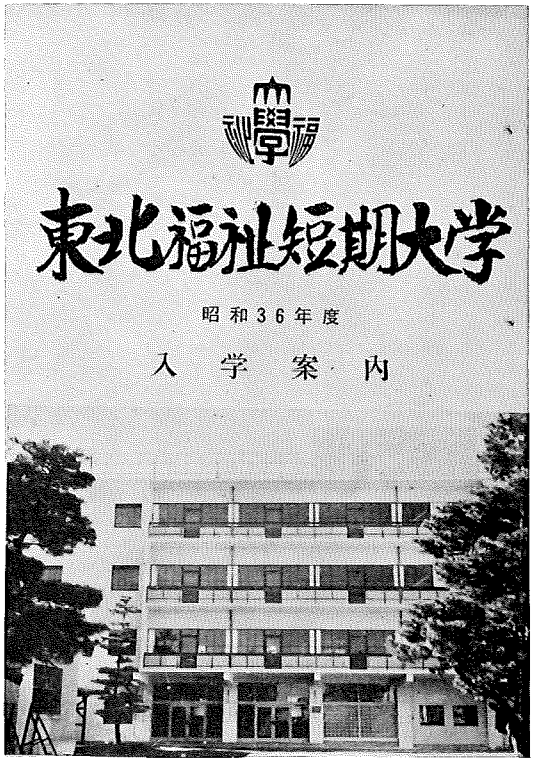
このため学区内すなわち東北・北海道の各宗務所長をその教区の勧募委員長とし、学校側では朽木学園長はじめ教頭・学監ほか宗内の先生が勧募督励員となり、学園長が北海道及び宮城県を受持ったほか、それぞれの縁故に従って分担をきめた。このようにして宗務所からの補助金三六九万円、学債六〇〇万円の勧募が始められた。けれども当時の関係者の話を聞くと、予定の成績を挙げ得なかったことは容易に察せられるのである。

にも拘らず朽木学園長はじめ、それぞれ分担区域をまわり、連絡をとり合って最善の努力をつくし、一歩でも目標に近づけようとした。短大認可の布石としての建設計画は、何としてもなし遂げねばならぬという、悲願に燃えての必死の努力であった。

第六　短大設置遂に成功

以上のごとく、朽木学長は条件整備のため施設の充実を急ぎ、昭和三十二年九月の理事会に再び短大設置申請の提案を行った。

懸案になっていた短大の名称は「東北福祉短期大学」と確定し、同月三十日に申請、翌三十三年一月十日遂に文部大臣の認可を得ることに成功した。学科は社会福祉学科、修業年限二ヶ年、入学定員五〇名、総定員一〇〇名であった。また認可の条件として、短期大学の目的達成のため必要な整備拡充を行うことなどが要請された。図書・標本・



短大入学案内

機械器具等やはり不十分は免かれなかったようである。

卒業後の賦与資格としては次の三種類、すなわち(イ)社会福祉主事は当然として、そのほかに(ロ)中学校社会二級普通免許状と(ハ)保母資格がある。これらの資格獲得には、勿論一定の履習の仕方が定められていた。

懐えば遠く棟方・逸見両校長時代からの理想は、今やこのようにして実現された。昭和三十年着任以来準備を進めること三ケ年にして、ようやく目的を達したのだから、朽木学園長以下の満足は思いやられるものがあった。

また、この短大設立認可により、前年四月に設置され、その後休校状態にあった東北社会事業学校は当然解消することとなった。

東北福祉短期大学の開設第一年、すなわち昭和三十三年度の入学合格者は定員五〇名に対し、二倍半を超す一三一名、うち旧東北社会事業学校からの入学者は十一名であった。

なお四月一日から栴檀学園高等学校並びに双葉幼稚園は、それぞれ東北福祉短期大学附属高等学校、同附属幼稚園と改称された。

徽　章

徽章は大学の二字の下部両わきに、福祉の文字を細長く左右に配してこれを囲む上図のような図案である。

最後に教員組織については一々述べることを省くが、学長に朽木正己師、専任教員には山田霊林師ほか多数の人々が名を連ねている。

第三節　短大専攻科設置

昭和三十四年に第九回国際社会事業学校連盟総会が東京で開催された。この総会では世界各国の専門社会事業家によって、それぞれの国の社会福祉の現状報告がなされたが、その中でアメリカ・イギリス等の諸国においては、日本が短大で行なっている社会福祉主事の養成を、大学院の課程でやっていることがわかった。然るにわが国においては認定講習によって社会福祉主事の資格を与えている。これではあまりに安易すぎるではないか。この方式は直ちに廃止すべきであるとして、早速国内社会事業学校の集会を開き、養成機関の重点を、短大から四年制大学へ移行すべきであるとの決議を行った。福祉国家を目ざすわが国においては、当然すぎる社会的要請というべきであった。

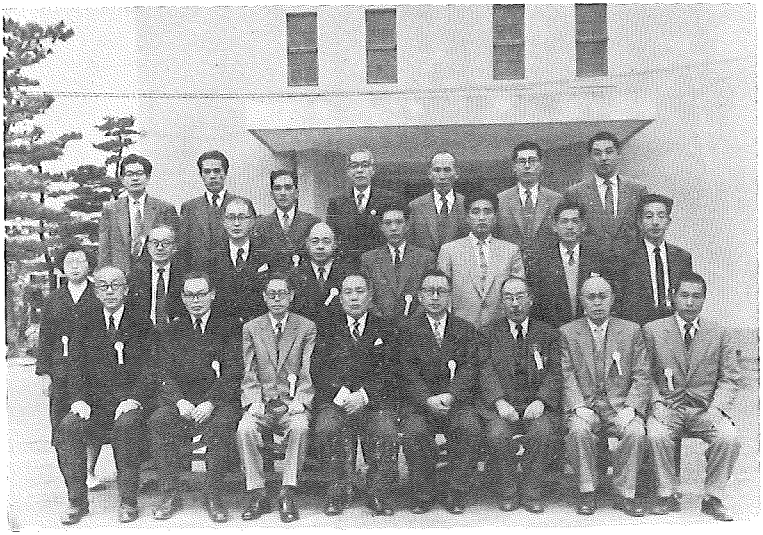
この趨勢に対応して本学においても短大専攻科の設置が計画された。それはもちろん短大だけで満足できない学生の希望を満たしてやることであったが、同時に四年制大学への昇格を目ざす一つの段階とも見られた。

専攻科設置の理由は次のようであった。

本短期大学専攻科は、短期大学における一般的並びに専門的教養の基礎の上に、広い視野に立って社会福祉学の分野を研究し、精深な学識と高等の技術とを養うことを目的とする。

東北福祉短期大学専攻科設置申請書は、三十四年十一月文部省に提出され、昭和三十五年四月から開設することが認可された。修業年限は一ヶ年、入学定員は十名。最初の専攻科入学者は十三名あった。

専攻科の専攻別学科目は、生活保護関係講座、労働保護関係講座及び児童保護関係護座の三に分れ、学生は三講座の中から一講座を選択必修し、必修以外の二講座から任意選択したものを加え、合計三十単位を習得する定めであった。



開学記念職員写真

第二章　創設の時代

第一節　第一号館竣工

第一　大学昇格計画の推進

東北福祉短期大学開学式が行なわれて間もなく、昭和三十三年七月の理事会において、早くもこれを四年制大学に昇格せしめる案件が提出され、満場一致の賛成によって決議された。併せて大学校舎六一八坪を新築することが可決されたのは、昇格のための用意であることは申すまでもない。四年制大学の創設、これこそ朽木学長にとっては、夢寐にも忘れ得ぬ大目的であった。今やその大目的が手の届くところに迫って来た。短大設置の成功と共に、直ちに次の大計画を発表した意中は、容易にこれを察することが出来よう。

この理事会に続いて同年八月、東北六県宗務所長、同窓会各県支部長、評議員の合同会議で、理事会同様、四年制大学昇格の件及び大学校舎建築の件等が討議せられ、四年制大学設置問題は著るしく具体性を帯びて来た。朽木学長はこの席上、経費の捻出については、宗務庁からの補助金壱千万円、私学振興会からの借入金壱千万円、同窓会員の寄附壱千万円、富士銀行乃至簡易保険借入金千三百六十万円、合計四千三百六十万円の工費となること。同窓会員の寄附勧募については、各支部長に一層の御協力をお願いしたいとうったえ、本多喜禅同窓会長は、同窓会の盛りあがりによってこの計画を推進したいと、新制大学昇格に全面的協力を約束したのであった。

第二　資金繰り行詰る

しかし同窓会の寄附金も、学債も、各宗務所の補助金も思うように進まなかった。既に大学校舎第一号館（第一校

舎）の上棟式も間近に迫りながら、資金繰りに苦しみ、遂に多額の借入れを行なわねばならなかった。すなわち新校舎の工事日程が、大成建設の都合で繰り上げられ、工期短縮に応じて支払いも急がねばならなくなったのである。宗務所補助金といい、同窓会の寄附金といい、結局はあてにならぬ要素を多分に持っており、次第に学園当局に焦燥感を抱かせた。朽木学長も遂に最後の手段に訴えざるを得なかった。それはとりも直さず、校地の売却であった。

第一号館

昭和三十四年十月の理事会では、その間の経緯を朽木学長は次のように述べている。

竣工式までの支払額は、差し当って一千五百万円、今後支払うべき額は三千五百万円となっているのに、父兄寄附金、学債、同窓会寄附金を含めて、本年度は約二百万円に過ぎない。金融関係からは、土地を処分する以外に方法はないという要請もあり、この際決意を要する段階に立ち至っている。として、当面の案としては、七千五百坪を千三百万円をもって大成建設に整地してもらい、必要に応じてこれを処分することを提議し、この後更に不用地一千坪を追加して分譲することを決めている。

そしてこれらの土地は、これを業者に一括して譲渡する方が得策とする決論に達し、昭和三十六年三月の評議員会及び理事

会では、六千四百八十六坪を三千六百五十余万円で「郊外土地株式会社」に売り渡すことに決定を見た。すなわちこれに依て、大成建設の未払分を皆済できるのみならず、その他の借財をも併せて返済できることになった。この時処分した土地は合計七千余坪、構内の手ぜまを嘆く今日から見れば、何物にも換えがたい貴重なものであるが、関係の人々は、大学昇格の基本ともなるべき校舎を得たのだから、やむを得ないとするあきらめにも似た気持ちをもって、四年制大学の実現をひたすら待ち望んだのであった。

第三　新校舎の規模

新校舎落成式は、十月十二日午前十時に挙行された。この日は晴天に恵まれ、中幡義堂師を導師とする法要に始まり、宗務総長、教育部長ほか約二百名の来賓を迎えて、盛大にとり行なわれ、式後大学祭、附属高校の文化祭など、多彩な行事が繰りひろげられた。

新校舎は鉄筋コンクリート四階建て、一階から三階までに教室一〇、特殊教育教室三、演習室二、四階は実験室、観察室、資料室等が多数設けられ、学習上、研究上の利便を得ただけでなく、これならば四年制大学に昇格してもという、ひそかな自負をも抱かせられたのであった。

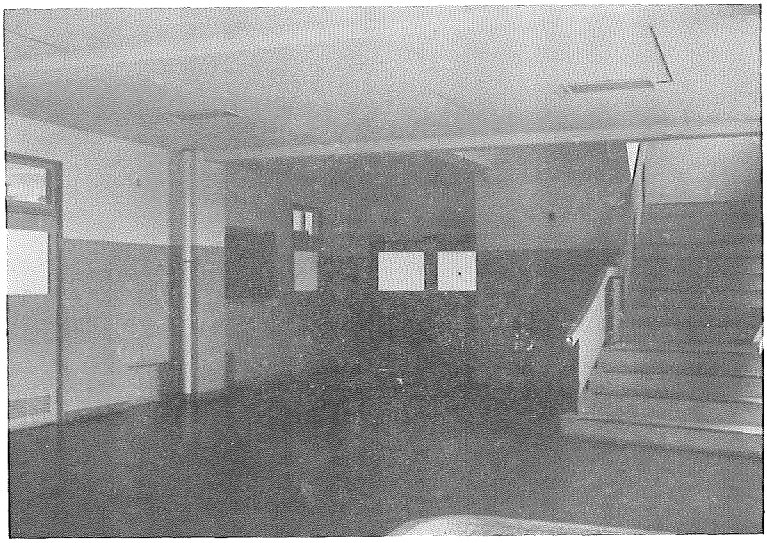
第二節　四年制大学の実現

第一　昇格の必要性

既に社会福祉学界においては、社会福祉主事の養成は、四年制大学で行なうべきであるとする議論が、大勢を占めていたことは先に記したが、この頃になるとそれは、卒業生の受入側すなわち現場からの要求ともなっていた。しかも一方これを現実的に見るならば、現行の社会保障関係法規では、短大では社会福祉主事の任用資格のみの取得に過

ぎず、身体障害者福祉司、精神薄弱者福祉司及び児童福祉司等の任用資格を得るためには、学校教育法に基づく大学において、厚生大臣の指定する学科目を修めねばならない。このような観点からいっても、四年制大学の必要性は大いに痛感されるところであった。従って朽木学長はじめ東北福祉短大当局が、早くから四年制大学昇格を目ざしたことは理由のあることであった。

短期大学学生の中にも、四年制大学昇格を希望する者が年々増加していた。昭和三十四年度から三十六年度まで、短大学生の進学希望の有無を調査した表がある。それに依れば、進学希望者は、昭和三十六年度には、前々年度の二倍約五〇％に達している。また三十六年度受験者二九三名に、面接のさい「若し在学中に四年制大学に昇格したら、あなたは編入学を希望しますか」という問を設け、身上調書に記入させたところ、編入学したいと答えたものは六八％を超えた。従って学生の中には、その実現を希望して入学した者も多かったろうし、父兄の中にもその場合、当然子弟を四年制大学に進学させる心算の人々が相当数あったに違いない。



第一号館内部

第二　四年制大学認可

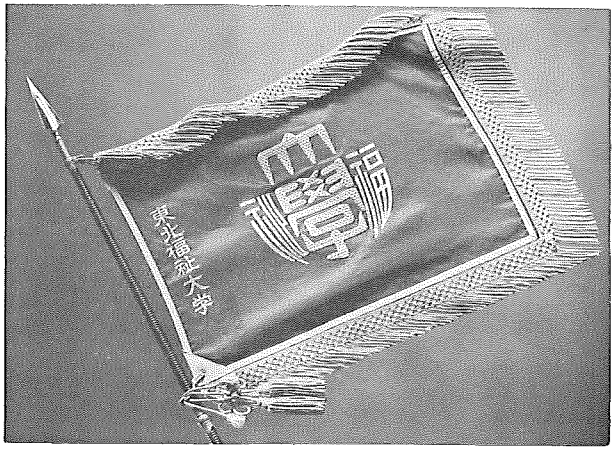
昭和三十六年四月、理事会が召集せられ、東北福祉大学設置に関する最後のつめが行なわれた。朽木学長の挨拶の大要を記せば、

本短期大学の現況については、開学以来志願者は漸増し、三十六年度に於ては、募集定員五〇名に対し、四倍半の数字を示している。一方本年三月には第二回の卒業生を社会に送ったが、一〇〇%の就職率で喜びにたえない。なお学生の出身県も東北六県・北海道は申すに及ばず、遠く九州というように全国的に分布されている。在学生の中でも特に男子においては、学究意欲に燃えて居り、四年生大学実現は焦眉の急になっている。短大ではもはや、実社会職場の指導は十分ではなくなった。すでに本学では鉄筋コンクリート四階建て六二〇余坪の校舎と、一〇〇坪余の校舎と、また一〇〇余坪の女子学生寮の竣工をみている。

周知のごとく短大については、文部省案は暫定存置であり、改廃は時期の問題である。この時に当たり四年制大学の実現は、ひとりわが曹洞門下の喜びのみならず、東北・北海道地区における斯道志望者に対する一大福音であると信ずる。

大体以上のような内容であるが、誰しも異論のある筈はなく、満場一致その推進を誓い合った。

また、これまでの東北福祉短大については、文部省案に従って発展



大　学　校　旗

的解消するほかないという朽木学長の説明を一同諒承した。

東北福祉大学設立に関する申請は、昭和三十六年九月に文部省に提出され、翌三十七年一月に荒木万寿夫文部大臣の認可を受けた。大学校舎の建設には、血涙を絞ったあとだけに、朽木学長以下当事者の喜びは察するに余りあるものがあった。

第三　大学の内容

四年制大学は遂に実現したが、その内容はどうなっているのか。これを認可書、東北福祉大学設置要項などから抜書して、必要と思われるものを左に記しておく。

先づ大学の目的及び使命については次のように述べている。

本学は学校教育法に基づき、社会事業に関する理論並びに技術を教授研究すると共に、高潔な宗教的信念を基礎とする人格と豊かな教養を培い、専門社会事業従事者を養成することを目的とし、それに依って社会事業の振興をはかり、社会福祉の増進に寄与することを使命とする。

この中に特に「宗教的信念を基礎とする人格」と銘打っていることは、やはり本学の歴史に縁由する建学の精神というべきであろうか。本学の特色の一端をここに見ることが出来ると思う。

次に東北福祉大学の学部学科は、社会福祉学部、「社会福祉学科」入学定員五〇名、総定員二〇〇名、修業年限四年、開設時期は昭和三十七年四月からとなっている。

同時に大学学術局長から大学設置について、次のような要望があった。

一、研究室、演習室、資料室、および生物実験室を更に整備すること

一、一般教育、専門教育図書（特に新刊書）および学術雑誌は系統的に整備充実すること

一、標本および機械器具（特に視聴覚教材）は更に増強整備すること

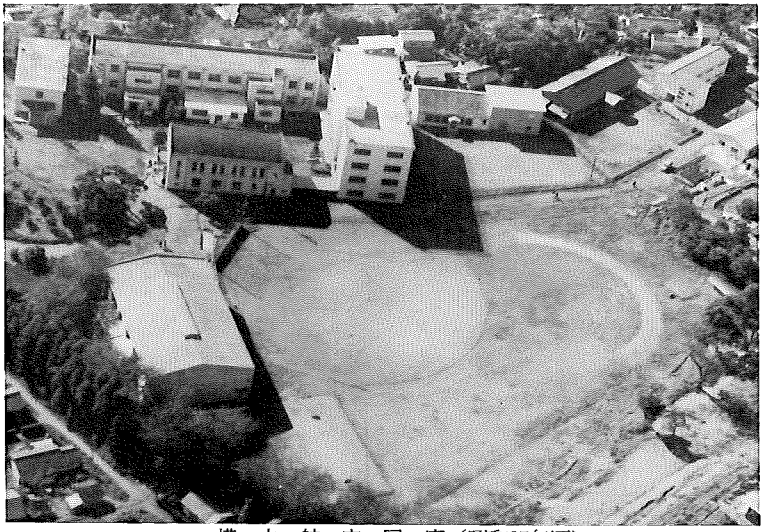
右のうち設備関係を見ると、やはり不十分は免かれないが、図書は一九、五〇〇冊、学術雑誌は五八種、次に標本は八七点、機械器具等は一七八点となっており、かつての短大設置当時に比較すれば、かなり充実に努めたあとが見える。しかし全体としては貧弱の感を免かれず、文部省から指摘されたのも理由のあることであった。

また附属施設としては図書館及び研究室十九のほか、特に実習場としての附属幼稚園をあげているが、大学の保母課程では、附属幼稚園で実習したことは殆んどなかった。利用できれば使いたいという程度の意味であろう。

大学の学科について一々述べることは煩わしいので省略するが、一般教育科目及び必修・選択の専門科目合計一三〇単位を四年間に履習し終り、所定の単位を全部習得して、卒業論文の審査に合格することが、卒業の条件である。卒業すれば社会学士の学位が与えられる。

大学設置は朽木学長の大きな希望であったが、それがかなうことになった段階では、いろいろな夢が描かれる。この時将来の計画として掲げられているものを次に列挙してみよう。

一、将来社会福祉学部に、産業福祉学科、児童福祉学科、医療



構内航空写真（昭和37年頃）

社会福祉学科を増設し、社会福祉学研究の充実を期したい。また専攻科を開設し、高度の社会福祉研究機関としたい。

二、医療福祉学、産業福祉学講座の充実を計る。

三、学生の社会事業実習施設として、保育所を三十八年度までに設立し、尚その後、救護・養護及び養老の施設を設立したい。

夢は大きかったが、右のうち朽木学長の手で、産業福祉学科だけが昭和四十年度から増設されることとなった。このことは節を改めて述べることにする。

第三節　産業福祉学科増設

第一　増設の事由

戦後わが国の産業は、朝鮮戦争を機に伸びはじめ、米独英等の諸国に追いつき追いこせと急成長をとげた。これに伴って労働問題、特に労使関係或いはこれと関連しての社会保障等諸般の問題が山積している。そしてこれらを一括して、産業福祉関係の分野が社会の注目を浴び、その拡充に向っての努力が試みられるに至ったため、必然的に産業福祉部門の業務に従事する要員を養成し、産業福祉の発展に役立たせることは重要な意義をもつこととなった。本学に産業福祉学科設置が計画されたのは、このような社会の情勢に応じようとするものであった。折から東北地方は、仙塩地区を始め、新産業都市の建設が進められつつある時であったから、いっそう時宜に適した目論見であったといえよう。

昭和三十九年六月の理事会では、朽木学長から「時代の要請である産業界、労働界の福祉業務の向上を図るため、

斯界に従事する専門技術家を養成し、わが国社会保障制度の振興に寄与したい念願」から産業福祉学科を増設したい旨の説明があり、教授会の議を経て、愛知文部大臣あて増設届出書を提出、四十年度より開設することの認可があった。学生定員は三〇名、総定員は一二〇名であった。

学科目は、産業福祉学科の趣旨からいっても、専門科目については、産業心理学、産業福祉概論、労務管理論、労働医学、労働衛生学、労使関係論といった産業の現場に密着するものが多く、このため専門の学者を迎え入れて教授陣を強化した。

第二　校舎増築

産業福祉学科の増設について最も問題になったのは、校舎の面積が果して要件にかなうかどうかということであった。これに対し朽木学長は理事会でも教授会でも、質問に対して次のような答弁をくり返している。すなわち「大学の現在の校舎は九七五坪、うち専用が八一九坪、共用が一五六坪となっている。このほかに木造一〇九坪の建物を改造して二教室が簡単にできる。現在の社会福祉学科だけの場合は、八〇〇坪あれば基準を満足するので、開設年度は

講堂棟三階竣工

あと一四〇坪あれば増設は可能である。だが第二年度からは年次計画をたてて、永久的な建造物をつくることも必要と考える」と答え、本格的な新校舎の建築をほのめかしているように見える。

しかし朽木学長の実施内容は、高校校舎及び講堂の屋上一ぱいに三階を増築するものであった。工事は昭和四十年度に高校三階（現在講義室三）、四十一年度に講堂三階（現在大講義室一）が完成し、四十年十二月一日には高校校舎増築と校地西側につくられた柔道場の落成式が行われた。

第四節　大学紛争始末

昭和四十二年五月下旬、東北福祉大学の脱税記事が二、三の東京新聞及び地元河北新報に報道された。脱税の額は六〇〇万円程度で、これは必ずしも計画的に脱税したものではなく、不在がちの学長及び経理担当者の不慣れのためであったと、やや同情的に見る新聞もあったが、一方には正面から学長攻撃の鉾先を向けるものもあって、学園内外に大きな波紋を生じた。

学生の間には、この問題に対する批判の色が次第に濃くなり、遂に六月十六日に至って、学長不信を唱える学生側の強硬な抗議が大学当局になされ、学長の責任ある答弁を求める要求がくり返された。

学生の要求は数十項目あったが、その主なるものは、㈠朽木学長の辞職、㈡学園の経理公開、㈢学園の民主化であった。しかしながら朽木学長には、もちろんこれに応ずる意志はなかったから、両者の主張は対立し、解決のめどは全く立たず、学園は揺れにゆれて止まるところを知らないように見えた。

かくて十月十一日に至り、学生側の要求が提出されて以来約四ヶ月ぶりに学長との交渉が持たれることになった。しかし朽木学長としては、学長の進退は理事会の決するところであり、経理もまた学生に公開する何らの根拠もない

大学喜心寮（旧男子寮）

のであるから、これに応ずることは出来ないとし、両者の主張は全くかみ合わなかった。この間すきを見て学長室になだれ込んだ学生たちのため、朽木学長、西川学監らは軟禁状態におちいった。よって学長は辞職願を書くと共に、一方警察の救援を求めてようやく脱出し、直ちに入院した。けれどもこの後、先に書いた辞職願は、自己の意志によらず、やむを得ない状態のもとで、強制されて書いたものであるから無効であると声明したので、情況は悪化したまま推移した。

朽木学長の静養中、理事会は熊谷東全理事を学長代理に、また西川学監を学園長代理に任命して、紛争の善後処理にあたらせた。熊谷学長代理らは、早速学生代表と会見して交渉を開始したが、学生側の態度は強硬で、解決のいとぐちを直ちに見出すことは困難であった。

しかし学生側の空気も次第におだやかとなり、従来の態度を反省する色も見え始め、翌四十三年に入ってからは、熊谷、西川両師の努力が実って、紛争も次第に鎮静に赴き、三月二十一日朽木学長の退任をもって解決することとなった。ただこの後遺症はその後も尾を曳き、その完全な解決は、次の大久保学長の手に委ねられることとなった。

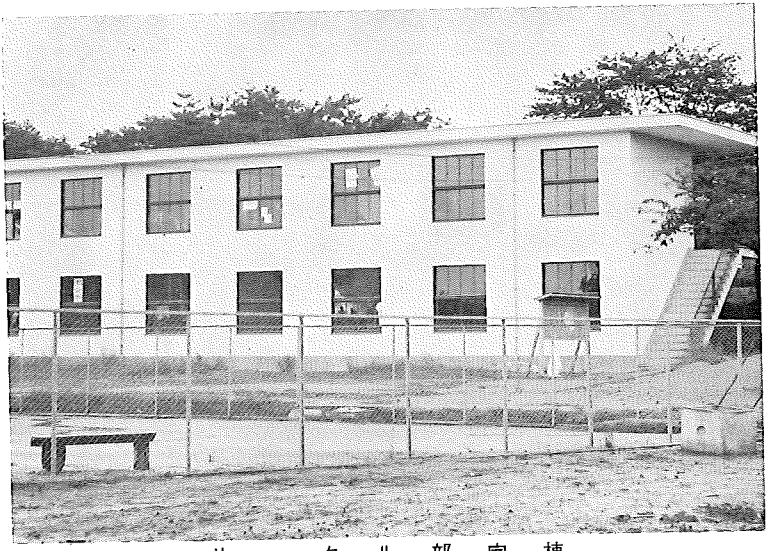
第五節　朽木学長の退陣

昭和四十二年春以来、東北福祉大学の学生紛争により、しばらく静養しつつあった朽木学長は、四十三年三月二十一日遂に任を退いて、郷里秋田県湯沢市に帰山することとなった。在任十二年、歴代のうち最も長期にわたっている。

先にも述べたとおり、戦後本校の復興は最も難渋をきわめ、歴代校長いずれも心を労すること甚しく、しかもその苦辛に比例して必ずしも酬られずに終った観がある。然るに朽木学長の場合は、たしかに多くの苦労を重ねたことは事実であるが、よくこれを乗り超え、最終目標たる大学の建設を成しとげたことは、ある意味においては幸運でもあった。

師の計画はつぎつぎと打ち出され、それを達成するための資金造成についても相当の無理をともない、しかも無理を承知で押通した強引さについては、正直いって今も方々でこれを論ずる声が残っている。師一流の強引さについて行けず、袂を別った人々も少くない。その他師独特のワンマン振りに対する実話乃至伝説は、語りつがれて今に至るもの決して鮮少ではない。

だが、これによって、師の学園に対する大きな功績を没する



サークル部室棟

ことは出来ない。師の大学建設に対する理想追及は急テンポで、これを実現するまでの道程において、たしかに常識を超えた方法がとられたことも事実であろう。しかし客観状勢の頗る困難な時期に目標を達成した強靱な信念と意欲とは、大いに買わるべきものである。また大学建設は、雲を見て水を見ざる底のものであったが、それを遮二無二押通した強引さこそ、この場合むしろ必要だったともいえる。この意欲と強引さとは一連の強力な作用を生じ、のるか反るかの隘路を切抜けしめた。朽木師は畢竟乱世の英雄ともいうべき人であった。この時、この人あってはじめて大学は建設された。天の配剤ともいうべきである。東北福祉大学創設の事業は、朽木学長の無類の実行力、推進力をもといとして造り上げられたものであることを知らねばならない。

昭和四十年十二月一日、高校校舎三階増築工事等の落成式にあたり式辞に述べて曰く「私は人の毀誉褒貶はしばらく措き、本校の名声を将来に持ち続けんがための方策として、八方考慮の上、東北福祉大学の設置を無理と知りつつ、これが実現に努力した次第です」と。

惜しいかな、大学紛争のため、最後を飾ることが出来ずに退いた。朽木学長の全活動は政治的色彩にいろどられ、武将の華やかさと淋しさとを併せ持ち、その退任はやはり退陣と呼ぶのがふさわしい。

師は学長退任後も宗議会議員として活動し、本庁部長や宗議会議長を歴任したが、昭和五十年一月十一日病のため遷化された。

第三章　拡充の時代

第一節　大久保学長着任

昭和四十三年三月二十一日、朽木前学長退任の日、新学園長兼学長として、福井県武生市竜門寺住職、文学博士大久保道舟師が任命された。学園紛争によって、何となく暗い空気に包まれていた学園の人々は、この際諸事一新し、そこから大学発展のいとぐちを開いて行きたいという大きな期待をもって、新しい学園の主を迎えたのであった。

大久保新学長は明治二十九年七月一日、福井県武生市に生れ、九才にして仏門に入り、のち遠く石見国津和野の永明寺に移った。少時より英才の誉れが高く、やがて山口県防府市の第四中学林（現在の多々良高等学校）に入り、同中学校を卒えて、曹洞宗大学に進み、大正十二年首席を以て卒業、直ちに曹洞宗研究生を命ぜられて禅学・仏教学の研究に従事した。その間駒沢大学助教授及び東京帝国大学史料編纂官補に任ぜられたが、引きつづき曹洞宗研究員として歴史学の研究にたずさわり、多くの学術論文を発表して頭角をあらわした。昭和二十年請われて大東亜錬成官となったが、終戦とともに郷里に帰った。

その後福井大学から招かれて同大学教授となり、次で多年にわたる歴史学研究の業績によって東京教育大学から文学博士の称号を授与された。昭和三十七年停年で福井大学を退き、退官後は福井女子短期大学の副学長、福井工業大学教授となり、更に駒沢大学大学院講師をも兼ねた。その間武生市公民館長、同図書館長、文部省史料館地方調査委員、福井県社会教育委員等を委嘱せられ、また第五期から日本学術会議会員に当選して学界に尽すとともに、福井県文化財専門委員長として文化財保護に貢献する等、その多方面に及ぶ活躍は、師の才学の巾広さをおのずから物語っ

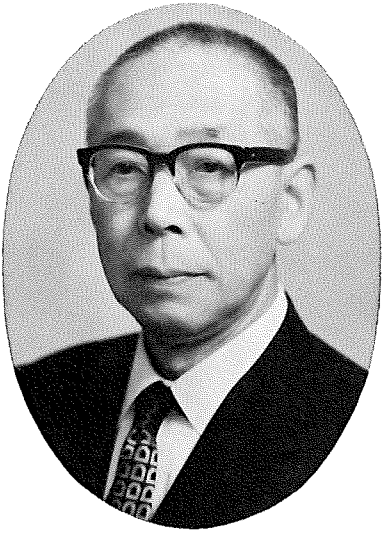
ている。

このような大久保学長の経歴や人柄からいっても、学園内に学問的雰囲気がみなぎり、明るい明日が約束されているような予感が、学園内のすべての人々の心にいきわたった。

昭和四十三年十月、大学紛争に責任を感じて山田峯隣学監が退職し、峯岸応哉学監が任命された。越えて四十四年四月、学園長代理として紛争の処理に当った西川悦巌学監が退き福島県石川町の長泉寺に皈住した。翌四十五年惜しくも病のため逝去した。

第二節　充実から発展へ

第一　拡充への始動



大久保道舟学長

大久保学長が着任したばかりの段階では、新学長の任務は何よりも紛争に荒れ果てた学園の整理にあたることであった。一応表面は鎮静したようなものの、よく見ればいろいろな矛盾が残存し、それらを合理的に処理したのちでなければ、新しい動きに出ることは到底許されなかった。このためしばらくは残された問題を片づけ、内部の態勢を整えることに力を注いだ。着任後一年半、昭和四十四年十月の評議員会における挨拶はこの間の事情をよく物語っている。

学園は昨年以来、諸問題の解決に腐心して来ましたが、

この二月を境として、学生の動きも平静に戻り、恐らくこの秋もさしたる動揺はないものと予想され、今日全国的に激化している大学紛争をよそ目に静かであることは喜びにたえないところです。

本年は予想以上の多数の入学生がありましたが、明春は更に多くを目標に広報につとめたい。また夏から計画を立てて社会福祉学科を定員五〇名から一〇〇名に、産業福祉学科を三〇名から五〇名に増員のことを文部省に届けずみであり、これと同時に養護学校教諭免許状も申請ずみで十二月には認可になりましょう。これで高・中のほか福祉関係のすべてがとれる立派な単科大学になります。

今までは従前からの欠陥を補うことに追われて計画らしい計画を立てる余裕もありませんでした。それに私は借金をしないで、自主独立の財政をモットーにやって来ましたが、来年度の学生募集を成功させるためにも、今回の学生増員計画に備えて、最初に校舎の増築と幼稚園舎の拡張などを考えている次第です。

大久保学長の心境の一端を示すものである。

しかもここでは健全財政をモットーにしてやって来た。財政的にも無理はしない。確実な見通しがなければ事業は起さないという着実な方針を謳いあげている。

第二　一号館増築

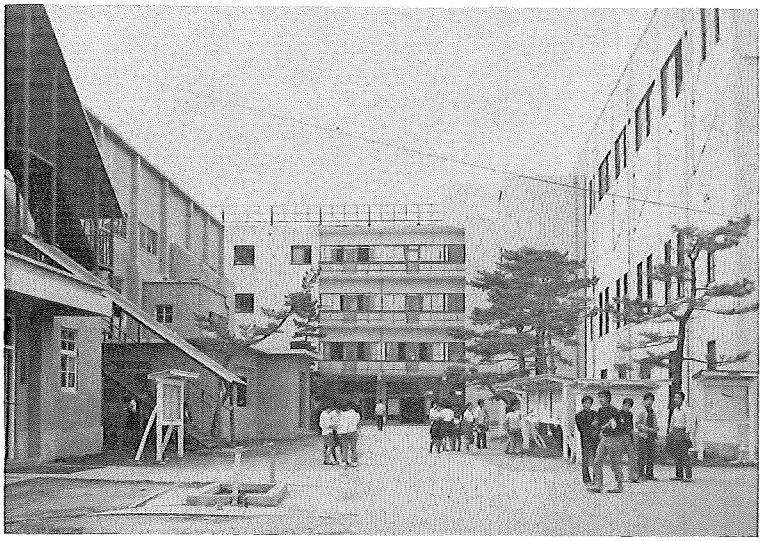
入学者数は確実に増加していた。翌四十五年二月の評議員会では、四十五年度は定員増の手続きをすまして、四〇〇名乃至四五〇名入れたい。そのためにも昨年から建設の方もそろそろ手をつけ始めている、と報告している。すなわち昭和四十四年度は講堂三階の補強工事に着手し安全使用に万全を期した。しかし一号館とこの講堂棟、高校三階とは、同じ大学の教室であり、しかも隣り合せでありながら、直接往来が出来ない。一旦下に降りて更に鉄の外階段を上って行かなければ用は足せないという不便さであった。先づこの不便さを解消しなければならない。

工事は直ちに着手された。一号館と両校舎間の距離は各一〇余mであったが、この間をいわば四階の校舎をもって埋めるような形になった。このようにして離ればなれに建っていた第一号館、高校棟、講堂棟が完全にコの字形に連絡され、各々の機能を発揮できるようになった。四十六年の八月であった。

その上この連結工事によって新しく出来上ったものは、教室二、臨床面接訓練室一、児童遊戯治療室一、演習室二、学生相談室一、保健室一、教官研究室十七に及び、施設上の大きな増強をなし遂げたのであった。

大久保学長は屢々「大学らしい大学づくり」という言葉をくり返している。その内容は当然精神的なものと物的なものとにわたるだろうが、前者は後述するとして、恐らく赴任の日、構内を見まわして、大学というには余りに貧しい施設の有様に、少なからざる佗しさを感じたのではないかと思う。「もっと大学らしい大学にしなければ」これがいつも学長の脳裡を離れぬ念願となって、自らを激しく揺り動かしたに違いない。

かくしてひそかに満を持していた充実の時は過ぎ、発展の第一歩は踏み出されたのであった。



第一号館増築

第三節　社会教育学科増設

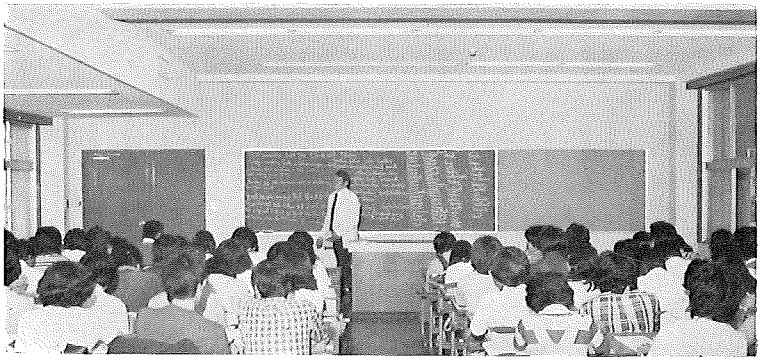
第一　増設の理由

教育は単に在学中だけのものでなく全人生を通じての問題であり、われわれは絶えざる人間的教養の錬磨を必要とすることは、もとより論ずるまでもない。いわゆる生涯教育が叫ばれて以来、特に社会教育の重要性が改めて認識されることとなった。

社会教育法にはこれを定義して、学校教育を除く主として青少年及び成人に対して行なわれる組織的教育活動なりとし、すべての国民があらゆる機会、あらゆる場所を利用して、自己の文化的教養を高め得るよう努めるべきことを説いている。生涯教育といっても結局、これを可能ならしめる組織と場所と機会が提供され、これを助長する知識と技術をもった指導者が必要である。このようにして環境と指導者に恵まれて高められた地域住民の総意こそ、あらゆる福祉活動と密接な関係をもつものというべきであろう。殊に末端における福祉活動においては、地域住民の社会教育的背景を抜きにしては、十分な効果をあげ得ないことは火をみるよりも明らかである。大久保学長はここに着目し、昭和四十五年五月二十七日、曹洞宗宗務庁会議室で開かれた理事会で次のように、社会教育学科増設の理由を述べている。

今後の国民教育は青少年を対象とするのみでなく、大人も子供も男も女も、産業人も教育者もみんながお互いに睦み合い導きあって、お互の教養を高めていくような方法が取られなければならない。このことは「公民館運営要綱」をまつまでもなく、社会教育の普遍的な重要性を物語っています。しかるにかかる重要な命題に対する専門従事者の養成機関を概観するのに、幾つかの大学にコース制が設けられているほか、短期の認定講習等で、間に合せ的に行なっているに過ぎません。ここにおいて本学がわが国はじめての独自の社会教育学科を新設して人材の養成

をはかり、自信をもってこの道に挺身する社会教育の担い手を送り出したい。そこに本学の使命を感じますし、文部省でも大いにこれに期待をかけていると聞いています。社会教育と社会福祉と、この二つが両々相まって充実するとき、始めて理想社会が実現すると識者は指摘していますが、これは同時に私の持論でもあります。殊に宗教的基盤の上に福祉を打ち立てようとする本学の場合は、一層その感を深くするものです。従って寺院関係においてこの学科を大に利用して貫いたいと思います。とに角一日も早く二十一世紀を志向する教育体制を打出したい。このように私は念願するものです。



講　義　風　景

と力説し、これに対し遠藤霊羊理事は、

大久保学長赴任以来、学園の刷新充実に格段の進展を具現し、今また時宜に適した学科新設の構想を伺い、まことに心強い感を禁じ得ない。この際特に要望したいことは、先ず

一、よい意味での私学の特色と自主性を十分発揮してほしいこと、

二、宗門関係はもちろん一般学生に対しても、宗教的情操の涵養には一段と留意されたいこと、

三、社会教育施設との関連を密にして、理論と実際の相即をはかり、実力をそなえた人材を養成してほしいこと、

以上の事柄を特にお願いしたいと希望を述べ、全員一致して賛成の意を表した。

第二　増設の認可

昭和四十五年九月「社会教育学科設置に伴う協議書」を坂田文部大臣あて申請した。こえて四十六年一月十一日、文部省大学学術局長から社会教育学科開設許可の通知書が発せられ、改善または充実すべき事項として、校地が不足しているから拡充につとめるよう指摘された。

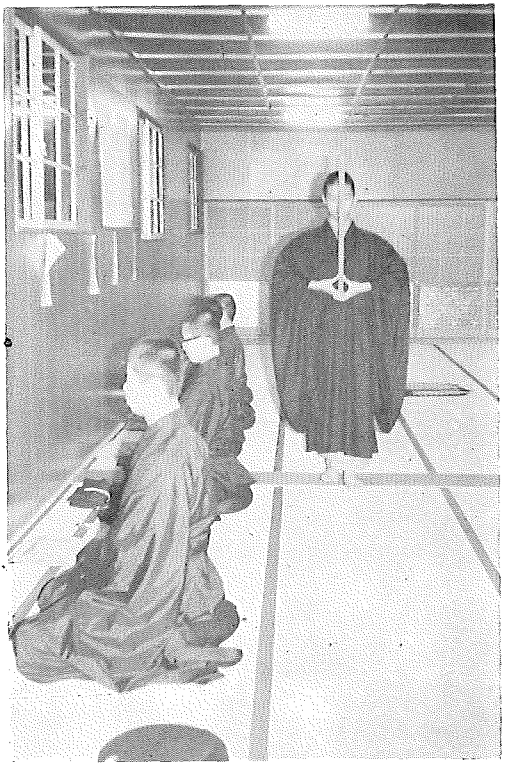
しかしこの問題は、宮城町大倉に運動場建設の計画が既に進んでおり、解決したも同然であったから、計画どおり社会教育学科は、昭和四十六年四月から開設されることとなった。これで入学定員は、社会福祉学科一〇〇名、産業福祉学科五〇名、社会教育学科五〇名、合計二〇〇名。学生の総定員は修業年限四ヶ年で八〇〇名となった。

学科は必修科目のみをあげれば、社会教育概論、社会教育史、社会教育方法論、社会教育施設論、社会教育行政論、社会心理学、教育社会学等で、これに多数の選択科目が加えられ、特に図書館司書の資格を与えられるので、図書館学関係のものが多い。全体として社会教育の広汎多様な内容に対応できるよう組立てられているといってよかろう。

第四節　仏教専修科設置

学園内における宗風を匡すことが大久保学長の基本的な方針であった。然るに東北福祉大学が曹洞宗立なのに拘らず、未だ宗門出身の学生に法式を学び弁道を励む施設がないのは、大きな欠陥ともいうべきであった。学園百年の歴史を貫く仏教精神こそ大学のよって立つ根拠であらねばならぬ。すでに栴檀学園高校においては仏教専修科が置かれ、〝誠実・和敬・精進〟をモットーとして修行を積み、一方岩手県黒石正法寺の特別安居を重ねて、教師養成の任務を果してきた。大学においても当然寺院出身子弟に対し、教師養成の施設を置くべきであるとの見地から、昭和四十六年四月一日仏教専修科が設けられ、新しい規程が定められた。

規程によると、前述の如く本学の在学生である曹洞宗寺院の子弟を対象とするもので、宗乗・余乗を学得させ、本宗僧侶としての使命を自覚させることを目的とし、そのために宗門の行持、威儀作法その他の必要な事項を授ける。こうして仏教概論・仏教史・禅学概論・禅宗史・経論・禅籍等の講読のほか、参禅・法式・声明等を履習し、更に宗制による特別安居を修了した者は、在学中無試験で二等教師に補任されるのである。



臘八接心（旧法堂にて）

仏教専修科は現在の大学院棟内に置かれており、坐禅法式等は福聚殿一階の日本間王三昧室で行なわれているが、目下禅堂建設の計画が進行中なので、本格的な修行の場が遠からず実現するものと思う。

仏教専修科の動きは未だ活発という程ではないが、学園内の釈迦降誕会・成道会・涅槃会・両祖忌等の仏教行事は同専修科を中心として進められ、その活動は次第に定着してきている。はじめは在学中、最後の一年は全員入寮せしめ、特別の修行を課して一等教師を付与して貰おうとの案もあったが、諸種の事情により、この案は推進されずに終った。

仏教専修科生は現在二十数名に過ぎない。宗内生はこれを百名程度までもって行き、宗門大学として、従来の教化機関から一歩進めて、いわゆる養成機関としての性格をもたせたい。そのためには宗門各寺院にこの趣旨を徹底させ、

社会教育学科と合せて大に利用してほしいというのが大久保学長の念願である。
仏教専修科の主任は、昭和四十八年度から西山広宣講師（現在助教授）である。

第五節　学園長再任

昭和四十七年二月定例評議員会が、大久保学長の任期切れを目前にして、図書館楼上で開かれた。議事終了後、葦名俊清評議員より、この際評議員会として、学長人事につき、何らかの意志表示が必要でないかという緊急動議が提出された。よって学長の退席を求め、同氏より大久保学長の留任が学園発展のため最も適切であると思うと述べ全員これに賛成した。このあと宗務総長及び理事会に対し、大久保学長の再任要望書を送ることを決議し、直ちに左のような要望書が作成された。

その要旨は、大久保学長が紛争後の学園の整理に挺身し、今や地方寺院の強力なる支持のもとに、学科の増設、学生の定員増加、施設設備の充実等学園の面目を一新したばかりか、学園内一致しての協力態勢が出来上っていることは心強い限りである。願わくは学園のために、現学長を再任して、その経綸を存分に発揮せしめられるよう懇願に堪えないとするもので、全評議員が署名捺印した。

学長人事については、宗務総長に一任されていたが、大久保学長の実績がものをいったことは勿論ながら、このような評議員会の興望もまた総長を動かし、再任は難なく決定した。四月一日が再任の日であった。

この年五月十七日　評議員会があり、議事終了後、一同このたび購入した大倉運動場用地を視察し、定義如来に詣でてのち、作並温泉仙山荘に投宿。午後五時すぎから、大久保学園長の再任と喜寿の祝いを兼ねて祝賀の宴を催し、歓を尽して散会した。

学園内すべての人々による祝賀会は七月一日午後三時からシテイホテルにおいて開催された。この日は特に福井県武生市より学長夫人をお迎えし、次々に祝いの言葉が呈せられ、或いは寿詩を贈呈するあり、余興を披露するあり、時の移るのを知らなかった。

大久保学長は喜寿ながら頗る壮健、学園の明日を語り、学園のために、共どもに進もうではないかと謝辞の中に述べて、決意を新たにするところがあった。

第六節　学生相談室とクラス担任制

第一　学生相談室

多くの大学で学生相談室がおかれ、それぞれの機能を発揮しているが、本学でも昭和四十七年四月から学生相談室が開設され、医学博士安田陸郎教授を最初の室長として、主として学生の健康相談に応ずることになった。はじめは広報が徹底しなかったためか利用者が少なかったが、次第に相談室を訪ねる学生も多くなり、この頃では月に二十件に及びこともあるようになった。

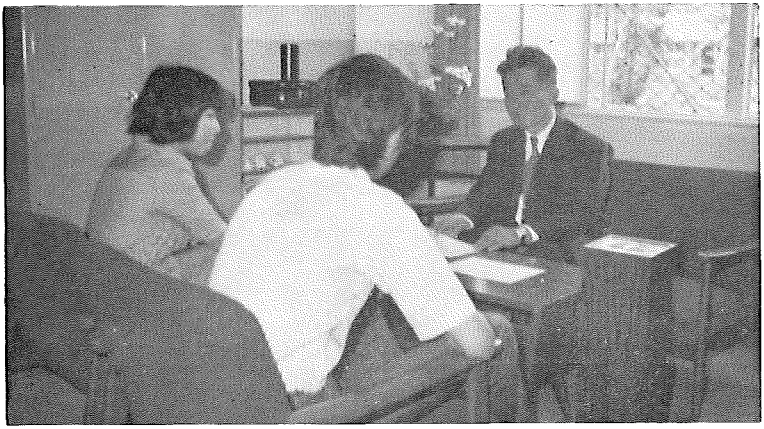
相談の内容も広汎となり、健康相談のほか、精神衛生の問題、カリキュラムのこと、卒業論文に関すること、就職・進路の問題、その他生活上或いは交友上の悩み等多方面にわたっている。現在本学教員の中から八名の相談員が選ばれて相談に応じており、相談室もはじめ一号館の四階にあったが、今は一階に移されて利用に便利になった。開設されるのは毎週土曜日を除く五日間で相談員の当番表が発表されている。

学生時代は特に人生問題その他に多くの疑問を持ち、その疑問を整理し、解決することによって、人間的成長をとげていく時期である。もとよりそういう疑問を解決していくのは、本人の自主的自発的な努力に俟つべきであるが、

疑問を相手にぶつけて助言を受け、そこに触発の機会をつかむことも非常に有効な方法である。相談室では学生が積極的にこれを活用してくれることを歓迎している。

安田教授は昭和四十二年から四十四年まで学部長をつとめ、また初代後援会長として本学の発展に尽した功績者であるが、昭和四十八年退職した。

四十九年度からは、室長は福祉心理学科科長の北村晴朗教授となり、新たに学生相談室規程などが定められ、学生の自発性を尊重し、学生の人間形成に資することを目的として本格的活動を開始した。



学生相談

第二　クラス担任制

大久保学長再任の年は、新入学生も増えたので、その指導については、学生相談室のように特殊のケースを扱うほか、それ以前に平素の指導が、一般的にいきわたる必要のあることが痛感された。

大学生といっても、かつてのイメージと異り、今は大学の数もふえ、進学率もぐっと高まって、大衆的なものに変ってしまった。従って、その素質も性向も千差万別、中には学業に興味を失ない、それが原因で消極的、退廃的な生活に沈み、或いは不平不満から自暴自棄的な行為に走る恐れもないわけではない。また産業界の好況に惑わされて甘えの傾向を多分に持つなど、いずれにしてもこれをこのまま見過すことは許されない状況である。

しかして、これらの指導は単なる形式的なものでは到底不可能で、やはり教師と学生との人間的接触による以外には有効な方法は考えられないのである。

よって昭和四十七年四月八日の教授会ではこのことをとり上げ、主として新入生を対象として効果的運営をはかることとなった。具体的には、先づ三十乃至四十名をもって一クラスを編成し、全教員でこれを分担する。そしてカリキュラムの履習方法、進路、家庭、或いは経済問題、交友問題、その他何でも親身になって相談に乗ることにした。そのためには入学早々その機会をつくる必要があるので、四月は少くとも二回は集会を持つこととし、その運営は担任の創意にまかせた。従ってコンパやピクニックなどの行事も考えられて、学生と教師との人間的接触がかなりはかられているものと見て差支えない。また、このことは前項の学生相談室の活動と相俟って一層学生指導上の成果を期待できる仕組みとなっている。

相談室及びクラス担任制の両者は学長の管理のもとに、学生の補導及び厚生その他の重要事項を審議する学生部運営委員会の所管に属している。委員会は教授会の下部組織であって、教授会の意志に基づき学生部に協力して問題の処理に当ることもあり、その逆に特定の問題につき資料を整えて教授会にこれを進言することもある。委員会の構成は学監学

クラスの集い

部長、各部課長、或は教授会で選ばれた委員会から成り、現委員長は奥野泉学生部長である。

第七節　大学通信の発刊と「建学の精神」

昭和四十七年七月一日「東北福祉大学通信」第一号が創刊された。これより先、教授会において学生父兄との連絡機関としての広報紙が必要であるとの見解から、直ちにその手配が行なわれた。すなわち編輯委員としては事務局の部課長、図書館長及び社会福祉、産業福祉、社会教育の各科長が当り、また学生課の中に「通信」の事務処理を行なう係員二名をおいた。発行責任者には学監を充て、発行の回数は年二回乃至三回、タブロイド版ときまった。「通信」の効果は大きかった。大学と学生、父兄、或いは大学関係者との間の意志疏通はこれによって新生面を開いたといっても過言でない。

先づ冒頭大久保道舟学長は「発行に当って」と題して刊行の趣旨を次のように述べている。この中には学長の抱懐する建学の精神が酌みとられると思われるので、やや長文であるが左に掲げることにした。

本学が生れて茲に十五年、本学の全貌を自らの手によって社会に公表することは今回が初めてである。それは内容が充実していなかったため、世間に遠慮していたのか、それとも公表の機関を持たなかったのか明らかでないがいずれにしても永い間の雌伏であった。

今回機熟してこの「通信」の誕生を見たことは、正に本学が大学としての自信を深めた結果に外ならない。まことに喜ばしい次第である。本学はこの春二百名近い卒業生を社会に送り出し、その数は年々増加の一途を辿っているが、開学以来の総数は約二千名にも達している。「同窓会名簿」によると、これらの人々は福祉施設の重要なポストに就いて活躍しているようであるが、本学がこの方面に果している功績は正に著大である。それだけに、私は

東北福祉大学通信

題字　学長　大久保道舟

発行所　東北福祉大学
仙台市国見1丁目8番1号
TEL 33—3111（代）
発行責任者　佐藤　恒雄

大学通信第一号

発刊にあたって

学長　大久保道舟

本学が生れて茲に十五年、本学の全貌を自らの手によって社会に

ったため世間に瑞出したのか、そ生を社会に送り出し、年々増加のれとも公表の機関を持たなかったのか、明かでないが、いずれにしても永い間の謹沢であった。

今回機運巡してこの「通信」の誕生をみたことは、正に本学が大学としての自信を深めた結果に外ならない。まことに喜ばしい次第

一途を辿っているが、開学以来の総数は約三千名にも達している。「同窓会名簿」によると、これ等の人々は福祉施設の重要なポストに就いて活躍しているようであるが、本学がこの方面に果たしている功績は実に著大である。それだけに私は本学の内容充実に懸命の

本学の内容充実に懸命の努力を払わねばならぬと覚悟している。

と大学の発展を喜び自らの決意を述べるとともに更に社会福祉の精神を論じた。その大略を記せば

昨今民主主義のはき違いから、その病毒が家庭社会のあらゆる分野にまで浸透していることは嘆かわしき次第である。民主主義の本場であるアメリカ人は民主主義の九つの原則をあげている。すなわち平和・自由・寛容・真理・正義・親切・奉仕・協力・平等の九つである。しかるに一般にはこの中の自由と平等だけをとり上げて、他の七つのものには眼を掩うている。残る七つの原則は多分に宗教的、道徳的要素が含まれているが、これらについては全く顧みようとしない。その結果、理性を失ない、感性の赴くまま動物的本能に走り、最後には暴力さえも肯定しようとしている。仏教からいえば、吾々の理想世界は真実智慧によって開顕されたものでなければならぬ。それには心の調整が第一で、さまざまな厳しい戒律が定められている。いわゆる戒・定・慧の三学によって理想社会が実現されるのであって、それには法則を守り、秩序に従って行動することが前提となっている。天体を始め大自然はその間に調和が保たれ、相互に自主性を発揮しつつ共栄の実

をあげている。いずれも宇宙の「和の原則」に基いているのである。然るに今日いたずらに自己中心の利己的、個人主義に走り、他との調和を忘れ去っているのは、まことに情けないことではないか。社会福祉活動は相互幸福の観点に立って推進さるべきであって、社会福祉従事者は、自らが相互幸福の理解者たると同時に享受する側に対してこれを理解せしめるよう努力しなければならぬ。この意味において福祉従事者は、社会教育的自覚を持った精神的指導者たるを要し、そのためには「宗教的体験」を身につけることが何よりも肝要となってくる。

一般に福祉といえば、他に物を与えることだと思っているが、単に与えるだけでなく、その物についての精神的意義を知らしめ、相手に感謝の気持を起させるよう努めねばならぬ。つまり精神的糧を与えることが大切な仕事である。聖徳太子が四箇院を設けられるに当り、敬田院（精神修養の道場）を加えられたことは、その聡明な御態度に敬服せざるを得ない。この意味において、福祉事業にたずさわる者としては、常に精神的福祉ということに留意し、自己を磨く（宗教的、道徳的教養を高める）と同時に「真箇の福祉とは何ぞや」の公案に参究せねばならぬ。右によって、大久保学長の提示する建学の精神を理解することが出来ると共に、この精神こそは学長着任以来折にふれ時に応じて、つねに説いてやまぬところのものであることを知らねばならぬ。

第八節　仏教社会福祉研究所

第一　仏教社会福祉研究所と紀要

社会福祉が、仏教の精神に根ざすところ極めて深いことはいうまでもないが、社会福祉と仏教との関わり合いを討究して、社会福祉の精神を闡明し、そのあるべき相を究明することは、大久保学長着任以来の念願の一つであった。このため研究所設置の計画は早くから進められて来たものの、どのようなテーマを持ち、どのような形のものにすべ

きか容易にまとまらなかった。しかし検討を重ねた結果、研究所の性格から「社会福祉全般を対象とするのでなく、社会福祉の中の特殊な面を重点的に研究する」ことに落ち着き、昭和四十七年六月の教授会に提案され、翌七月から開設されることになった。名称も本学創立の精神に鑑み「仏教社会福祉研究所」と命名された。

研究所は図書館（現大学院棟）内におき所長に矢島羊吉教授が任命されたが、同教授辞任後は大久保学長の兼任になっている。研究所員もはじめ七人であったが、その後増加されて十一人になった。

昭和五十一年度末、待たれていた『東北福祉大学仏教社会福祉研究所紀要第一号』が発刊された。所員の研究成果を世に問うものであるが、幸い好評を博して希望者の多いことはまことに心強い。今後、毎年一冊ぐらいの割合で刊行される予定であるが、この分野の綜合的研究を目ざす本研究所の存在価値を大いに示してくれることであろう。

福祉観音像（事務局玄関安置）

第二　東北福祉大学紀要

これは仏教社会福祉研究所と関係はないが、ここで『東北福祉大学紀要』について一言したい。

昭和三十三年、本学の前身である短大誕生の年『東北福祉短期大学論叢第一号』が刊行され、短大に教鞭をとるす

べての先生がこれに筆を執った。その後、昭和三十七年東北福祉大学設置に伴ない、その第四巻をもって、『東北福祉大学論叢』と改称し、この年から編輯委員会を新たに組織して、その業務に当ることになり、爾来今日まで刊行を続けている。

構内風景（2号館から仙台市遠望）

この論叢は、元来社会福祉学会の系統に属するものであるが、これとは別に本学独自の研究発表のため、新たに『東北福祉大学紀要』の刊行を必要とするに至り、昭和五十一年その第一号が創刊された。所載の論文はいずれも苦心の作に成り、中に注目すべき力作も少くない。

第三　日本社会福祉学会第二〇回大会

昭和四十七年十月七・八両日にわたって日本社会福祉学会第二〇回大会が本学で開催された。同学会は戦後ＧＨＱ社会福祉局、京阪神各府県民生福祉局、各大学社会福祉担当者等が集って、「関西社会事業者懇談会」が成立して以来、関東関西に起った研究団体が大同団結し、昭和二十九年全国の福祉関係研究者などに呼びかけて結成されたものである。その第一回研究大会は大阪市で開催され、爾来各地で毎年の総会及び研究大会を開き、その時どきの社会福祉の問題をめぐって共通論題を掲げ、研究討議がくり返されてきた。本学は短

期大学の時代第七回の会場となったが、再び会場を引受け「社会福祉労働の現状と課題」なる命題のもとに熱心な論議が行なわれた。本学からは武永親雄助教授ほか三人の研究発表があった。

論議の焦点は、四十六年度中央社会審議会から起草された「社会福祉法」試案についての諸問題で、現業側から専門労働の実態、矛盾、政策の貧困等が提起され、多くの成果をあげて散会した。当日の参加者は、県、市への報告では会員二七六名、非会員一四〇名、学生二〇〇名、合計六一六名。盛会であった。

第九節　人事往来

学長更迭直後の人事については、先にその一部を記しておいたが、その後の学監、学部長等について一括して簡潔に述べておきたい。

(一) 学監制復活

先に山田・西川両学監退任の後を受けて峯岸応哉学監が就任したが、昭和四十四年十月寄附行為の改訂により副学長に任ぜられたのであった。しかし、同氏は副学長在任二年、故あって職を辞して故山に帰ったので、この後は副学長の制度は廃止され、再び学監制の旧に戻った。

新学監には佐藤恒雄教授が選任された。同氏は本学園出身であり、学内の事情に精通している。学監補佐には菅原寛一図書館事務長が転じ、やがて副学監に昇任した。

昭和五十年四月、佐藤学監は教授に専任せられ、代って菅原副学監が同氏のあとを襲った。菅原新学監も本学園出身である。そして副学監には大石孝章氏が新任された。

(二) 学部長の更迭

西内潔教授は、昭和四十四年九月以来学部長となったが、昭和四十六年十一月二十五日市営バスの中で急病のため逝去された。先生は学界では特にセッツルメントに関する研究で多くの業績をあげた。

西内学部長の後任には、図書館長矢島羊吉教授が任命された。同氏は識見高く、大久保学長を輔けて本学の発展に寄与された。昭和五十二年三月停年のため席を黒羽茂教授に譲った。

第四章　発展の時代

第一節　学園整備計画の大要

大久保学長の就任以来、大学は次第に充実発展の度を加え、学生の数も、昭和四十七年度においては就任時の約二倍余、正に二千の大台に接近した。従って、これに対応する施設設備の拡充が要請され、その整備を急ぐ必要に迫られて来た。しかもそれは当面を凌ぐだけのものでなく、将来の発展を目ざしての積極的なものでなければならない。これらの観点からキャンパス内の整備計画が立てられ、これを必要度の高いものから、出来るだけ早く実現することになった。計画の内容を項目別にならべると。

(一) すでに一号館の増築を行なったが、それでもなお不足を告げている。年々膨脹を続ける学生のために、新しい講義棟を建設して、早目にその不満をなくしてやらねばならぬ。このための予算は既に四十七年度に計上ずみである。

(二) 次に講堂兼体育館の建設も急がねばならぬ。旧講堂も旧体育館も、急増する学生には、釣合いのとれぬ小規模なものになってしまっている。従って新講堂兼体育館には、その規模においても、外観においても、本学の象徴たらしむる如き、威容を持たせ、学園の中心となるようなものにしたい。また建物の中には、学生の食堂、ホール、その他の厚生施設を十分備えつけ、学生の要望にそいたい。

(三) 図書館は書庫閲覧室とも、もはや狭隘をつげている。すでに仏教社会福祉研究所が、この中に設けられているし、又将来ここに大学院が置かれる場合は、増築が必要となるであろう。或いは抜本的に相当規模の新図書館の建

設となるかも知れぬ。

(四) 運動場については大倉運動場を中心とし、現在のキャンパス内ではテニスコート、その他の小規模なものにとどめ、通路の周辺は庭園化して学生の憩いの場とする。

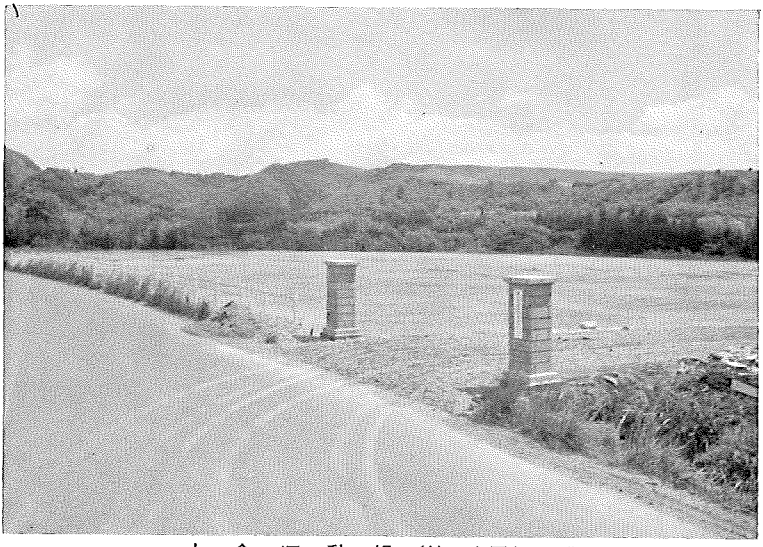
(五) 新講堂のうしろ西側一帯は、学生のための諸施設用地として、第二次整備計画にゆずること。

等の新しい方針が定められ、学園全体の統一的美化を目ざす新計画となった。

第二節　運動場の増設

第一　大倉運動場

既述のように、社会教育学科認可にあたり、校地の不足を指摘せられたが、実は昭和四十五年秋に行なわれた行政管理庁の監査においても、校地校舎の不足がとりあげられていた。このようなことから、第一号校舎の増築工事を行なうと同時に運動場の候補地を方々に物色した。しかし、その条件はかなりむづかしかった。車で三十分以内の距離、風光明媚で学生が身も心も洗われるような土地、運動場としての条件にかなうような形状と広さ、将来も還境破壊が絶対に起らないような場所と、注文がむやみに多いので、好適の



大倉運動場（第一次買収の頃）

地がなかなか見つからなかった。たまたま四十五年の冬に至って、ようやくこの土地が見つかった。しかし、名目上は農地だったので、農地転用等の手続きをすませ、四十七年三月に至って買収が完了したのであった。

場所は宮城町字大倉。国道四十八号線を作並方面に向い、車を走らせること約三十分で熊ヶ根橋を渡り、ここから定義如来西方寺の方向に進むと、すぐ仙台市の浄水場入口に達する。この入口附近一帯のうち、広瀬川の上流、大倉川の右岸約一六、〇〇〇㎡の面積を有する平坦な土地である。運動場の整備については、先づ第一期工事としての盛土による全体の整地を四十九年五月までに済まし、次に第二期工事は同年七月に竣工、野球場のバックネットも完成して、今や野球部の大型マイクロバスは国道四十八号線を軽快に往復している。

第二　第二次買収

しかし大倉運動場には、第二次の買収によって、更にこれを拡充する必要が起った。昭和五十一年五月の理事会における学長の説明によれば、私立学校助成法の成立により、爾後同法に規定する如く、学生の実員は定員の一、五倍にとどめるよう、文部省からの要請がある。然るに本学としては、経営上の基盤として、収容実員五千名を目標としている関係上、少くとも入学定員八百名、総定員三千二百名としなければならない。そしてこの新定員に応じた施設設備が要求されるわけで、設置基準によれば左のような過不足を生ずる。

	基準面積	現有面積	過・不足
校舎	一二、八七〇㎡	一八、〇四三㎡	五、一七三
校地	七七、二〇〇	四七、二四九	△二九、九五一

よって今回、宮城町大倉に三五、五三五㎡の学校用地を買入れ、基準面積を満足させたい。ということで一同異議なく原案通り議決された。

この案によれば、位置は宮城町大倉字一本木囲にある個人所有の原野・山林・田畑等で、前回買収の運動場に甚だ近い場所にあり、双方の連絡も便利で、本学運動場としては好条件の土地といってよい。買収の手続きは直ちに行なわれた。

はじめ大倉運動場に計画された第三期工事は合宿所建設でこれは単に運動部の合宿だけでなく、クラスとして或いはゼミ用として学生全体が使用できるような多目的なものが考究されている。予算の余裕が出来次第順次実現されることであろう。

新運動場専用バス

第三　松島用地買収

最後に一言つけ加えたいのは、この度買収の契約を完了した松島町手樽の用地である。広さ約一一、〇〇〇㎡、手樽小学校の東、国道四十五号線の北側に接した位置である。松島四大観の一である富山観音の高地を東方間近に仰ぎ、松の緑あざやかな島々を目睫の間に控えて、恵まれた勝地の中にある。多くの有名大学に海の家、山の家などの施設があり課外の修練施設となり、或いは休養施設ともなって、学生生活を豊かにし、学生時代のよき思い出となっている。かつて本学にもゼミナーハウスの計画があったが、諸種の都合により、これが遷延されているが、構内施設の予定が一段落した暁には、今後この方面に新しい建設が期待されるところである。

第三節　新校舎第二号館の増設

学生数の増加は著るしく、昭和四十五年には四十三年の一・五倍、四十七年には二倍を突破した。このような急激な学生の増加は教室の狭隘を来し、先に一号館の増築を行なったものの、もう立ちん坊授業もたまに見受けられるようになって、早期に学生の不満を解消する必要があった。こうして第一に決定されたのは、第二校舎すなわち二号館の建設であった。しかし、何しろ建築面積が八〇〇㎡に近い四階建ての大建築なので、これを校庭の北端に建てることは決まったものの、隣接民家に対する影響等もあり、或いはこれによって運動場を失なう結果とならないものでもなく、直ちに着工することは躊躇されるような状態であった。然るに四十七年三月大倉運動場買収が成功した結果、同五月、目黒設計所によって設計完了、続いて戸田建設会社との契約成立とつぎつぎに進捗し、七月末から着工。八月初から床堀りを開始したところ地盤は頗る堅牢であった。工費は約一億三千五百万円であった。

校舎は鉄筋コンクリート四階建て、陸屋根、屋上に地上三

第　二　号　館

○メートルの時計塔を持った二、二〇〇〇㎡の大きな建造物となった。

先づ中央地下にボイラー室があり、全校舎温風暖房式、中央ホールに階段を設け、向って左側は四階で一五〇人収容の教室四、右側は一階に学生ホール・売店・、奥に就職部関係の事務室三室と静養室が設けられた。（今は学生ホール・売店は福聚殿一階に移され、そのあとは講義室に改造された。静養室も一号館に移され、講師控室となった）二階から四階に相当する部分には三〇〇人収容の階段教室二室、この階段教室には中央ホールからの入口と、玄関を通らず外からの直接の階段によって出入できる通路がつけられ、この部分のベランダが流線型をなして見る目に美しい。階段教室及び他の一室は映写が可能である。校庭整備図に見られるように、二号館は校庭北側に南面して建てられ、明るい光線一パイにとり入れられた瀟洒な近代的建築である。

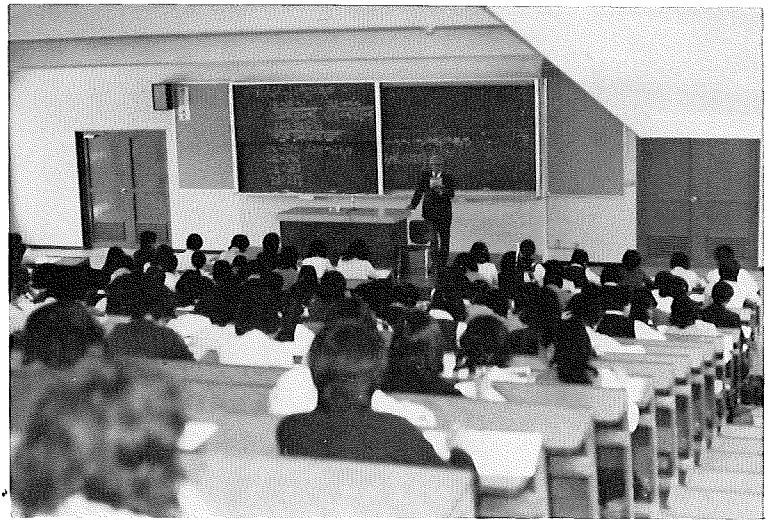
昭和四十八年四月に竣工した。

第四節　社会福祉学専攻科設置と定員増

第一　専攻科設置

昭和四十七年八月の教授会において、社会福祉学専攻科設置について、学長は設置の趣旨を次のように説明し、全員一致で決議された。これを略記すれば

社会福祉学は、わが国では比較的最近に発展して来た学問の領域で、学問としては未だ若いといってよく、それだけに今後究むべき多くのものを有している分野であるともいえよう。また一面、社会の各分野が高度に発達しつつあり、その複雑性と多岐性がますます高められている現代社会においては、社会福祉は一層高度の理論及び技術が要求されて来るのは当然である。以上の観点から、社会福祉学科四ヶ年の大学課程の上に、更に一ヶ年の社会福



大講義室

社専攻科を置き、社会福祉学の成果を高め、社会の進運、文化の向上に寄与して行きたい。

という趣旨であった。この件は理事会の議決を経て申請され、翌四十八年一月二十六日付を以て認可の通知があった。それには第二グランドの整備を急ぎ、教育に支障のないようせられたいとの注文がついていた。第二グラウンド即ち大倉グラウンドについては、前述のとおりすでに整備の手順がきまっていた時であるから、専攻科は予定通り昭和四十八年度から設置された。定員は十名、入学資格は大学卒業者又はこれと同等以上の学力ある者で、一年以上、二年以下の在学となっている。

専攻科の教員組織については、社会福祉学科の教授陣がすでに充実しているので、新しくこれに加えることはしなかった。

ここで特記したいことは、第一回専攻科学生による『東北社会福祉年表』の作製である。これは研究課題として取上げられた「社会福祉文献研究」のための資料として、また背景としての必要から生れたものであった。結果的には、各県の福祉関係の資料不足、時間不足等から、未だ不備の点もあるとのことであるが、とに角このような研究上必要な、しかも目立たぬ地味なものに、情熱を注ぐことは、いかにも若い学徒らしい姿であるといえよう。若し不十分な点があれば、今後更に継続して完璧なものに近づければよい。そして実際にそ

うした努力が続けられていることを附記したい。

第二　社会教育学科定員増

前記の同じ教授会で社会教育学科の定員増も決議された。学長の説明を紹介しておこう。

社会教育は特に昨年の中教審答申以来、生涯教育の重要な一環として、ますます重要視されている。殊に最近政府の社会教育に対する拡充強化の方針の中に、市町村には必ず社会教育主事を置くよう強く指導し、その財政的措置に言及している。本学は昨年度より全国最初の社会教育学科を設置したのは、先見の明があったと自負しているが、定員は僅かに五十名に過ぎない。この際定員を百名に倍増して、多数の社会教育従事者を世に送り、社会の要請にこたえたい

と。定員変更の届出は、社会福祉学専攻科のそれと同日に認可を受けた。これによって東北福祉大学の入学定員は、昭和四十八年度より二百五十名、総定員は一千名となった。

第五節　研究棟工事その他

第一　研究棟工事

福祉心理学科（次節参照）の認可と共に、研究室の整備計画が昭和四十八年度末から実行に移されることとなった。すでにこの頃栴檀学園高等学校は生徒募集を停止し、残るのは新三年生のみであったから、これを講堂一階に移し、これまで高校の使用していた校舎の一階及び二階の部分十二教室を改造し、主としてこれを教員研究室に充てることになった。その後、昭和五十一年度から一階に教務部が移転したので、現在は（一階）教務部事務局、会議室、兼任教員控室、書庫、理科研究室、（二階）会議室、演習室三、このほか一、二階合せて十一の教員研究室をつくり

要望されていた研究室の整備もこれで一息つくこととなった。

第二　附属幼稚園の独立

東北福祉大学附属幼稚園は、昭和二十八年四月双葉幼稚園として創立され、園舎ははじめ高校校舎の一部を使った。位置は大学院棟（旧図書館）の附近であった。双葉幼稚園はその後大学附属となったものの、施設設備の不十分なためか、園児数も年々減少して、発足当初の半数に過ぎない有様となった。そこで幼稚園舎の新築移転がきまり、昭和四十一年七月、その起工式が行なわれた。新園舎は大学構内の東北隅に地をトし、三教室のほか遊戯室も設けられ、園庭も遊具も次々に備え付けられ旧園舎のそれにくらべて、全く面目一新というべきものになった。四十四年度からは制度を旧に戻し、大久保学園長が園長の職を兼ねた。四十七年二月には増築を行ない、園庭とこれまでの園舎の間に三つの保育室を設けた。園児も昭和四十八年度に二百名に達し、独立採算の見通しが立ったので、四十八年十一月の理事会で、同幼稚園を新たに学校法人福聚幼稚園として別法人に改組し、園舎等を無償贈与することを決議した。従来大学には保母課程はあっても、幼稚園をその実習施設として利用することは殆んど無かったので、この面で影響を受けることなく、これによって却て大学経営に専念できることとなった。独立後の福聚幼稚

研　究　棟

園は園児数もふえ、順調な経営を続けている。

第三　栴檀学園高等学校廃止

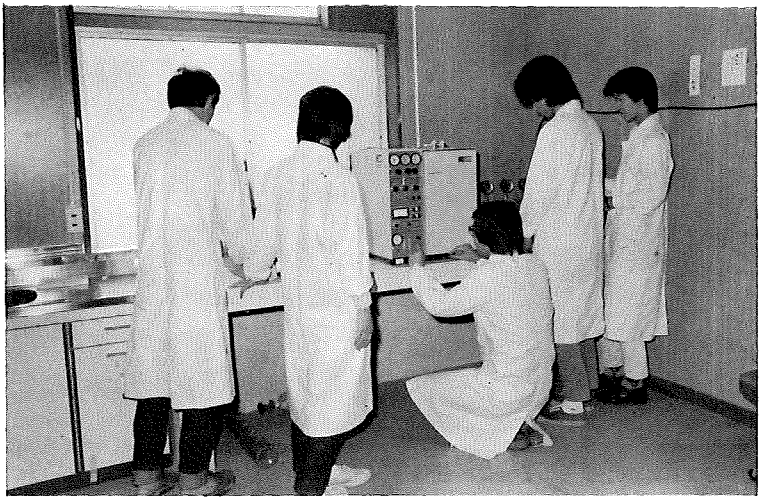
筆のついでに、ここで栴檀学園高等学校廃止について触れておこう。既に序章で記したように、第二中学校以来の伝統を担って今日に至ったのが、栴檀学園高等学校である。そして、それを母体として生れたのが、東北福祉大学であった。この時、同校は大学附属高校となったのであるが、大久保学長着任後、高校はその歴史に鑑み、本来仏教精神によって立つべきであるとして、附属をやめ栴檀学園高等学校の旧称に戻した。

然るに昭和四十三年以後大学は急速に膨脹し、限られた同じ敷地内に高校と共存することに大きな困難を感ずるに至った。一方高校は次第に生徒数を減じ、毎年の赤字財政に悩み、さればといって適当な土地を物色して移転することもかなわず、遂に四十九年度限りこれを廃止することに決定を見た。

第二中学林創立以来七十四年、明治八年の専門学支校から数えれば、正に百年の歴史を誇る栴檀高校は人々に惜しまれながら、遂にその姿を消すこととなった。しかしながら高校を基盤として、東北福祉大学の誕生したことは、結局は発展的解消と称してよく、仏祖の精神は栴檀学園の魂として、今なお脉々と生き続けているといってよいのである。

第四　講堂棟の改造転用

産業福祉学科には、この学科らしい特別の資格が附与せられることがなかった。これは遺憾なこととして同学科で研究の結果、国家試験として「衛生管理者」が浮び上った。労働者五〇名以上を使用する企業は必ず衛生管理者を置かなければならない。この管理者に対する国家試験は、若し大学のカリキュラムに条件をみたす学科目が揃っていれば、試験を免除して卒業と同時に、その資格を与えることが出来るという法律がある。そこでそれに準じて学科目に



産業福祉学科実験室

改正を施し、労働省に申請の結果、昭和五十年三月になって、本学産業福祉学科に限り許可する旨の通知があった。

しかしこれには、それに見合った施設設備が必要である。たまたま昭和五十年三月を以て、既述の如く栃檀学園高等学校が廃止されたので、その校舎たる講堂棟一階を改造して、ここにその設備を急ぐこととなった。第一実験室のほか、衛生化学研究室、原子吸光分光分析室、その他四つの研究室が設けられ、将来大気、水質、土壌、食物等の分野で、それぞれ興味ある研究が行なわれることが予想される。

続いて昭和五十二年度に入り、講堂棟二階すなわち旧講堂全体を、化学実験室に改造する工事が行なわれ、この校舎は化学実験室棟ともいうべき特色あるものに一変した。これらは本学の施設設備の発展変貌を物語るエピソードとして特記するに値いしよう。

第六節　福祉心理学科増設

昭和四十七年九月専攻科新設の認可申請書が提出された時、将来の計画として心理学科設置のことがあげられ、その準備は着々進められつつあった。

心理学科の必要性については今更喋々することを要しないが、わが国の社会福祉の対象が、国民の一部から全国民的規模に拡大され、しかもその個人個人の実情に即した細かい配慮を求められる段階に来ている。従って、今や福祉のあり方は、個人個人の生活の実態、発達段階、社会的環境等によって、異なった対応の仕方が要請されている。かく考えるとき、福祉における心理学の活動分野は広汎多様であり、且つ一般心理学とは異る実際的な特殊な領域を持つものと言えよう。このようなことから見ても、それは本学内に設置されている社会福祉、産業福祉、社会教育の三学科と密接な関係に立っていることが分るのである。しかも諸種の臨床現場においては、たとえば「医療」の場合をとって見ても、ケースワーカーと医師と心理技術者とのチームワークがよくとれている時、最も大きい効果をあげることはいうまでもない。而してその心理技術者の養成には、心理学の基礎的な科目はもちろん、実験実習的あるいは臨床的、応用的な科目にいたる体系的な教育が求められる。従っていわゆる心理学研究というよりも、社会的存在としての人間の理解を基礎とした独立の学科が必要になって来るのである。

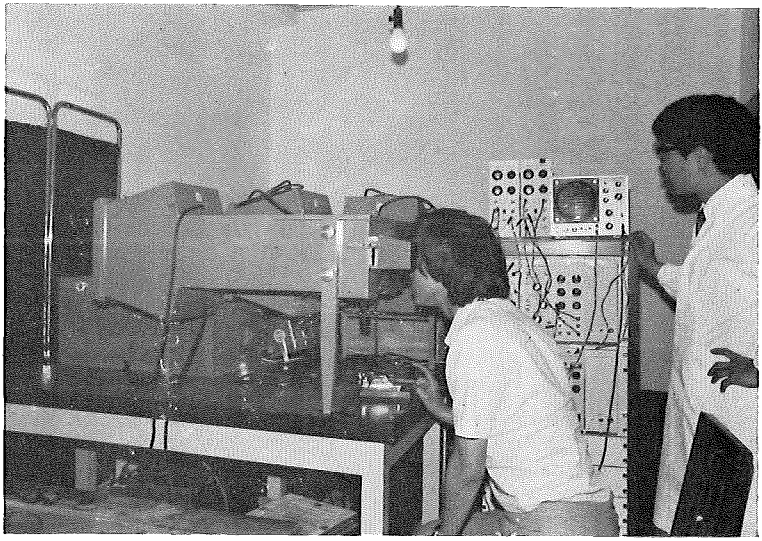
ただその名称については、準備委員会は本学に設置される心理学科のユニークな性格を明確にするためにも、「生活心理学科」と名づけることを適当なりとし、教授会も一応はこれを承認したのであった。しかし、この分野は未だ学問的には確立されていない憾みがあったし、且つ社会福祉という限定された学部の中におくには、その領域は広すぎる嫌いはあった。よって、更に検討の結果「福祉心理学科」なる名称は、すでに米国の大学でも先例があり、無難であるということになった。文部省もこの案には賛成だったので、十一月の理事会で名称を可決して申請、昭和四十

九年一月二十三日付で文部省の認可が下りた。開設は昭和四十九年度から、入学定員五十名、総定員二百名。第一年次から始めることになった。

福祉心理学科の必修科目は福祉心理学総論、社会心理学、臨床心理学、人格心理学、差異心理学、精神医学等で、かなり広範囲にわたっているが、これを通観すれば、心理諸機能の基礎的実験、臨床心理学などの知識技能等々を、具体的、個別的な人間にどのように綜合的に活用する能力を養うか、ということに重点が置かれているということになる。

現在、東北・北海道全域で、心理学の専攻学生を養成している大学は、東北大学、北海道大学等二三の国立大学に過ぎず、私立としては本学が初めてであるばかりでなく、「福祉心理学科」の名称をもつ心理学科は、全国でもその例がなく、しかも本学の他大学と異る点は、既設学科との連けいを保つことにより、現場において昨今特に要求されている、社会福祉学専攻者と心理学専攻者とのチームワークを実際に訓練できることである。

心理学科はいわゆる実験学科で、その施設設備の基準はかなり厳しいものであるが、これらの諸条件に応ずる整備計画は予定通りの進行を見せ、実験室の中でも防音室の如きは、他に誇りうる施設といえよう。また講義担当の諸教



心理学実験室

授も学界知名の士を招き、更に新進気鋭の研究者を加え、教師陣は盤石の陣容となった。

第七節　講堂兼体育館（福聚殿）成る

第一　建設の準備

既に述べたように、学園整備計画の中において、第二校舎（二号館）の次は講堂兼体育館の工事が予定されていた。昭和四十七年九月の社会教育学科増員届出の中にも、将来の計画として心理学科の増設と共に、体育館及び食堂等の厚生施設の建設があげられている。その第二校舎は四十八年四月に落成し、福祉心理学科は四十九年度の開設を目ざしてその準備は着々進みつつあった。残る講堂兼体育館建設の事業も、第二校舎の落成に続いて、その工事を進めねばならぬ。そのための予備的な検討も何回かに分けて行なわれていた。

従来の体育館は狭隘で設備もおくれ、発展を続ける本学園の体育館としては、も早や十分でなくなって来ている。講堂も亦小規模に過ぎて、学園の実状に副わなくなって来ていることは明白だ。しかも、昭和四十九年は本学園創立以来百年に達し、その上本学が短期大学開学以来十五年の記念すべき祝賀の年に当っている。その記念事業という意味からも、画期的大殿堂を打ち建てたいというのが、大久保学長の念願であった。そしてこの念願実現のため、宗務庁その他関係各方面への連絡交渉も滞りなく進み、いよいよこの計画が具体化するに至ったことは、学園の将来を卜するに足る象徴的な意味を有するものであった。

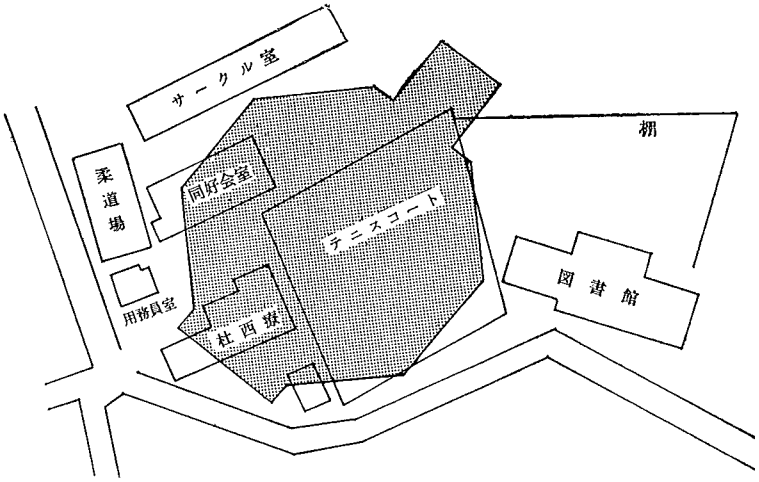
教授会では早速この建築に関する具体的調査を行なうため、施設整備研究委員会をおくこととなり、大久保学長より遠藤英夫教授を主任として五人の委員が委嘱された。これより後委員会はたびたび協議を重ね、東京その他の地方に出張して、講堂・体育館はもとより、食堂・売店・学生控室などの厚生施設を調査研究し、参考資料を収集するな

どの活動を行ない、一方教授会の意見を聴き、あるいは学生側の要求のうち採るべきものを検討して、これを教授会に諮る等の内部調整を経て、教授会に成案を報告。教授会において最後の検討を加えて大久保学長に答申した。

右の計画を要約すれば、先づ基本構想として、㈠本学将来の発展を見込み、諸行事集会に必要な諸条件をみたし、且つ宗立大学の特色を持たせること。㈡体育館としてはその機能を十分発揮できるよう、設備を完全にし、他大学のそれに劣らないようにすること、の二点があげられた。そしてこれに対応する計画として、その規模については、一辺の長さ約二十メートルの正八角形とし、宗立の特色を持たせるという点に対しては、講堂正面のステージにはいわゆる一仏両祖の尊像を安置する須弥壇を設けることにした。

次にこの建物に要する敷地の面積は二千平方メートルの広大なものとなるので、一体どこに建てるべきかが大きな問題となった。しかし、現在のキャンパス内では、図書館の西側に選定する以外になく、先に立案された学園整備計画をご破算にして、次の図で示す位置に建設することと決定された。このためテニスコート、大学同好会部室、杜西寮の三者をどのように措置すべきかが先決問題となり、次の対策が立てられることとなった。

旧キャンパス内における講堂兼体育館の位置



福聚殿位置図（改正計画図）

一、テニスコートは第二校舎（二号館）工事の終了をまって、新校舎の西南に新コート二面を新設し、庭球部の練習及び体育の授業に支障を来さぬようにすること。

二、同好会部室の建物は解体することとし、その代り柔道場を十個の部屋に仕切り、ここに移転してサークル活動が続けられるようにすること。

三、杜西寮（女子寮）は他に適当な地を物色し、解体移転すること。但し、四月にはこれを解体して夏までに完成し、九月から寮生が新築の寮に入られるようにすること。

右のうち特に杜西寮については、寮生の生活に密接な関係があるため、再建入寮までの生活については、種々の便宜を取計らう等、間然するところなき措置をとった。新杜西寮は向山大満寺の寺地内に九月竣工、寮監を置かず大満寺に管理を一任することになった。環境もよく通学も便利である。

第二　建設の規模

講堂兼体育館の工事費は莫大の額に上った。昭和四十七年十一月の理事会では、一階部分が一、七五〇㎡、二階が二、二五〇㎡、計四、〇〇〇㎡、これに対する予算は工事費二億円、設備費五千万円、とりあえず合計二億五千万円と報告されている。そのうち私学振興財団から一八、七五〇万円、残りは自己資金である。しかし、工事中の諸資材の値上りから、四十八年十一月の理事会では、振興財団からの借入額を二一、四九〇万円とし、続いて四十九年二月のそれでは、更に借入額を三千万円増額せざるを得なくなった。

工事費はこのようにかなりの増額となったが、この間の工事の模様を記せば、先づ建築敷地の準備が六月中に出来たので、あとは着工するばかりとなった。設計は目黒設計事務所に依頼し、工事は戸田建設株式会社との契約であっ

た。七月七日地鎮祭の法要を仏式で営み、八月一日からブルドーザが動き出したが、地盤の一部に軟弱なところが発見され、基礎補強の設計替えもあった。十月に入って土間打ち工事が始まり、上棟式は四十九年三月十日、やがて屋根工事も始まり、頂上の巨大な擬宝珠の金色に光る大殿堂が、日一日と完成してゆく姿を、学園一同毎日のように仰ぎ眺めた。遂に七月中旬に完成、八月に入って引渡しを受けた。着工以来満一ヶ年を要した。建築許可書に依れば、総面積四、五三〇㎡余（一、三七三坪）、工費総額は三億三千六百七十万円であった。

大久保学長は講堂正面に自筆の大額面を掲げ、墨痕鮮やかに「福聚殿」と命名した。「福聚」とは観音経の「福聚海無量」からとったもので、その根拠を最も庶民に親しい慈悲救済の観音菩薩に求めたことは、この大殿堂に対するふさわしい命名であり、また福祉学を専攻する本学にとっても、学園の性格を顕揚し、且つその将来を祝福するものでもあった。

次に福聚殿の各階の施設設備を見れば左の通りである。

（一階）

1、食堂（一部喫茶室）調理室、倉庫

福聚殿外観

2、大会議室、中会議室
3、図工教室、音楽教室（防音装置完備）、ピアノ練習室五、教員研究室等二
4、王三昧堂（参禅室、日本間）
5、売店
6、学生談話室
7、その他管理人室、倉庫、ボイラー室（全館暖房用）等

（二階）

1、正面ステージ（ステージの奥に須弥壇に一仏両祖の尊像を安置する。須弥壇の両側に控室あり）
2、フロア（約一、一四〇㎡、ここにバスケットコート二面、バレーコート二面、バドミントンコート六面ができる。
3、ロッカー室、シャワー室（男女各別）トレーニング室
4、教官室、会議室、器具室、器具器材収納庫二

（三階）

1、玄関ホール階上を中心とする部分に、栴檀学園高校記念室、理事室、評議員室
2、その他の二階フロアを除く、各室の階上に観覧席を設く。
3、放送室

第八節　真魂を入れん

第一　真魂をここに

大久保学長には栴檀学園経営についての、一つの根本的な念願があった。

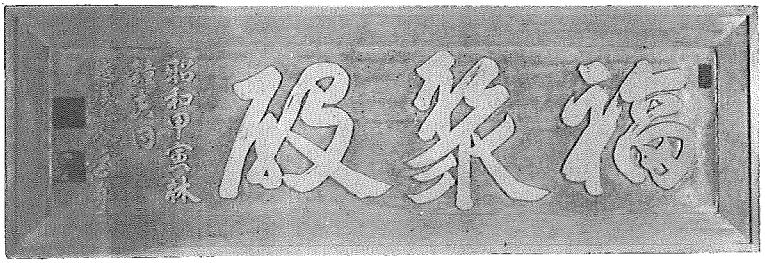
それは、昭和四十三年三月本学に着任したとき、仙台ホテルでの歓迎会の席上「私が本学に赴任した使命は、本学に真の魂を入れるにあります」と挨拶したことでも分る。宗立大学の真の面目はどこにあるのか。本来の面目をただすためには何を為すべきか。これが大久保学長の脳裡を去来して離れぬ一つの公案ともいうべきものであった。

附属高等学校を分離して、栴檀学園高等学校の昔にかえしたのもここから出た。着任すると共に、第一に禅堂（法堂）の改修を施したのもそうであった。仏教専修科の修行をやかましく実施したのも、皆ここに基づいている。しかし、大学は必ずしも、仏教精神の真骨頂を取入れるまでに至っていない。大学にも仏教専修科を置いた。仏教福祉研究所も設けた。それでもまだ十分とはいえなかった。

たまたまこの講堂兼体育館を建設するに当り、ふと気付いたことは、ここに仏像を奉安することこそ、真の魂を入れることではないかと。もともと講堂兼体育館の八角の殿堂設計も、八葉の蓮瓣にかたどった法隆寺夢殿を模したものであり、聖徳太子の「敬田院」に福祉精神の根本的な観念を酌みとる、大久保学長の不動の信念に基づくものであった。その八角の殿堂に一仏両祖像を安置して、真の魂を植えつけようというのである。

さて、一仏両祖像については多少の説明が必要かも知れない。そもそも一仏両祖とは何を指すのであろうか。

先づ一仏とは仏教の開祖インドの釈迦牟尼仏即ち釈尊であり、次に両祖とは、今より約八百年前、中国に渡り天童山如浄禅師より曹洞宗を伝え、福井県永平寺を開いた高祖道元禅師と、道元禅師より四代、能登の総持寺を開いて本宗発展の基を築いた太祖瑩山禅師の二人を指し、一仏両祖それぞれにわが宗門において、信仰の源泉として仰がれて



学長筆大扁額

いることは今更申すまでもない。

第二　一仏両祖尊像奉安

仏像の作者は、日展審査員難波孫次郎氏ときまった。難波氏は深く仏教を信仰し、現在仏像彫刻における一流の大家であり、学長の旧知の人でもあった。氏は学長の依頼を快よく引受けられたのみならず、天の与えか、樹齢六百年の木曽檜の良材を手許に保有していたのであった。

釈尊像は高さ四尺五寸の坐像（立像換算九尺）、道元禅師、瑩山禅師両祖像は等身大である。彫像は順調に進み、四十九年七月に完了、同二十四日には作者難波氏自ら付添って本学に到着、折から竣工したばかりの福聚殿正面ステージの須弥壇に奉安された。釈尊像は印度ガンダーラ風の、日本では稀な特色ある尊像であり、また両祖像のうち道元禅師像は昭和四十八年の日展に出品されたものであり、三体とも難波氏の非常な力作であった。

難波氏の言葉として次のように伝える。「すぐれた仏像は姿、形と同時にその心が表現されねばならない。その表面の姿、形のみでは真の価値ということは出来ない。如何にして仏像の中に、無差別広大無辺の慈悲の心を表現できるか、この目に見えないものを如何にして内在せしめるか。そこに技法を超えたほんとうの意義も価値もあると思います。」

いま須弥壇に安置された一仏両祖像を拝するとき、そこに一種敬虔な雰囲気を醸し

出し、本学教育の根本精神が、ここから湧き立ち、縦横に法の力を発揮する日の来ることが想い見られるのであった。

仏像安置のための費用は一切公費に頼らず、勧募の浄財を以てこれにあてることとなった。このため、東北・北海道その他大学に関係の有無を問わず、出来るだけ多くの人々に仏縁を結んで頂くため、熱心な勧募が続けられた。幸いにして両本山貫主猊下、大久保学長の大口寄附のほか、学園内外、管内宗門寺院等より、多数の人々が、次々と浄財を寄せられ、学園をして感激せしめる勧募状況となった。寄附者の尊名は芳名簿を作製し、永久にこれを保存すべく、三尊仏台座の中に奥深く秘蔵されている。

第九節　福聚殿落慶式

第一　落慶式次第

昭和四十九年十月三日午前十時より、福聚殿（講堂兼体育館）の落慶式並びに一仏両祖尊像奉安開眼式が曹洞宗管長岩本勝俊禅師を特請して厳粛にとり行なわれた。たまたまこの年は本学園が明治八年宮城県専門学支校として創立されてから丁度一百年、いわゆる創立百周年のめでたい年にも相当するのであった。

当日はこの式典にふさわしい爽やかな秋晴れとなり、午前九時すぎより、参列の来賓学生ら踵を接して入場し、収容力二千七百名の大フロアも埋まるばかりであった。岩本管長猊下、山田宗務総長ほか宗務庁各部長、東北各県宗務所長、藤田駒沢大学副学長、高柳東北薬科大学長ほか県内大学代表、県内高等学校長等、その他の来賓、岡田巳成理事長ほか理事評議員、大久保学長ほか学内教職員も加わって、綺羅星の如く整然と着座する。

やがて正面ステージの扉が開かれるや、朱色の須弥壇上、黒色の布帛を背景に一仏両祖像が燦然とあらわれ、これを仰ぐ一同アッという讃歎の声のほか、ただただ息をのんで、眼前の敬虔崇高の世界に引入れられるばかりであった。

この時右手より学内外の法衣の人々仏前に進み所定の位置につく。続いて導師岩本管長猊下、従僧にまもられて出御、これより読経の声も厳かに開眼式の親修型の如く行なわれて、慶香のかおり堂内に満ち、甘露の法雨やわらかに降りそそぐかのようであった。かくて一仏両祖像ここに開眼し、これより法の恵みを発現し、永く本学を護り給うことになったのであった。

開眼式のあと須弥壇を閉じ、ステージを整えていよいよ落慶式に入った。

先づ管長猊下より次のような挨拶があった。その要旨を述べれば、

東北福祉大学がかねての懸案であった大講堂福聚殿が立派に完成し、ここに一仏両祖像を安置して、このような盛大な落慶式を行なうことが出来ましたのは、大久保学長はじめ皆さんの道念の致したところであります。またこの講堂、仏像の作者の方々も合せて、それぞれお釈迦様の仏心を、達摩大師の禅心を、社会福祉の方面で多ぜいの方々に法雨を降らすことに力を入れられたわけで、本当に尊いことであります。

今や日本は福祉国家を唱え、世界平和のため、人類福祉のために全力を尽している。その中で卒先して東北福祉大学を建設し、多数の学徒を輩出して、不動の精神を養われることは本当に尊いことです。世界は平和を夢見つつ一方で戦争に追われている現在でありますが、どうか皆さんはこの立派な講堂を活用されまして、本大学の使命を十分発揮できるようお願いするものであります。

第二　福聚殿とは

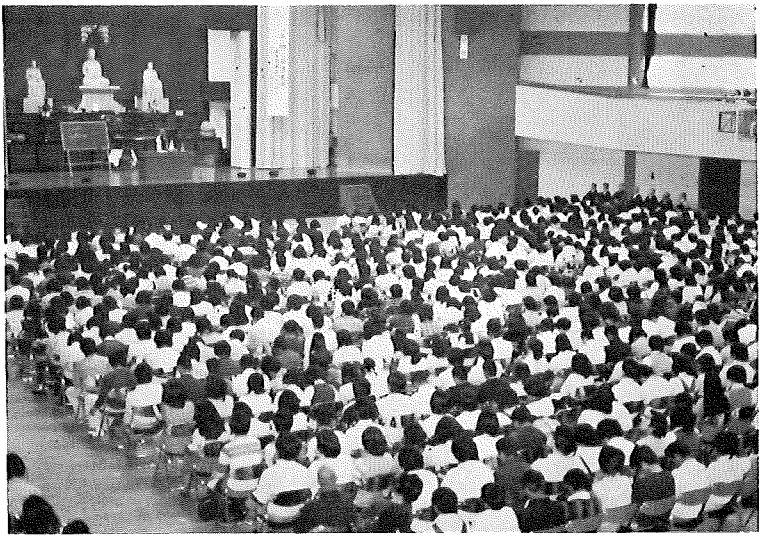
次で大久保学長は落慶式の式辞を述べて、その中で㈠なぜ八角のドームにしたか。㈡福聚殿と命名したのはなぜか㈢一仏両祖像を安置した理由は何かとの三点を明らかにしている。これは既述の文とやや重複するきらいはあるが、大切なことなので、その要点にふれたい。

第一の点は、聖徳太子の夢殿を再現したい気持に外ならぬ。特に太子が四箇院を設けられて、日本最初の社会福祉を実施された際、敬田院を設けて心の糧を与え精神修養の場とされたことは、われわれの深く尊敬申上げるところである。福聚殿は正にこの敬田院にあやかりたいのである。

第二に福聚という名称は、観音経の中の福聚海無量からとった。菩薩の中でも観音菩薩は慈悲の権化と思慕されている。講堂兼体育館と呼ぶのが長過ぎるばかりでなく、やはり福祉精神のこもった殿堂という意味を持たせたかったわけである。

最後に一仏両祖像を奉安したのは、福聚殿の名称のよって来るところは分って貰えても、ほんとうにその精神の拠り所となるものがなければならぬと思う。真実の魂を入れることが必要である。これらの点をよく理解して、社会福祉における宗教的なものの重要さを認識していきたいものである。その基盤をつくるのが、即ちこの福聚殿であると考える。と力をこめてこの福聚殿の由って来るところを説き、感銘深い式辞であった。

大久保学長のあと、岡田巳成理事長の工事報告を兼ねた挨拶があり、続いて山田義道宗務総長、宗立学校代表とし



福　聚　殿　内　部

て藤田俊訓駒沢大学副学長、日本私立大学協会東北支部長高柳東北薬科大学長から、それぞれ心のこもった祝辞が述べられた。

このあと余興の舞踊等が披露されて、観客の目を楽しませ、終って一階の大食堂を会場として賑やかな祝宴に移り一同学園の将来をことほぎつつ、楽しい雰囲気にひたったのであった。

落慶式の記念講演会は落慶式の数日後、東北大学学長加藤陸奥雄博士を迎えて「自然の摂理」と題し、本学の教員学生多数熱心に聴講した。講演の要旨は地球上の生物は、すべて食うものと食われるものとの生態学でいう食物連鎖(Food chain)の条件におかれているが、人間のみひとりこの条件に従いつつも、他面文化をつくる力を与えられている。しかし、この文化も度を越して、自然の摂理に反することになれば、いわゆる公害をひき起して、自らの生命をも危険に陥し入れることになる。文化を進めるに当っては、常に自然を守ることを忘れてはならないと。自然破壊は最近いたる所に見られる現象なので、聴衆を深く頷かせたのであった。

こうして画期的大殿堂、福聚殿の落慶式、学園創立百年の記念式典は、目出たく全日程を滞りなく終了したのであった。

第十節　栴檀学園壱百年史の刊行

栴檀学園史が通史的なものとして刊行されたことは、これまで全くなかった。只『沿革略誌』という和紙墨書の小冊があって、前後十七枚にわたって、明治三十五年から昭和三十二年まで、約五十五年間の歴史を書いたものがあるが、その書き方は体裁も不同であり、欠けている年も多い。この『略誌』には、昭和十九年に本学園の前身たる専門学支校が創立されたと記され、それがそのまま信ぜられて来たのであるが、一方昭和三十一年十一月朽木学園長時代

に八十周年記念式典をやっており、これと前後矛盾するけれども、八十周年の根拠については何の説明もなかった。その上、昭和四十九年度を以って、栴檀学園高校の廃止が決定されていた時でもあるので、この機会に学園史を明確にしておくべきであるとの判断から、昭和四十七年末、大久保学長は、当時高校の山本林教頭に学園史編集のことを委嘱した。

爾来同氏が専ら編集の任に当り、苦心して散逸した資料の収集につとめ、A5版五百余頁の学園史をまとめ、福聚殿落成式典にようやく間に合うことが出来た。全般を通じ東北において、私学の経営が如何に困難であったかが知られ、それにも拘らず本学園の精神が不動に堅持されて来たことなど、感ぜしめられる点が少くない。特に研究の結果本学園の発祥たる専門学支校の創立が宗務院の普達どおり、明治八年であったことが分り、この年すなわち昭和四十九年が、同時に創立百周年を兼ねることが確定されたことは、大きな収穫であった。

大久保学長は書名を定め、題字を自ら流麗にしたため、且つ全巻に目を通して親しく指導を加え、この学園史の生みの親、名づけの親と育ての親を兼ねた。

第十一節　学生生活

大学は学問研究を主眼とする場であるが、同時に人間形成の場でもある。大学に入って、或いは教師の人格に触れ或いは交友による相互の接触等、人間的交流の機会は少くない筈である。それはもちろん個人的な友情によって得られる場合も多いが、大学はやはり学生にとって一つの社会的生活であるから、ここから生れる成果を出来るだけ酌みとり、知らず知らずの間に人間的成長をはかり、自己の人格形成に志ざすことは、望ましき生活態度ということが出来よう。そういう意味合いにおいては、サークル活動による相互の切磋琢磨は、深く大きな意義を有するものというべきである。

(一) 体育系サークル

本学のサークル活動は、これを大別すれば体育系と文化系に分けられる。体育系には、硬式野球部、軟式庭球部、バレーボール部、バスケット部、卓球部、柔道部、剣道部、空手部、バドミントン部のほか、スキー同好会等四つの同好会があり、かなりの数に上っている。このうちバレーボール部の如きは東北大会で優勝し、全国大会に出場する等の業績を有し、他の部もそれぞれ好成績をあげている。特に女子剣道部が、しばしば優勝の栄冠を得ているのは、素質に恵まれているのか、平素の努力精進が頼母しい。

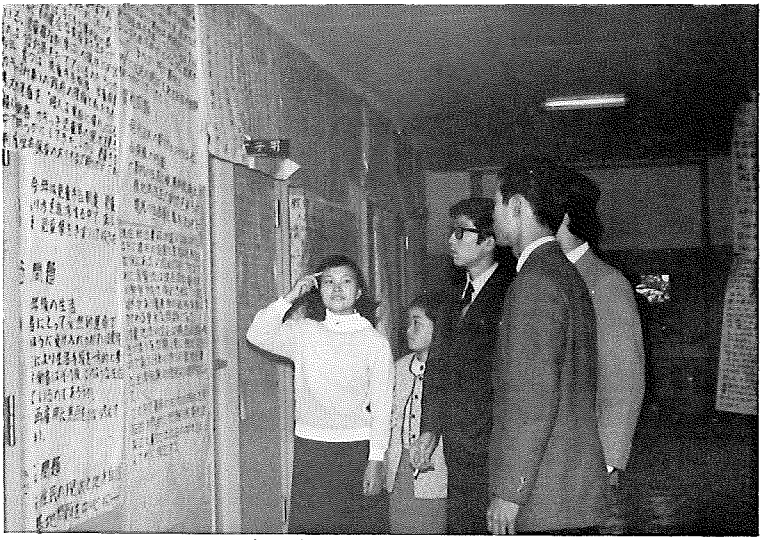
(二) 文化系サークル

次に文化系サークル活動は、これこそ各方面にわたり、軽音楽キャノンブラザーズを始め、美術、生花、茶、写真人形劇等から非行問題研究会、盲人福祉研究会等の福祉関係に至るまで、正に百花繚乱の感があるが、どのような活動をしているか、運動部ほどはっきりつかめていない。中に特色のあるものを一、二あげれば、人間の幸福を求め奉仕実践活動を通じて福祉の原点をつかもうとしている奉仕会「いのちの木」、それから布施持戒以下六波羅密の実践を重んじ、人類の幸福と永久平和確立を目ざし、参禅の指導に挺身する「仏教青年会」（だるま会）の如きは、その最も特異なものであろう。これら運動及び文化のサークル活動が、ますますその純度を高め、且つこれに参加する学生に貴重な収穫をもたらすことを祈るものである。

第十二節　大学祭と旋設児童球技大会

第一　大学祭

大学祭は従来から毎年学生会の主催で行なわれている。本来大学祭とは、大学の日常行なっている学術研究は元よ



大学祭展示風景

り、大学の教育内容について一般に周知させることが目的である。いわば平素はのぞくことも難かしい大学の内容を広く公開して、大学に対する認識を深めて貰う、そういう目的をもっている行事であるといってよい。しかし、この目的にそうためには、研究物の展示にしても人の目を楽しませながら理解させる方法、或いは種々の催し物によって、多くの見学者を誘引する等の研究が必要であり、そこに創意工夫の楽しさもあり、やはり学生生活には欠かせない行事であるには相違ない。

本学の場合、たとえば仮装行列、前夜祭、ソーシャルダンス等の景物を添えて、学生の関心を求めるリクリエーションも加えられ、記念講演、福祉問題に関するパネルデスカッション、映画会、文化祭典（一種の学芸会）等の企画も順次くりひろげられ、その間、期間中を通じて開かれる各サークルの展示場には、それぞれの調査研究に基づく資料を掲げ、係の学生が熱心に説明に当っている。このほか学生の開いている模擬店のほほえましさ、近来は文化祭典での奇術の発表或いは「点字技術講習会」等新味を加えて、堅実に成長していることは喜ばしい。只学生の関心がいまひとつ盛り上らぬ憾みがある。全学生の参加する学術的で健全な楽しい大学祭となるよう一層の努力を望む次第である。

第二　施設児童球技大会

大学祭のすべての企画について述べるいとまはないが、それと併行して行なわれる施設児童球技大会は、いかにも本学らしい特色を持つ行事と思われる。

施設児童球技大会は昭和三十四年、本学園に東北福祉短大が出来た翌年から始められ、昭和五十一年までで既に十八回を重ねている。それはいうまでもなく福祉学を専攻する者として、施設児童について理解を深め、人間的な親しみを以てこれに接したいという目的のほかに、施設児童相互間の交流もはかり得る企画として、児童福祉研究部の始めたものであった。こうした趣旨は、各施設にとっても望ましい機会として喜ばれ、参加の数も多く、時には県外からの参加もある程であった。

昭和四十四年八月の教授会で、大学祭について審議のさい、これはやはり学生の自発的行事であり、且つ相当規模に達しているので、今後大学祭の一環として開催することが適当とされ、四十七年度から始めて学生会の主催として実行委員会の手に移った。

施設児童球技大会の模様を簡単に紹介すれば、たとえば昭和五十一年十月三十一日開催の第十八回大会の例をとってみよう。

当日は肌寒い日にもかかわらず、参加施設は十七、施設児童数四百余名、本学学生の数は三百余名に上った。野球ソフトボール、卓球、バドミントンの各種目にわたり、熱戦が展開され、その中で学生と児童たちとの暖かい心の交流、また施設児童相互間の交歓も深められて、盛会裡にその幕を閉じ、そして競技終了後、各種目ごとの優勝者、その他の表彰が行なわれ、参加者一同来年を約して散会したのであった。

施設児童球技大会は、今後も永く続けられ、一層その成果をあげることが期待されている。

第五章　躍進の時代

第一節　第三校舎建設など

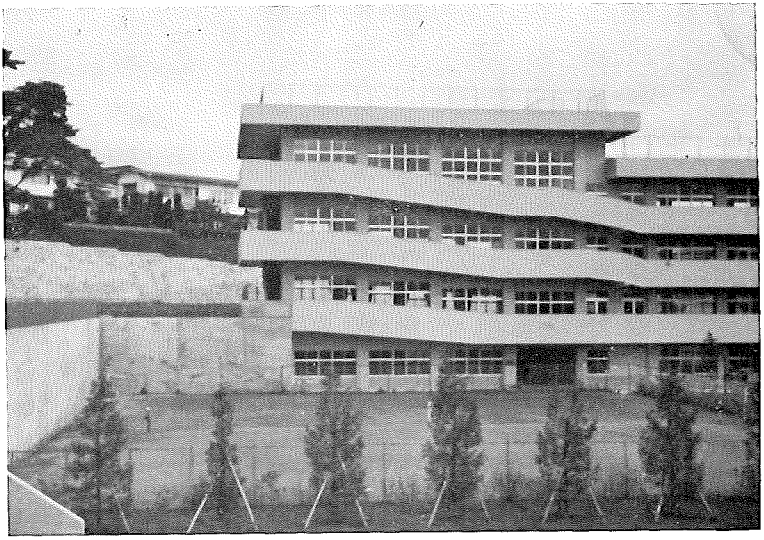
第一　第三校舎の建設

本学における各教室は、第二校舎及び福聚殿のそれを加えて、大体において学生三、〇〇〇名収容を目標として建設されたものであった。しかし、学生数の増加は年毎に顕著で、昭和四十九年ではこの目標に近づき、五十年度は遂にこれを抜いて三、一〇〇名に達し、このままでは全員を収容するには不足を生ずることは明らかであった。しかも五十一年度以降もこの趨勢が続くものと見れば、当然新しい建設計画を必要とする。このため五十年十一月の理事会において、校舎増築に関し次のような取りきめを行なった。この案は学生四、〇〇〇名以上収容を目安として、更に一、二〇〇名収容可能の校舎を増築するものであった。

先づ建築場所は第二校舎（二号館）西側に接続して、いわば同校舎の増築といった形で、鉄筋コンクリート四階建て、延面積一三、七五五m^2。五十一年三月に着工、九月に竣工して第二学期より使用することになった。

一階にはボイラー室を備え、全校舎温水暖房方式をとっている。ホール部分に階段をつけ、中央にピロティ、中教室（二五〇収容）一室を設ける。次に二階乃至四階は大教室（三三〇名収容）とし、各階ともホール及びベランダから出入できる。外観は第二校舎の延長と見てよく瀟洒な建造物であることに変りはない。

第三校舎の建築により、学生収容力は大巾に増加し、文部省の基準から見て、綽々たる余裕を持つこととなった。



第　三　校　舎　（三号館）

第二　構内の美化など

こうして構内に近代的な建築物の立ちならぶ間にあって、一号館前の広場から、福聚殿に至る通路を中心として、これに連らなる通路の両側は、庭園化の工程が進み、芝草の緑の中に、立ちならぶ樹々の数もふえ、季節季節の花々も、美しい装いをこらして見せてくれている。特に中心通路から、第二、第三校舎に至る通路の分れ道には、円形の一廓があり、低い緑の木々に囲まれて、青銅の福祉観音像が安置され、やさしい微笑みをたたえて見守って下さる。まことに和やかな雰囲気である。西の方福聚殿の北には、緑の木蔭に図書館の近代的な赤煉瓦の建物が望まれ、その間に三々五々学生の姿が散見する。

思えば構内の庭園化はよい案であった。そしてそれが順調に進捗し、学生の心に安らぎと慰めと、時には静思の場を与えてくれることを望んでやまない。

さて、この庭園化の始められたのは、福聚殿竣工の頃からであるが、これと前後して、先づ正門に守衛所が設けられて守衛が配置され、本学関係者以外の者は、先づ守衛所で受付け、その許可証によって出入することとなった。正門開閉の時刻も定められ、学生の自動車乗入れも禁止された。また構内西側福聚殿に近く、一時はブロック塀がまわされ

喜心寮職員住宅等との直接の交通が遮断されたこともあった。

これらの措置は実は、この前後両三年の間、全学連活動、民青系、革マル派、反帝学評等の過激な学生運動が相次ぎ、外部からの不法侵入者によって、情宣活動はもちろん、甚しきに至っては、いわゆる内ゲバのあおりを喰い、本学学生が傷害を受ける等の被害があったことに対するものであった。

されば これら一部不心得の学生によって、一般善良なる学生に与える迷惑を最少限に止めるためにも、守衛所の設置は当然必要であった。事実こののちは、その後の情勢の変化にもよるけれども構内の平静は保たれることになり、新図書館の建設工事と共に構内西側のブロック塀は徹去された。もっとも図書館の西、大学構内の西入口にも、正門と同じく守衛所が新設されて、構内の保安確保は一層効果的となり、差しあたっての心配は無くなったといってよい。

福聚殿への中央道路

第二節　新図書館造築

第一　新図書館建設の重要性

大学の図書館は普通には、附属図書館と呼ばれ、語感からいうと多少軽い響きを持つが、「図書館は大学の心臓」と称えられる如く、大学にとっては、最も重要不可欠な存在である。それは研究者に無限の糧を与え、無限の創造を可能ならしめる力、すなわち十分な施設と蔵書と資料とをそなえた権威あるものでなければならぬ。

本学の図書館も、はじめは栴檀学園高校、すなわち当時の附属高校のものを、そのまま用いていたから、狭隘で不便で、大学の図書館としては貧弱なものであった。これを改善するため、昭和三十六年七月に鉄筋コンクリートの書庫をつくり、その後しばらく間をおき、昭和四十二年八月木造の閲覧室を取り払って、新しく鉄筋コンクリートの閲覧室が竣工した。これで木造と鉄筋とのチグハグな感じがなくなり、一応大学の図書館らしい姿になった。

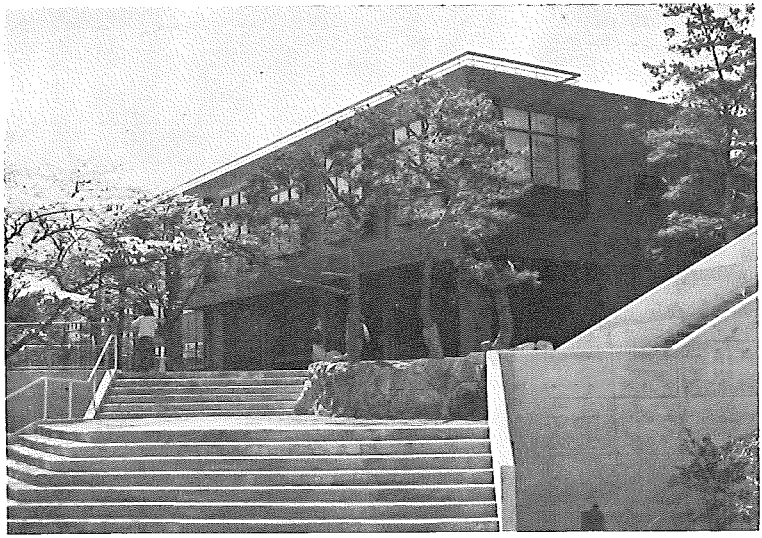
大久保学長時代になり、昭和四十五年に、入口の部分を改造して玄関の右に館長室、左に新聞閲覧室が加えられる。しかし、閲覧席は九〇に過ぎず、漸増する学生の数に応ずることは到底不可能となった。そこで昭和四十八年に至り、二階会議室を廃し、一階からラセン階段を新たに設けて、閲覧室を階上にまで拡張した。これで閲覧席は一四四席と五割以上にふえ、一応当座の急はしのげたが、今後も増加する傾向にある学生数と、収蔵力の限界に来ている書庫と、更にやがて設置されるであろう大学院等を考慮に入れるならば、やはり抜本的な対策が必要となる。こうして新たな図書館の建設は、本学にとって差し迫っての要請となって来た。

昭和四十九年十二月の理事会で、新図書館の建設について、大久保学長は次のように説明している。

現在使用している図書館は学生数五〇〇乃至六〇〇程度の時代に対応する規模にすぎない。然るに学生数は増加して閲覧室も狭くなったほか、図書の数もふえて、今後二年ぐらいで書庫に入り切れなくなる。これらの事を考

えてみると、大学の図書館としての機能を充分果たすためには、単に改造する程度では到底不十分である。この際思い切って、新しい相当規模の図書館を建設し、これに加えて一部既設建物（喜心寮）を改装して使用する計画である。是非実現したいと思う。

と決意のほどを述べ、大要次のような具体的な要項を示した。それによると、場所は福聚殿の北側、構内西北の高台に鉄筋コンクリートの二階建（一部中二階）、これに続く改装部分は三階。面積は新築部分一、五四六㎡、改装部分八三三、四㎡、合計二、三九七㎡余、図書館としてはかなりの規模ということができる。これを五十年度に着工して年内に竣工せしめる予定で、工費は三億一〇〇万円であった。何しろ福聚殿建設のあとであるから、直ちにこれに取組むことは容易な業ではない。思い切った決断であった。



新　図　書　館

第二　新図書館の概略

新図書館は昭和五十年九月に着工、翌五十一年六月に落成し、夏季休暇中に旧図書館から、蔵書備品等一切を移転しておわり、校庭からの階段工事、周囲の樹木に対する手入れ等、環境を整備してから、十月二十日を以て開館した。

新館は三階建て本館と、四層の積層書庫とから成り、この書庫は十五万冊の収納力を持ち、面積は二、九二八m^2、旧図書館の約五倍となった。以ってその規模を察することが出来よう。いま各階の施設配置と蔵書の配架を見れば

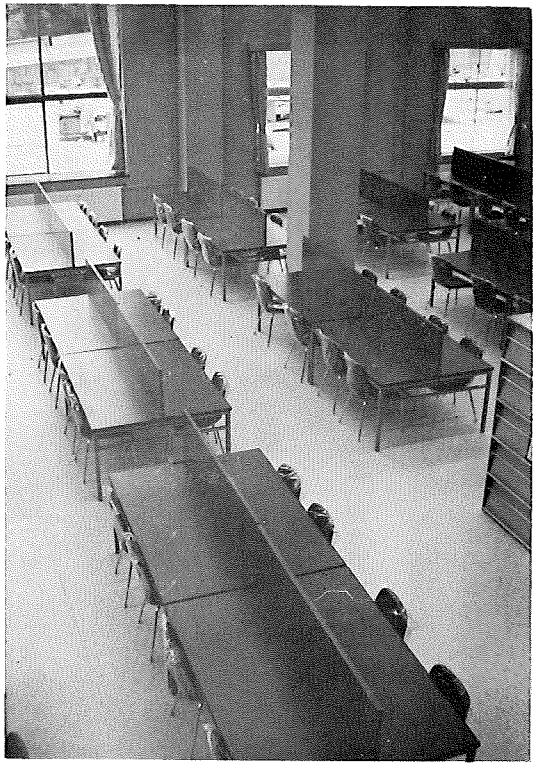
（一階）‖ロッカー室、新聞閲覧コーナー、カウンター、開架閲覧室一一六席（開架図書一六、五〇〇冊、和雑誌一六〇種）レファレンスコーナー二四席（辞書、辞典、年鑑等一、五〇〇冊）事務室、館長室、その他

（二階）‖開架閲覧室八四席（洋事典類四〇〇冊、洋雑誌三三種）図書館学習室など、

（三階）‖閲覧室九六席、特別会議室など、

で閲覧席数は合計三二〇席、旧図書館の二倍以上である。そして、常時一、二階を開放しているが、必要に応じて三階も使用できる。特にこれらの閲覧室は、防音床材を使用しているので、その広い明るい窓と共に、快的な学習の場、研究の場となっている。東北地方の私立大学で独立建築物の図書館を持つものがないといわれるが、本学はその先鞭をつけたわけで、図書館に重きをおいていることを事実において示したものといってよい。

しかしながら図書館の価値は、そこに収蔵する図書及び資料の質と数に依るところが大きい。この点は遺憾ながら



一階閲覧室

まだ不十分たることを免かれない。もっともこれらは年数をかけて始めて可能なのだから、要は今後の問題ともいえるだろう。現在蔵書は約五万冊であるが、これをどのように充実させ、これをどのように運用し活用するかは、図書館に課せられた運営上の大きな課題である。幸い五十一年度は本学に大学院が開設されたので、図書予算の増額もあり、充実の速度も早まると共に、一方社会福祉関係の図書及び資料の収集に特色を示して行くものと思われる。

図書館利用者の数も次第に増加して来ている。昭和四十八年五月は総数で一、三四〇人、一日平均五五人であったが、一年後の四十九年五月には二、〇五一人、一日平均八六人となった。これは本学が東北の各大学に先がけて指定図書制度（各科目の講義と関係ある図書を講義担当者の指定により備え付ける制度、八人の図書委員によって決定される）を採択したせいもあるが、新図書館の開館後は一日平均一八〇人程度に急増している事実は、新図書館建設の大きな効果というべきものであろう。図書館利用の度合いが、学生の質を自ら物語るといわれるが、図書館の管理、サービスに力める半面、これにこたえて、今後学生の利用率が一層高められることを望むものである。

現図書館長は、その図書館経営に経験豊かな竹内利美教授で、昭和四十七年四月以来その任にある。

第三節　大学院設置

第一　大学院開設の念願

いやしくも大学をつくるなら、大学院までとは、誰しもの念願であろう。大学院を持ってこそ、大学の態様は一応整ったものということが出来る。それ故に「大学らしい大学」づくりを念ずる大久保学長にとって、大学院設置は機構の上での最終的な目標といってよかった。既に昭和四十七年九月の理事会において、この事に関し次のように述べている。

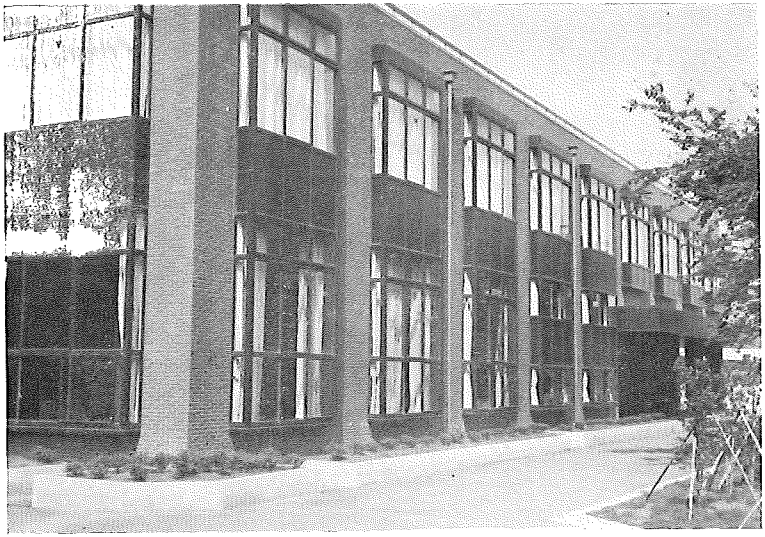


図　書　館（西側から見る）

本学に大学院を置き、社会福祉学専攻の修士課程を設置することは、かねてからの自分の念願である。大学の教育、研究を一層深め権威あるものにするためにも、是非これを実現したいと思っている。ただ設置するに当っては、担当教授に適任者が得られるかどうかが問題である。若しそれが直ちに得られない場合は、とりあえずは専攻科を設置して、すぐれた人材を社会福祉界に送りたいと思う。

これに対し理事会は賛意を表したが、その何れに決定するかについては、人の問題のほかに、物的な施設設備の問題もあるし、情勢判断の上、決定は学長に一任することにしたのであった。この結果、さしあたりは先づ専攻科(既述)を設けることとなり、大学院はしばらく見送られることになったのである。その後、昭和五十年度開設が計画されたものの、第二校舎、福聚殿と大工事が続き、その間附属幼稚園の独立、旧附属であった栴檀学園高等学校の廃止等の問題があって、結局昭和五十一年度に持ち越されることとなった。

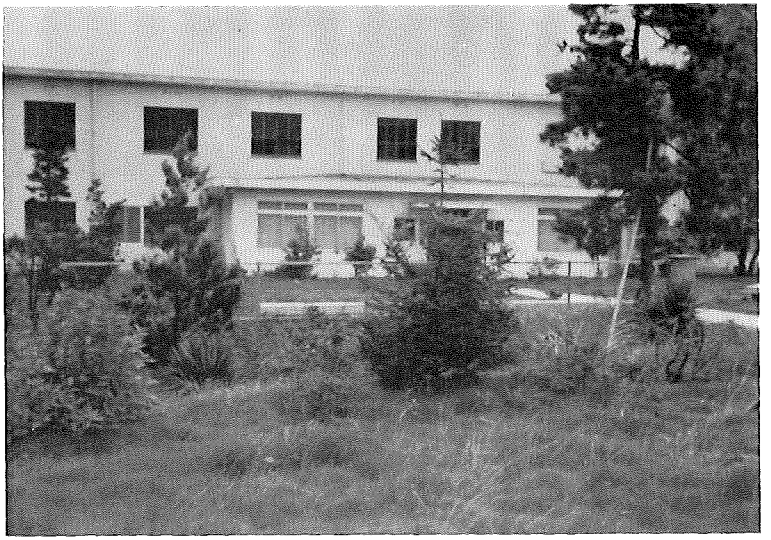
第二　大学院認可

しかしこの間における本学の充実発展は、まことにめざましく、教員組織の強化と施設設備の充実とは、自他ともにこれを認めるに至ったので、五十年十一月になって、いよいよ大学院設置の申請を提出し、翌五十一年三月二十五日に文部省の認可がおりたのであった。これでようやく東北福祉大学の専門大学としての機構は整った。学長の満足のほどは思いやられるばかりである。

これと前後して三月二十九日大久保学長の再再任のことが決定された。学長の過去二期間のかがやかしい業績は、誰しもが認めるところ、有無なく決定されたと伝えられている。

大学院設置の事由は「東北福祉大学大学院は、社会福祉に関する精深なる学術の理論及び応用を研究教授し、その深奥を極めて、文化の進展と人類の福祉に貢献しうる人材を養成する」とあり、この目的達成のために、社会福祉学研究科を新設し、社会福祉学専攻（修士課程）を設けることになったわけである。入学定員は一〇人、収容定員は二〇人、修業年限は二年となっている。ここを修了すれば社会学修士の称号が授与される。

大学院は昭和五十一年四月一日から、旧図書館内に設置され、新図書館の完成後、旧図書館の大々的改造を行なっ



大　学　院　棟

て、爾後ここを大学院棟と呼ぶこととなった。なお、認可と同時に、福祉関係の権威ある専任教員、助手等も増員すると共に、新しい科目も設けられた。中にも図書購入予算は大巾に増額され、社会福祉関係の専門図書並びに学術雑誌の数は、外国図書を含めて大いに強化されることになった。

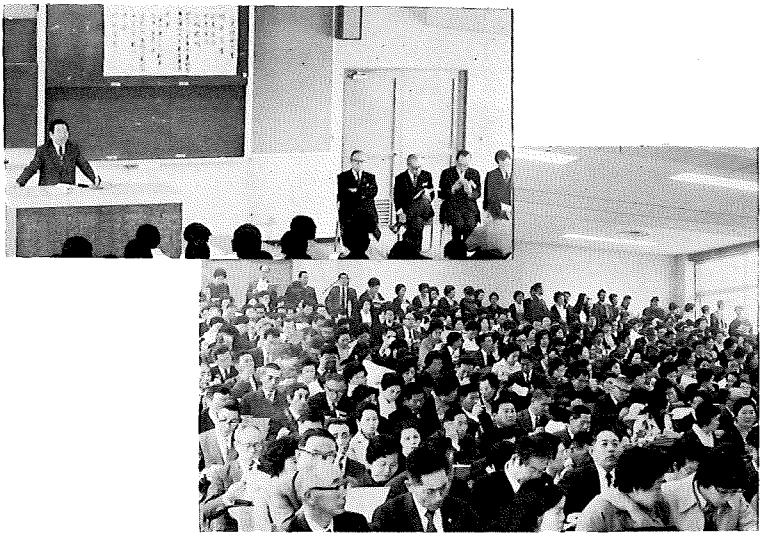
大学院の設置は、大学を権威づけるばかりでなく、学生に対して新しい希望を抱かせるものであった。

第三　社会福祉学科コース制について

これは大学院と直接関係するわけではないが、ここで附言したい。社会福祉部門もその進展につれて、次第に複雑化し、その就職に関連する意味においても、何らかの対応策を必要としている。最も巾広い社会福祉学科において、その感が特に深い。よって昭和五十一年度から、同学科の第二年次から、第一、第二の二コースに分けることとなった。第一コースは従来通りのカリキュラムによって講義を行ない、この方は特に保母課程及び施設関係希望者に向き第二コースは一般企業、教職、行政方面希望者に向くように組まれている。共に社会福祉学科であるから、相互に他のコースの就職範囲に進めないことはないが、とにかく同学科の一の進展というべきであろう。コース分けについては主として本人の希望によって決定される。

第四節　大学後援会の活動

東北福祉大学後援会は、東北福祉短期大学の設置された翌年、すなわち昭和三十四年に、初代会長である安田陸郎教授らの提案によって結成されたのであった。当時は既述の如く、大学は財政難に苦しみ、しかも一方四年制大学昇格を目ざして、悪戦苦闘の最中であったから、見るに見かねた安田教授の救いの手でもあった。だから必然的に後援



後援会総会

会の任務は、大学の財政援助に向けられ、施設設備のうち、後援会の協力によって完成されたものが少くないのである。このように少くとも昭和四十年代の半ばまでは後援会は、その主力を直接的な大学援助に注いで来たといってよいのである。

しかし、大学の財政状況が安定に向って来ると、後援会本来の任務である大学の全般的発展に対するものに向けられ、教員の研究助成、学生の厚生補導、就職の開拓等に力点をおくこととなり、この方面における後援会の活動に対して、大学としては今後一層の期待を寄せている。

特に東北福祉大学奨学基金は、昭和四十九年度から本学に設けられ、勧募の対象は一般人となっているが、後援会は早速これを協力事業として採りあげ、第一期完成まで会長自ら総括責任者として、陣頭に立って募集に奔走している。

この基金は、㈠成績優秀で人物がすぐれ、将来有為の人材となると見られるもの。㈡経済的理由により学業の継続が困難となっているものに対し、年額六万円を超えない範囲で奨学資金を貸与、又は給与することになっている。現在勧募の寄附金はぞくぞく集っているが、とりあえずの目標は一億円、そのうち三千万円に達した時点から業務を開始することになって居り、奨学金の給与は既に始まっている。こ

基金造成の計画は、学生、父兄にとっては関心の深いことと察せられ、この有意義の事業が、予想以上の成功に恵まれることを念願するものである。

後援会の発刊する『後援会報』は、昭和四十七年七月から刊行され、今や第十二号を数える。会長はその後、伊藤秀吉、坂田文治、畠山辰三氏を経て現在中川俊一氏である。

第五節　就職部の設置

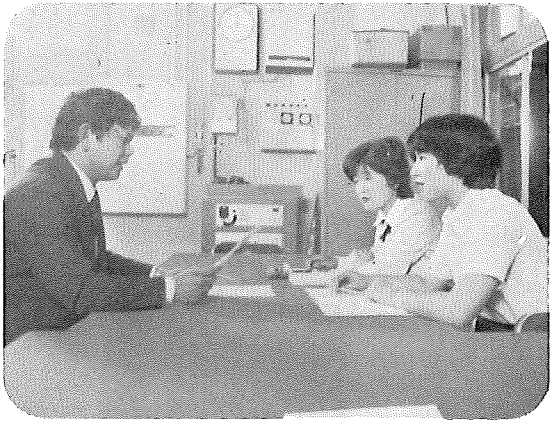
就職といえば学生、父兄の側からいえば最も関心度の高い問題であろう。本学でも早くから就職課を置いて、就職関係の事務の担当をして来たし、毎年関係の教職員がそれぞれ分担地区を巡回して就職の開拓に努力してきた。しかし追々大学の卒業生数もふえ、一方就職戦線にも変動が見られることから、昭和四十七年度から、これを就職部に昇格して、一層適切有効な施策を施していくこととなった。

社会福祉関係の就職は、戦後に生れたものともいえる新しい分野であって、他の職種と異って一寸その大勢をつかみにくい面もあるが、本学の場合は社会福祉関係公務員、施設関係職員、病院関係職員、教職員、或いは企業関係等に分れて就職し、就職率は四十九年度までは、毎年一〇〇%の成績であった。しかも本学卒業生を指定する求人も少くなく、これは先輩の実績と共に、本学の内容が最近社会一般から認識されてきた結果ではないかと、大学当局はもちろん関係者から喜ばれている。

だが就職戦線にも次第に変化があらわれて来た。産業経済界の低成長による求人の落ちこみは、競争の激化を生み地方財政の逼迫と、大学卒業者の帰郷傾向等は一層これに拍車をかけている。本学においても卒業生の漸増と併せてこの傾向は次第に明らかになって来て居り、五十年度からは就職率も多少低下を見せ一〇〇%を割るようになった。

このため就職開拓運動も範囲を拡げ、最近は関東・関西方面にまで足を伸ばしてかなりの成果をあげている。今後急速な景気の回復は望めそうもないので、就職希望者は自ら学力をつけ、競争力を高めるよう自覚してくれることを望む次第である。就職部の資料室は学生が自由に出入して調べられるよう、資料を常に陳列してあるし、就職相談室では、いつでも相談に応じられるよう係員が待機している。特に就職のための対策特別講座は、開催のたびに真剣な受講者で熱気のこもったものになっている。

就職関係は大学にとっても重要な部門であるから、一就職部だけのものとせず、全学、或いは大学関係者を含めて全力をあげて努力して行かなければならない。



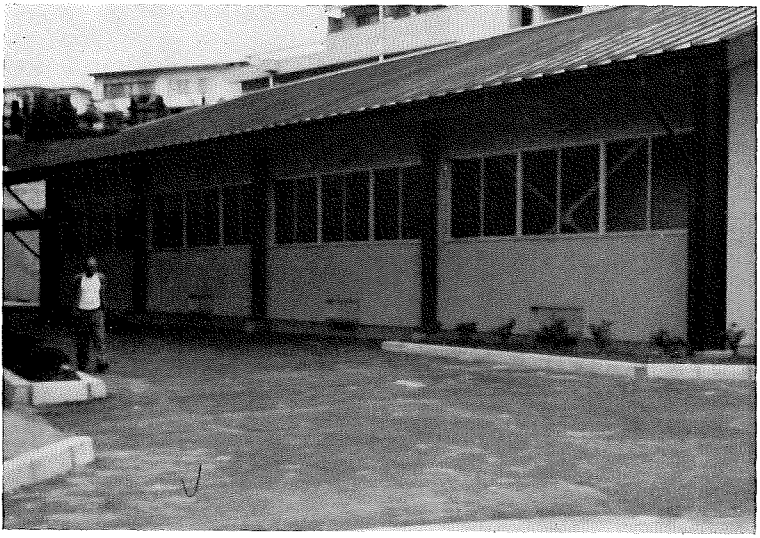
就　職　相　談

第六節　第三体育館の建設

先に大倉運動場の項に、五十二年早々の理事会で、入学定員八〇〇名、総定員三、二〇〇名に増員したことを記したが、増員に対する基準からいえば、校舎の総面積は余裕あるものの、体育授業のための実際に必要な床面積は必ずしも十分ではなかった。就中柔道場は、先の福聚殿建設の際、同好会室が取払われた代償として、旧柔道場を分割してこれに充てたため、第二体育館の北側に接して、旧にまさる広さの新道場をつくった。然し剣道は体育実技の科目に

入っていなかったので、特別な道場も設けられていなかった。然るに剣道部は最近目を見はるばかりの勢いを見せ、東北大会に優勝する等の輝やかしい実績を示しているので、剣道を正式に体育実技に加えることとなり、そのために第三体育館を新築し、体育関係の各部にも利用させることとなった。

建築の場所は第二校舎の北側で、鉄骨、瓦棒鉄板葺平屋建面積三四三、六㎡である。工事はすぐ着工され、五十二年度早々に完成した。その内部正面中央に床の間が設けられ、また入口玄関わきには師範の控室も用意されている。



第三体育館

第七節　新校歌の誕生

第一　本学園校歌の歴史

本学園における校歌の歴史は、遠く明治四十年にさかのぼる。当時の文芸委員が教友会雑誌に「校歌なかるべからず」の一文をのせ、願わくば文芸的にすぐれた名作を以て、愛校の士気を鼓舞せんことをと、満腔の熱意をこめて懇えた。これに応えて石月無外林長が直接、仙台出身の仏教学者、修証義の原作者たる大内青巒居士に依頼して出来たのが、最初の校歌であった。

この青巒居士の作は、宗教的香気に富み、すぐれたものではあったが、何分にも抽象的であり、且つ大正末には発表以来十五年にもなって時代も変って来ている。生徒の気持ちからいえば、もっと学校の現実に即したもの、生徒の心に密着したものがほしかった。

新しい校歌は第二高等学校教授浜田廉先生の作であった。先生は第二中学林創立以来、二高教授に転出するまで、最も生徒の尊敬を受け、且つ最も深く学校を理解していた先生であったから、蓋し校歌の作者としては、最適任といってよかった。作曲は田村信義氏であった。歌詞は深い学殖に裏付けられ、わが校の特色と周囲の景観とを巧みに織込んだものであった。

しかし朽木学長の時代になり、やはりこの名歌も、語句がむずかしく理解しがたい難点がある。校歌は日常親しみを以って歌うべきものであるから、分りやすく書き直すべきではないか。朽木学長はそう判断し、作詞を当時の国語の藤原勉先生に依頼したのであった。藤原氏はなるべく原歌詞の意味を失わず、しかも平易な言葉で書き換え、東北福祉短大開学式の日に発表された。けれども、何となく重々しさがなく、玲瓏たる趣きに欠け、大学の校歌としては物足りなさを感じて来た。それに作曲もまた平凡であったので、今回の十五周年式典を機に、東北福祉大学にふさわしいものに改めたいと学長は心をきめたのであった。

第二　新校歌成る

こうして新しい校歌が誕生した。作詞は本学の扇畑忠雄教授である。扇畑教授は東北大教授から本学教授に就任。これまで「万葉集」に関する著書等も多く、作歌作句多くの業績を持ち、また実際にその指導に当って来た権威者であった。されば、その作品は縹渺たる気品と、馥郁たる香りに富み、よくわが大学の今日をうたい明日をことほぐ趣きに充ちている。左に歌詞を記そう。

東北福祉大学校歌

一、天伝う日の　光さやかに
青葉吹く風　胸にすずしく
丘べに立ちて　見放(さ)くる海よ
命ゆたかに　吾ら学ばん
真(まこと)と法(のり)と　ひたすらもとめ
ここに汲む　思索の泉

二、草の香りの　ただよう径(みち)に
はばたく鳥の　影もあざやか
空ゆく雲の　遠き光よ
道をつらぬく　思い一つに
いさぎよくあれ　吾らが青春
ここに知る　真理の命

三、このみちのくの　安らぎの国
夢新しき　未来のために
永遠(とわ)のしるしと　深く刻まん
人の世の幸(さち)　福祉の心

高き星座の　　かがやきの下
歌うべし　　無限の調べ

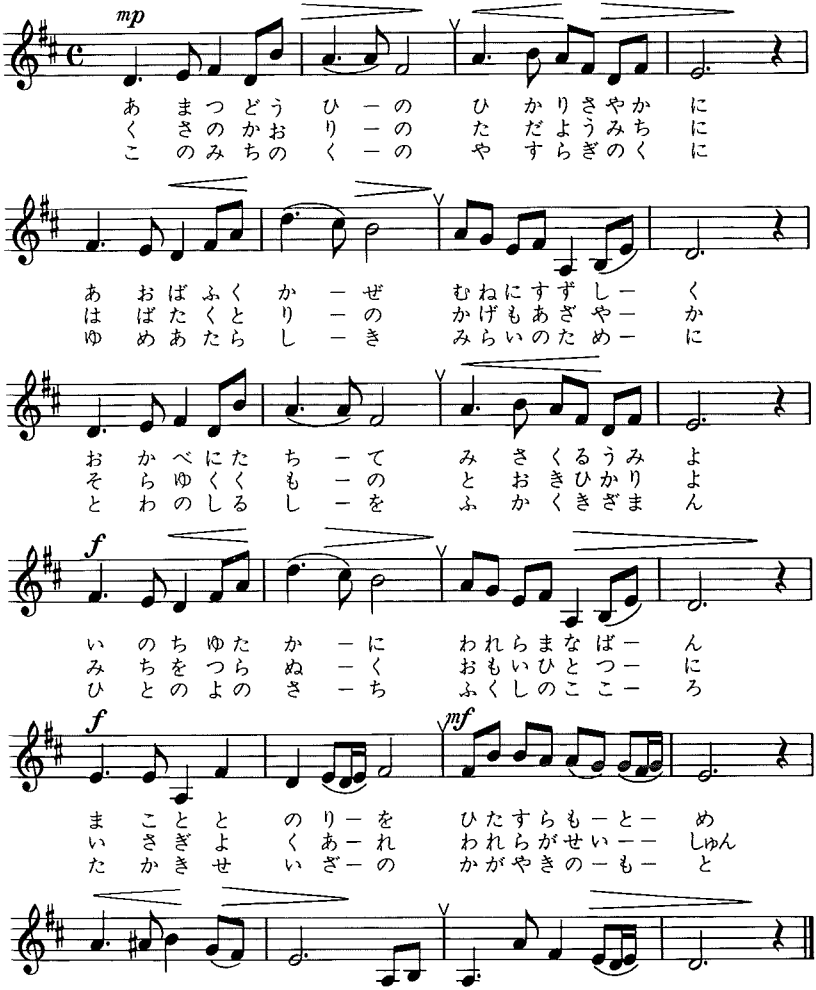
作曲はその道の大家古賀政男氏で、韻律は力に満ちてさわやかである。おのづから歌うことを求めているかのごと。青春の情熱をこめて、正に「歌うべし」。はるかなる思いを「無限の調べ」にのせて、青空にこだませよとばかり、若人よ高らかに歌えと。

新校歌は十月五日、十五周年記念式典で発表されることになった。

東北福祉大学校歌

作詞　扇畑忠雄
作曲　古賀政男

斉唱　感情こめて壮大に



第八節　明日の東北福祉大学

東北福祉大学は、確実な足どりで前進を続けている。まことに喜ばしい限りである。

先にも記したことであるが、大久保学長は、着任以来屢々「大学らしい大学づくり」ということを口にし、今もそれは経営の指針として少しも変っていない。「大学らしい大学」ということばを考えて見るのに、その内容は一般的には学生、施設設備、教授陣、建学の精神の四者に分析されるであろう。よってこの四箇の命題それぞれについて述べるべきであるが、前来の記述との重複を避ける意味で、なるべく省筆に従うこととする。

先づ学生の数については、大久保学長の時代に入ってから、逐年増加を続け、昭和五十二年度においては、遂に着任時の五倍以上四、二〇〇名を超えるに至った。たまたま私学助成法の成立によって、入学定員と入学実員との関係について再検討を要することとなったので、文部省とも交渉し、いずれ正式に決定されることであろう。

次に設備施設についてはこれを省略し、直ちに第三の教授陣について一言しよう。本学の教授陣は、これを結論的に言えば、多くの権威ある知名の学者をつらね、その充実ぶりは、近来各方面から注目されているところである。すぐれた教授陣が大学の評価を高めることは申すまでもないが、同時にそれは大学そのものに、人を惹きつける何ものかがあってはじめて可能なのである。本学がそこまで生長して来ていることは、何としても心強いことといわねばならない。今後、本学の内容をますます魅力あるものに高め、更に多くの人材を招致できることを祈るものである。

最後に建学の精神について少しく述べたい。さきに学長がこのことについて「社会福祉従事者は自らが相互幸福の理解者たると同時に、享受する側に対して、これを理解せしむるよう努力しなければならぬ。この意味において福祉従事者は、社会教育的自覚を持った精神指導者たるを要し、そのためには宗教的体験を身につけることが何よりも肝要である」といっているが、そのような学内の雰囲気づくりに、今後一層の努力を傾注せねばならぬ。このため「仏

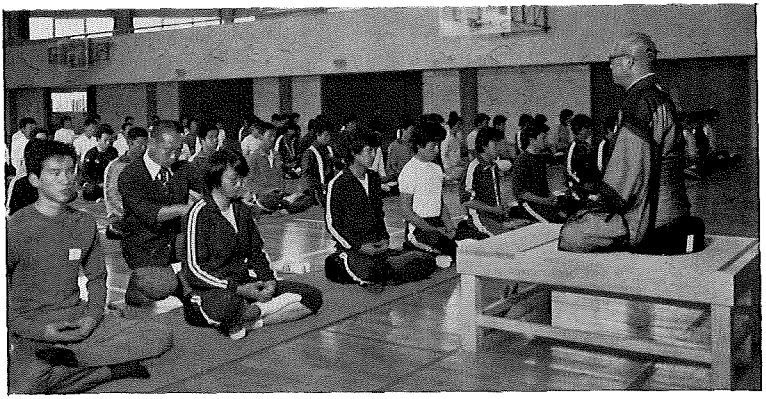
教専修科」を設けて行的実践を促し、また「仏教社会福祉研究所」を置いて、仏教と福祉とのかかわり合いについての研究を進めていることは、既に説いたとおりである。

更にもうひとつ、大きな計画が実現しようとしている。新しい禅堂の建設である。場所は図書館東の丘上、古い松樹の間に木造平屋建て瓦葺の本格的大禅堂で、用材は青ひばの高級材を用い、面積は二六二㎡、禅建築の権威者横山秀哉先生の設計である。玄関を入れば四方に廊下をめぐらし、中央の内堂には、単の数五十二、すわなち五十二人の坐牀が設けられる。恐らく東北一の規模であろう。本年度より新入生全員に対して坐禅を行じさせているが、これを機会にそこから新風がおこりそして拡大されることが期待されている。

曹洞宗はいうまでもなく坐禅を第一義とする。坐禅をすれば即身是仏、坐禅をすれば自分みずからが仏になる。仏と我と、宇宙意識と自己意識これが一体となる。われも仏と同じく慈悲の権化だ。それがほんとうの福祉の心である。それを味わって貰うことが、この禅堂の目的である。いうまでもなくこの事は仏教を押しつけることではない。先ず何よりもその精神を自然に体得していく助けとなることを望んでいるのである。

しかし現実は、必ずしも所期通りには動いてくれないかも知れぬ。当今の青年の心理は、時勢の影響で却て反対の

福聚殿より構内を見る



先づ坐る（福聚殿）

方向にむけて歩もうとするきらいがある。これをどのように引きよせ、理解させ、そして実践にまで持って行かせるかは、今後の大きな課題である。

大久保学長は「福祉とは単に物を与えるだけでなく、そのものについての精神的意義を知らしめ、相手に感謝の気持を起させるよう努めねばならぬ」と説いているが、この感謝の気持の中にこそ、個人と衆生とを結ぶ社会的精神、それは終局的には、不断の精進、すなわち道の実践につながるものがある。福祉従事者たらんとする者はこの事を理解し、行持報恩の誓願をこめ、仏の大慈悲と大智慧とを学びとらねばならない。学長の先に述べた「相互幸福」の観点も、かくの如き態度を指すものと察せられる。仏教において、福祉事業を社会教化事業と呼ぶのも、このような人間の相互関係を重く見ることから来ているものと思う。

道は遠いが望みを高く抱きつつ現時点における福祉の実態を見つめ、絶えず仏教福祉の原点に帰って人間関係の結合をひろめてゆく。そこに「行学一如」の精神を、本学に学ぶ者に生かし、且つしみ通らせて行く道があるものと信ずる。

重ねて言う。東北福祉大学は今後もつねに前進を続けてゆくであろう。しかしながら「建学の精神」に基づく福祉精神の真面目をより広くより深く教育の場に浸透して行くことは、本学の将来に課せられた大きな使命である。この使命達成に不断の精進を続けて行くことこそ、明るい明日に向っての真の前進と言うべきであろう。

あとがき

東北福祉大学が設置されてから、今年で丁度十五年になります。孔子流にいえば、志学の年に相当し、いよいよこれから持ち味を発揮する時機にさしかかったともいえましょう。十五周年記念式典を催すことは、その意味で大いに意義のあることといわねばなりません。今回『十五年の歩み』を編纂することになったのも、要するに開学以来歩み来たあとを振り返って、自らを省みると共に、ここでじっくり腰を落ちつけて将来を展望し、新しい意欲を以て出発しようとするに外ならないのです。

然るにその編さんについて去る三月初め頃、大久保学長から、私に委嘱したいとのお話がありました。しかし、前の『栴檀学園壱百年史』でも、ご期待にそむいた点が多々あったと思っているので、ご辞退申上げたのでしたが、前のことで資料その他について知っているのだから、都合のいいこともあろう。とにかくやってみよ、とのたってのご命令なので、とうとうお引受けすることになったのでした。

学長から「読みやすいものを書いてみたらどうか」との示唆はありましたが、果してそうなっているかどうか。まことに心もとないのですが、しかし挿入写真を比較的多く入れたので、いくらか不出来の補いになっているかと思います。それからもうひとつ、この本はなるべく個人のことは書かない。個人の写真も入れない、ということにしたいとのお話しでしたので、大体そうなっていると思います。しかし学長に関してだけは、大学の経営責任者であり、その中心たる代表者であるから、こればかりはと、自分の考えを通してしまいました。学長のお許しを頂きたいと思います。

何分にも公務の余暇を利用してのことでもあり、且つその間健康を害ねたこともわざわいして、最後は前回同様いやそれ以上に切端つまった所に追いこまれ、何とかまとめ上げたものの、ご覧の通りのものになってしまいまし

た。お恥しいことです。

ただ、この間、学長大久保先生には、たどたどしい私の仕事ぶりを大目に見て下され、原稿にも目を通されて、懇切にご指導を賜わったことは、真に有難いことと心から感謝申上げております。その他、編纂に当って、菅原学監、大石副学監、その他の方々からご援助頂いたこと、また印刷装本の郵弁社の皆さんが、短時日の間に、期日に間に合せて下さったことを深く御礼申上げる次第です。

昭和五十二年九月二十日

山本林識す。

東北福祉大学（栴檀学園）略年表

〔年　月〕	〔事　項〕
明治8・9・1	宮城県曹洞宗専門学支校仙台市荒町昌伝庵境内に設立
〃 23・9・1	専門支校を廃し、曹洞宗小学林及び中学林設置
〃 29・3	仙台市東二番丁宗務支局事務所を用い第二十五中学林設置
〃 35・7	第二十五中学林を廃し第二中学林設置
〃 36・7	仙台市東二番丁北目町角に新校舎竣工
〃 41・1・15	仙台市南鍛治町泰心院境内に校舎移転完了
大正12・6・21	講堂全焼
〃 13・5・2	校舎及び雨天体操場全焼
〃 15・2・13	栴檀中学と改称
〃 15・4・1	仙台市外七北田村西山に新校舎落成移転
昭和20・7・9	仙台空襲、本校木造校舎、寄宿舎等悉く焼失
〃 22・4・1	新制中学校開校
	東北高等仏教学院併置
〃 23・4・1	栴檀学園高等学校開校
〃 24・5・26	財団法人栴檀学園認可
〃 11・26	東北仏教短期大学の計画あり
〃 26・3	学校法人栴檀学園認可
〃 26・12	体育館工事中止となる

〔年　月〕	〔事　項〕
昭和28・4・1	双葉幼稚園設置
〃 30・4・9	朽木正己学園長着任
〃 8・5	栴檀学園中学校廃止
〃 31・6・9	体育館起工、11月竣工
〃 11・15	八十周年記念式典、講堂兼体育館落成式
〃 32・4・1	社会事業学校設立
〃 5	監理棟落成式
〃 33・4・1	東北福祉短期大学開学
〃 4・21	開学式、新校歌発表
〃 34・9・20	大学校舎1号館落成
〃 10	日本社会福祉学会第八回大会本学で開催
〃 35・4・1	東北福祉短大専攻科設置
〃 37・1・20	東北福祉大学認可、四月開学
〃 38・7	喜心寮落成
〃 40・4・1	産業福祉学科増設
〃 12・1	高校々舎三階増築、柔道場、職員住宅等落成式
〃 41・6	大学サークル部室竣工
〃 42・5	学内紛争起る、10月最高潮
〃 11	熊谷学長代理、西川学園長代理任命
〃 43・3・21	朽木学長退任、大久保道舟学長着任

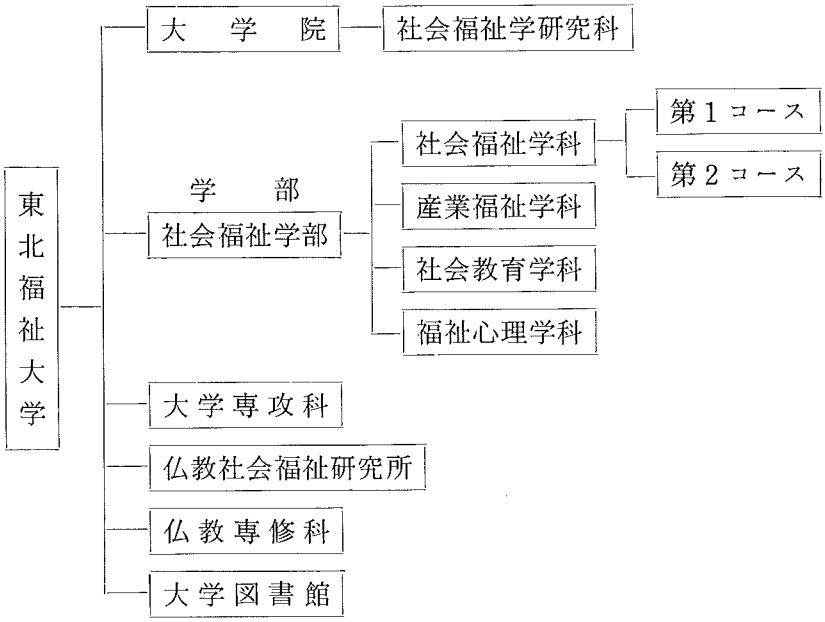
昭和43・5・29　法堂改修工事竣工
〃　7・1　附属高校独立して梅檀学園高校と改称
〃　44・9・26　峰岸学監副学長に任ぜらる
〃　45・4・1　産業福祉学科入学定員五〇名、社会福祉学科同一〇〇名となる
〃　46・4・1　社会教育学科増設、入学定員五〇名
〃　4・1　仏教専修科設置
〃　8　第一号館増築工事竣工
〃　10・1　峯岸副学長退任、副学長制廃止
〃　47・4・1　大久保学長再任
〃　4・1　学生相談室、クラス担任制発足
〃　3　宮城町熊ヶ根大倉グラウンド買収完了
〃　7・1　仏教社会福祉研究所設置
〃　7・1　東北福祉大学通信第1号創刊
〃　7　第二号館（第二校舎）着工、48年4月竣工
〃　10・7　日本社会福祉学会第二〇回大会本学に開催
〃　48・4・1　社会福祉学科専攻科開設
〃　4・1　社会教育学科入学定員一〇〇名となる
〃　8・1　講堂兼体育館着工
〃　49・4・1　附属幼稚園独立して福聚幼稚園となる
〃　4・1　福祉心理学科増設、入学定員五〇名
〃　5・1　研究室棟改修工事竣工
〃　7・8　講堂兼体育館（福聚殿）完工
〃　7・24　難波孫次郎氏作一仏両祖像を「福聚殿」に安置

昭和49・10・3　福聚殿落成式並びに学園創立百周年記念式典挙行
〃　10・3　梅檀学園壱百年史刊行
〃　50・3・31　梅檀学園高等学校廃止
〃　4　講堂棟改造、産業福祉学科実験室とする
〃　9　新図書館着工
〃　51・3　第三号館（第三校舎）着工、9月竣工
〃　51・3・25　大学院認可、四月開設
〃　51・3・29　大久保学長再再任
〃　51・4・1　社会福祉学科に第一・第二のコースを設く
〃　51・5　大倉運動場第二次買収
〃　6　新図書館竣工
〃　52・6　講堂棟二階を化学実験室に改造転用
〃　6　第三体育館完成
〃　10・5　開学十五周年記念式典
〃　10・5　東北福祉大学新校歌誕生
〃　10・5　「十五年の歩み」（東北福祉大学）刊行

大　学　の　組　織

学校法人　栴　檀　学　園

学園長　文学博士　大久保　道　舟



学長	文学博士	大久保　道　舟
学部長	文学博士	黒　羽　　茂
大学院研究科長		塚　本　　哲
社会福祉学科第1コース科長		佐　藤　恒　雄
社会福祉学科第2コース科長		水　野　弥　彦
産業福祉学科長	医学博士	遠　藤　英　夫
社会教育学科長		岡　本　正　平
福祉心理学科長	文学博士	北　村　晴　朗
仏教社会福祉研究所長	文学博士	大久保　道　舟
図書館長	文学博士	竹　内　利　美
仏教専修科主任		西　山　広　宣

教員組織

〔資格〕	〔教員名〕	〔担当授業科目〕
教授（文博）	大久保道舟	宗教学
教授	佐藤恒雄	心理学・教育心理学・宗教心理学・心理学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・演習
教授	奥野泉	統計学・心理統計学・福祉統計学
教授（農博）	越智猛夫	生物学・公衆衛生学・労働衛生実習・小児栄養学・小児栄養実習・演習
教授（文博）	竹内利美	社会教育概論・文化財保護・教育社会学・演習
教授	岡本正平	社会教育史・社会教育論・社会教育行政論・演習
教授（文博）	黒羽茂	歴史学・外国史・社会福祉史（西洋）・演習
教授（医博）	遠藤英夫	環境衛生学・産業医学・生理学・成人保健・労働衛生実習・演習
教授（文博）	塚田毅	教育心理学・臨床心理学・人格心理学・心理学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・演習
教授（理博）	安田初雄	地理学・人文地理・地誌
教授（経博）	木下彰	社会政策論・社会思想史・演習・経済学
教授（文博）	北村晴朗	福祉心理学概論・青年心理学・心理学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・差異心理学・演習
教授（教博）	古籏安好	老人心理学・社会心理学・心理学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・演習
教授	水野弥彦	教育原理・哲学・教育史・演習
教授	稲田大	英語
教授（農博）	中西武雄	産業福祉概論・化学・食生活論・演習・労働衛生実習・自然
教授	扇畑忠雄	文学・言語表現論・言語・演習
教授（文修）	早坂博	宗教学・宗教史・英語・演習
教授（ph.D）	杉本卓洲	哲学・特講・独逸語・演習
教授	塚本哲	社会福祉学・社会福祉概論・演習
教授（文修）	樋口晟子	社会学・産業社会学・演習

教授	内海　正	異常児心理・異常児教育の指導法・演習・異常児教育実習
教授	河添邦俊	異常児教育・臨床心理学・特講・養護内容・演習・異常児教育実習
教授	大阪譲治	社会福祉施設管理論・児童福祉概論・養護原理・演習
教授	佐藤信一	社会教育施設論・社会教育方法論・特講・社会教育調査・演習
助教授（社修）	武永親雄	ケース・ワーク・社会病理学・老人福祉論・社会調査実習・社会福祉学・演習
助教授（法修）	渡辺信英	法学・労働法・市民法・演習
助教授（社修）	花村春樹	ケース・ワーク・グループ・ワーク・社会福祉方法概論・演習
助教授	斎藤雅英	図書館学通論・資料分類法及び演習・演習
助教授（文修）	西山広宣	特講・英語・演習
助教授（法修）	前田正徳	社会保険論・社会福祉法概論・社会法・憲法・演習
助教授	桑原聡子	独逸語・演習
助教授（法修）	大竹　栄	民法・家族法・演習
助教授（文修）	広瀬智一	特講・独逸語・演習
助教授	小野禎一	道徳教育の研究・保育理論・保育計画論・演習
助教授（社修）	小田忠良	社会福祉原論・コミュニテーオーガニゼイション・英語・演習
助教授（政修）	萩野浩基	社会福祉行政論・政治学・行政学・特講・英語・演習
助教授（文修）	鈴木礼子	英　語
助教授（教修）	木村　進	乳幼児心理学・臨床心理学・社会・心理学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・演習・英語
助教授（文修）	小松　紘	ヒューマンリレイションズ・心理学・心理学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・独逸語・演習
講師	高橋俊郎	倫理学・独逸語・演習
講師	大和田直樹	体育実技
講師（文修）	菊地直明	社会事業史・社会調査実習・英語・公的扶助論・演習
講師	須島春男	絵画製作・図画工作・英語
講師（文修）	村井則子	学習心理学・心理学・心理学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・英語・演習

講師（商修）	福地一雄	経営学・労務管理論・労使関係論・演習
講師（文修）	横田信義	歴史学・日本史・社会科教育法・教育実習・演習
講師	小野寺浩三	体育実技
講師（文修）	岡田清一	歴史学・社会福祉史（日本）・社会科教育法・法制史・教育実習・演習
講師	小松洋吉	経済学・経済原論・社会調査法・社会調査実習・特講・演習
講師（農修）	工藤啓	社会保障概論・近代経済史・財政学・特講・英語・演習
講師（法修）	福富哲也	社会福祉法制・行政法・商法・独逸語・演習
講師（体修）	久保健	体育実技・体育及びレクリューション・健康
講師	本田祖芳	禅学
特任教授（文博）	矢島羊吉	倫理学
特任教授（文博）	吉田賢抗	東洋倫理学・特講（中国哲学史）・演習
特任教授	伊藤貞司	英語
助手	畠山英子	労働衛生実習
助手	西野美佐子	心理学実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
講師（兼）（経修）	細江達郎	カウンセリング・犯罪非行心理学
講師（兼）（経修）	森健一	社会保障概論
講師（兼）	佐藤美恵	ピアノ・音楽Ⅰ
講師（兼）	椿鈴子	ピアノ・音楽Ⅱ・音楽リズム
講師（兼）（理博）	田辺健一	地誌・人文地理
講師（兼）	足利量子	特講（M・S・W）
講師（兼）	高槻英男	特講（教育法規）
講師（兼）（医博）	江島達憲	精神衛生
講師（兼）	大原美治	参考業務及び演習・資料目録法及び演習・図書館資料論
講師（兼）（教博）	雪江美久	視聴覚教育・生活構造論

講師（兼）（文修）	原田隆吉	図書及び図書館史・資料整理法特論
講師（兼）	黒田一之	青少年の読書と資料・図書館活動
講師（兼）	村田良一	教育原理
講師（兼）（文修）	本田仁視	心理学実験Ⅰ・Ⅱ・英語
講師（兼）（文修）	森博	社会学原論
講師（兼）	佐藤信重	体育理論
講師（兼）（文博）	田代不二男	児童福祉学概論（院）
講師（兼）（文修）	小森久	身体障害者福祉論
講師（兼）（文修）	野村秀世	独逸語
講師（兼）	林希樹	労働基準法
講師（兼）	安藤敏夫	労働衛生法規
講師（兼）	曽根善博	労働衛生工学
講師（兼）（医博）	本郷嘉男	小児保健・病理学
講師（兼）（文修）	福地明子	英語
講師（兼）	ジョン・W・スティーブンス	英語
講師（兼）	小田清治	社会倫理学
講師（兼）（医博）	萱場英吾	救急措置法
講師（兼）（政修）	油川洋	マスコミニケーション・特講
講師（兼）（文修）	石沢志郎	ケース・ワーク（前期）
講師（兼）	片山昭男	ケース・ワーク（後期）
講師（兼）（法修）	工藤豊	経済法・独逸語
講師（兼）（文修）	大山正博	心理学実験・心理療法
講師（兼）（教博）	内田芳夫	心身欠陥学
講師（兼）（医博）	石井厚	精神医学
講師（兼）	石川智亮	成人指導及び青少年指導

講師（兼）（文修）	池上良正	英語
講師（兼）	源了圓	日本思想史
講師（兼）（文修）	丸山欣哉	産業安全心理学
講師（兼）	千葉春治	体育実技
講師（兼）（教修）	松井匡治	教育心理学
講師（兼）（教博）	寺田晃	児童心理学
講師（兼）	大泉計一郎	統計学
講師（兼）（医博）	菅野重道	精神衛生学・異常児の病理・保健

法人機構と役職員

本部　理事長――評議員会――理事会

理事長		芳賀達宗
学園長	学長	大久保道舟
学監		菅原寛一
副学監		大石孝章
学部長	教授	黒羽茂
教務部長	教授	越智猛夫
学生部長	教授	奥野泉
就職部長	教授	内海正
庶務課長		百瀬俊鳳
経理課長		八木哲夫
教務課長	助教授	大竹栄
学生課長	助教授	小野禎一
就職課長	講師	福地一雄

十五年のあゆみ

昭和五十二年九月二十五日　印刷
昭和五十二年十月　三　日　発行

編集者　山本林

発行者　仙台市国見一丁目八の一
東北福祉大学
学監　菅原寛一

印刷所　仙台市中央四丁目八番三十一号
株式会社　郵辨社